

あくタイプはかくとうタイプに弱い

T—

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

(勝てるわけ) ないです。

徒陀顕示様から素晴らしいイラストを頂きました！

アクサキくん可愛いよアクサキくん。

<https://img.syosetu.org/img/us>  
e\_r/307050/70337.jpg

目次

つじぎり	
あくのはどう	
かみくだく	
ちようはつ	
ふいうち	
ダークホール	
なげつける	
うそなき	P P 3 / 20
うそなき	P P 2 / 20

183 166 142 117 78 53 29 13 1

## つじぎり

オレはあくタイプが大好きだ。

何故あくタイプが好きなのかと問われれば、軽く半日は語ってしまう程、オレはあくタイプを愛している。

あくタイプと聞けば、人によつて顔を斬める人もいるだろう。が、少し待つて欲しい。『あくタイプ』という五文字だけで、あくタイプの全てを判断するのは、あくタイプ使いとして許せないものがある。さつきも言つたが話すと長くなるので簡潔に伝えておこう。

先ず見てほしいのは見た目だ。フォルム。

あくタイプは一目見るだけで、全身の毛が粟立つ程にカッコいい。凛とした佇まい。クールだ。イケメンだ。

しかし唯かつこいいだけじゃない。妖艶さも兼ね揃えていればワイルドな面も持ち合わせている。

それに偶に見せる心からの笑顔はキュン死に値するものだ。可愛い。カッコよくて可愛いとか最強。

あくタイプが好きな人の9割はこれが理由だろう。え？ それはどのタイプにも当てはまるだろつて？

黙つてろ。テメエの喉にじごくづきしてやろうか。

そして何よりトレーナーとして外せないのはバトル。そうバトルだ。多くのトレーナーは自分の好きなタイプで、尚且つ強いポケモンを求める。

安心してくれ。お前の所望しているサザンドラとバンギラスはしつかりとあくタイプだ。遠慮せず此方の世界に飛び込んでこい。

あくタイプの残忍で、卑怯で、徹底的に叩き潰すパワフルなバトルは、一度ハマると抜け出せない。背中がゾワゾワする程の気迫、プレッシャーに魅了されない奴は正直言つて感性死んでると思う。エスパータイプに強く出れるしな。

育て易さは：そこそこだな。強いポケモンが多いから、そりや主な

三タイプやノーマルと比べたら少しは大変だ。

だがそこがいいんじゃないか。苦労して育てた先にある、悪友みた

いな絆は一生モンの宝だ。これに閑しちやどのタイプにも言えるがな。

だがドラゴンタイプやゴーストタイプ、どくタイプよりかはマシだろ。ちょっとした悪戯（過激）に目を瞑れば比較的いいける。

こんなまあ、あくタイプの素晴らしさについてつらつらと述べた訳だが：

悔しいかな、完璧で偉大で18あるタイプの中でも最強格のあくタイプでも、弱てnゲフ<sup>ライバル</sup>ングフン宿敵というものが存在する。

その名も、かくとうタイプ

脳筋の二文字を表すような、バチバチの近接戦闘プロフェッショナル集団。物理攻撃はこいつらの為にあるだろと言わんばかりの技構成。

ああ、忌々しい。そのガツチガチに鍛えられた肉体から繰り出される技にはうんざりする。なんだ苦しめられたことだろ。神は人に、いやポケにニモツを与えないという事か。

何よりムカつくのはかくとう使いとバトるとまるで戦隊モノの悪役にされた気分になる事だ。んだあいつら。どいつもこいつも正義の鉄槌を振り下ろすような顔しやがつて。あくタイプが何したってんだよ。むし？ フエアリー？ あいつらは知らん。

だが、オレはそんな事でメソメソ泣き寝入りするような三下のチンピラじやねえ。なにも悪者がヒーローに勝つちやいけないなんてルールはない。世の中いつも善より悪が満ちている。どんな時代も悪がこの世を牛耳っているのさ。

だから、今日もめげずに抗つて見せようじゃないか。運命様つてやつによう！

「サイトオオオオオオオ!! オレと勝負しやがれえええ!!」

「また懲りずに来たんですか。私と勝負をしたいのならユニフォームに着替え、ジムトレーナーを倒してからにしてください」

ボールを握りしめ、そう叫んだ。

オレはジムチャレンジャー、アクサキ。

背番号062のあく使い。

絶賛ラテラルジムにて停滞中の、期待の新人（自称）だ。

「はあ…はあ…へへ、漸く、漸くここまで来たぞ…！さあ、観念してオレと勝負しやがれ！」

「観念も何もずっと待っていたのですが。随分と遅かつたですね。トレーニングの一つでもやっていれば良かつたです」

「テメエ…！余裕こけるのも今のうちだ！直ぐに吠え面かかせてやる！」

チクショオ：今回はイケると思ったんだが、またジムトレーナーとのバトルが長引いた。このオレがポケセンを往復する屈辱を、何度も遭わせられるとは…！

だが、今日でそんな辛い日々ともオサラバだ。今日勝つて、さつさと次の町に行つてやる！

「で？今回もまたあの条件をつけるんですか？勝った方の言う事をなんでも一つ聞く、というやつを」

「当たり前だ！今度こそ今まで奢らされた飯代やら何やらをせしめてやる！今から財布の心配しておけよ？オレはお金に関してはキッチリしてるからなあ！」

「そうですね、確かに心配です。私、最近シユートシティにできたケーキ屋さんに行きたいのですが、貴方の手持ちで足りるかどうか…」「オレのじやねえよテメエのだよ！クソツ、ふざけやがって…行け、コマタナ！ぶちのめしてやれ！」

固く握りしめたダークボールを叩きつけるようになげ、中から相棒を呼び出す。

コマタナ。はものポケモン。あくタイプの中でも人気が高く、その

名の通り、全身が刃物でできた最ツ高にクールでイカすポケモンだ。その手から繰り出されるつじぎりやきりさく攻撃には惚れ惚れする。

それに進化するとキリキザンになる。あく使いならサザンドラ、バンギラスに並んでゲットしておきたい一体、今のままで十分可愛くてラブリーだが、育てない訳にはいかないだろ。

相手は：カポエラーか。

「コマタナ、ですか。何度も聞きますが本当にバツチ3つ受け取つたトレーナーですか？相性の事とか、一回一から学び直した方がいいかと思うのですが」

「ふん、舐めるなよ？オレのコマタナは毎日毎日、大岩を相手に特訓して、こうげきを最大まで上げているんだ！攻撃は最大の防御つてなあ！さあ、とくと味わいやがれ！この鋭いコマタナのつじぎりを！」

しかもこのコマタナの特性は『まけんき』。『いかく』持ちのポケモンと相性が良いんだ。

威圧的な鳴き声がカポエラーから飛ばされる。それを食らつたコマタナの身体が淡い青色の光に包まれたのも束の間、直ぐに濃いオレンジ色に変化した。コマタナの掲げる手刀が、ギラリと鋭く輝く。

こうげきランクが一段階降下からの二段階上昇。差し引き一で結果的にこつちのこうげき力が上がつただけ。イケる！イケるぞ！そのまま押し切つてやる！

「今だコマタナッ！つじぎりーーー」

「カポエラー、インファイト」

「え、ちょ」

カポエラーの目に淡い赤色が浮かんだと思った途端、凄まじい勢いで回転キックを連発される。コマタナが溜めた黒い斬撃は、いとも簡単に打ち碎かれた。突き上げた拳が少し下がる。

そのままフィールドの壁に激突して目を回すコマタナ。戦闘不能。

急いで駆け寄り、昨日奮発してかつたげんきのかけらを与えてボルに戻す。すまん、ゆっくり休んでくれ。

「コマタナのタイプははがね あくタイプ。かくとうタイプの技はた

だのこうかばつぐんどころか四倍にまでダメージが膨れ上がりります。しっかりと相手との相性を考えるのも、トレーナーとしての役目ですよ」

「う、うるせえやい！そんな事ぐらいオレでもわかるわ！でもあくタ

イプ使いとして、あくタイプ以外を使うなんてあり得ないだろ！」

「その気持ちはジムリーダーとして痛い程分かりますが、それなら尚更しつかりと作戦を立ててですね：つじぎりだつて、かくとうタイプにはこうかいまひとつ技ですよ。あそこの場面ははがねタイプの技を打つべきです」

まあ、それでも勝てるとは思いませんが。

そう言つてやれやれと首を振るサイトウ。チクショウ腹立つ…！絶対、絶対に泣かしてやる！

コマタナを入れたボールを腰に掛け、もう一つのボールへと手を伸ばす。さつきはこうげきを最大まで育てた。

だが、肝心の技が当たらなければ意味がない。繰り出す前にやられてしまつた。

つまり、速さ、速さだ。あの時オレたちには速さが足りなかつた。

「行けつ、ニユーラ！」

放り投げる。中から現れたのはかぎづめポケモン、ニユーラ。

こおり あくタイプ。

黒い毛並みと赤色の左耳に尻尾、鋭い爪が特チャームポイント徴のポケモンだ。とてもずる賢く、獰猛で脚が速い。親が見てない隙にそのすばやさを活かしてタマゴを奪い取るなど、悪知恵が働く。

よつてしばしばブリーダーから怒りを買い、駆除される事もある。

以上から、とても育てにくいポケモンの内に入るニユーラだが、オレから言わせて貰えればそんな事ない。

どんなポケモンもたつぱりと愛情を与え、真摯に付き合えば仲良くなる。出会つた当初は一悶着あつたが、今のオレとニユーラは切つても切れない固い絆で結ばれているのだ。

でもお前たまにオレでつめどぎしてくんの、あれやめろよ？

「…また貴方は四倍弱点のポケモンを…これは一度本氣で講座を開い

て上げた方がいいですね。次の休み、開けといてください」「なんでだよ大丈夫だよんな事百も承知だから!?確かにニユーラはぼうぎょもとくぼうも高くない。だがどんな攻撃も当たらなければ意味ねエ!ついてこれるかなツ、オレのニユーラのスピードに!行けニユーラ、こごえるかぜ!」

先ずは動きを止めてやる。

オレの指示を受けたニユーラがカポエラーの周りを高速で回り始め、全てを凍てつかせる吐息を吹きかける。パキパキと空気が悲鳴を上げ、カポエラーの身体が霜ついた。青色の光が生じ、動きが鈍くなる。

よし、すばやさ一段階降下!このまま一撃ヒットアンドアウエイ離脱でじわじわと体力を削り切つてや

「カポエラー、でんこうせつか」「ツ?!リ、リフレクタアア!?

声を張り上げる。直ぐさま物理攻撃を通さないエネルギーの壁を貼るよう指示を出しが、間に合わない。

突如、姿が霞む程に加速したカポエラーがリフレクターとニユーラの間に割り込み、重い蹴りをたたき込んだ。

「ニユーラ!?大丈夫か!?

吹つ飛ばされ、苦しそうに声を上げるニユーラ。思わず悲鳴が漏れ出す。きずぐすり片手に急いで駆け寄り、その身体を抱き上げようとして一一一制される。

「にゅ、ニユーラ…お前…」

ゆつくりと、まるでキャタピールの行進の様に遅く、しかし確実に立ち上がりしていくニユーラ。その身体はボロボロで、美しい黒い毛並みは泥を被り霞んでいる。

だが、その目はまだ獰猛に光っている。まだ行けると、オレに伝えてきている。ニユーラがこんなにも頑張っているのに、ここでニユーラの気持ちを汲み取らずにバトルを終わらせるなんて、あくタイアップ使いとして、いや、一トレーナーとしてあつてはいけない事だ。

オレ、お前の事を甘く見ていたよ。今の行動は、ニユーラを信じて

いないも同然だつた。へへつ、トレーナーとして恥ずかしいや。取り敢えず面白くない茶番を見せられてるかの様な目えしてるサイトウ、お前は潰す。

「ニユーラ、まだ行けるな？すまねえな、お前を信じてやらなくて。許してくれ。よーしこれからだ。あの澄まし顔に一発叩き込んでやろうぜ！」

『――！』

だから、今度はこつちの番だ。

雄叫びを上げる。オレも、ニユーラも。フィールドに響き渡る程、声を張り上げる。

ニユーラの手に黒いオーラが溜まる。漆黒の斬撃が渦巻く。

ギラリと、かぎづめが煌めいた。

「殺れ！つじぎりいい！」

走り出したニユーラに指示を飛ばす。完璧なタイミング。オレとニユーラの絆が生み出した結果。その凶悪な一撃の、なんと美しい事か。ああ、惚れ惚れする。

そのままカポエラーへ肉薄し、黒の残滓を空中に撒き散らしながら凶刃を叩き込もうとして。

「カポエラー、インファイト」

「え、いやおいどうしたニユーラまでまで戻つてくんの嘘だろなんでだよ今いい感じになつてたじやゴハア?!?!」

炸裂した。思わず涙が出るほど綺麗に。

「トホホ…今月厳しいのになあ…」

「ふむふむ、これも美味しいですね。あ、これも美味しいです。頼んでいいですか？頼みますねすいません店員さん、これとこれと、あとこれお願ひします」

「お前は鬼か？少しば遠慮しろよ」

「大丈夫です。私がこんな風に接するのも貴方だけです。貴方は私の特別なんですよ」

「主に財布としてだろふざけんな。変な事言つたつて乗せられやあしねえぞオレは」

「もう、そうですか。私は嘘は言わないのですが。因みに貴方は食べないのですか？」

「オレは甘いのが苦手なんだ。胃がムカムカするからな」

「そうですか。人生損してますね」

そう言つて残りのショートケーキを口に放り込むサイトウ。モキュモキュと頬張り、身体から幸せオーラを放つコイツの姿は、確かに一定のファンに需要はありそうだ。

オレには何が良いか分からんがな。相変わらず無表情なのは変わらないし、目に光が灯つてねえし。てか人生損してますねは言い過ぎだろ甘い物の比率デカ過ぎない？

「しかし今日のバトルも惜しかつたなあ…後もう少しで行けると思つたんだが…」

「笑えない冗談ですね。あの状況を見てそんな事宣えるなんて…昔頭を強く打つた事はありませんか？私の知り合いに腕の良い医者がいるので、今度見て貰いましょうか」

「ナチュラルにバカにすんじゃねえよこの野郎。今日のはホントに惜しかつたつて。なーコマタナ、ニユーラ。お前らもそう思うよな？」  
横にいるコマタナとニユーラの頭を撫でながら、同意を投げ掛け  
る。不思議そうに此方を見上げる二匹は本当に悪魔級の可愛さだ。

はあ～尊い。コマタナが手刀を使ってケーキ切り分けてニユーラに上げてるのマジ尊い。あくタイプ最高。例えバトルに負けてもあくタイプという事だけで実質勝つてるみたいな所ない？あるよね？

(威圧)

「はあ…しかしいつになつたら次のジムに行けるのやら…次も次で  
フェアリータイプのジムだし、結構キツいんだよな…」

「んぐんぐ、一番早い解決方法は他のタイプを使う事だと思うのですが」

「じゃあテメエはかくどうタイプ以外のポケモン使えって言われたら素直に使えるのか？あ？」

「専門には劣ると思いますが一応使えない事もないかと」

「マジかよ凄いな」

流石、ジムリーダーは伊達じやないつて事か。オレ今から他のタイプを使えって言われても無理だわ。扱える気がしねえ。

ホント、どうすつかなあ…修行しかないのはわかんだけどさ…

「…ん？どうした？」

はあ…と、ため息を吐くオレの袖が引っ張られる。クイクイと小刻みに伝わるリズムの発信源は、目線を下げた先、コマタナとニユーラ。此方をジット見てくる。心なしか、その瞳は悲しげに揺れていた。可愛い。

「おいおいどうしたんだよ一人とも。ケーキのおねだりか？」

可愛いが、悲しそうにしている姿を見続けるのも人としてどうかと思ふので、理由を聞くべくロトフォン片手に立ち上がる。

「ウオッ」

座られた。二匹同時に膝の上飛び乗られた。小柄な二匹とは言え、合わせたら30Kgある。中々重い。

「ちょ、甘えてくれるのはスゲエ嬉しいし俺的にもウエルカムだけど、重いってイツタア!?え!?なんで!?なんで引つ搔いたのお前!」

脚がキツいので二匹には悪いが降りて貰おうとした所、ニューラに思つくそ引つ搔かれた。

いいから黙つて私の頭を撫でろと鼻を鳴らすニューラ。超絶腹立つ。可愛いから許すけど。てかお前最近オレに当たり強くない?可愛いから許すけど。

しかし珍しい事もあるもんだ、と。

黒く艶のある毛を撫でながらそう思う。普段なら触ろうとするど凄い嫌がつて引っ搔いてくる癖に、今日に限つて自ら触れとすりよつてくるんだから。

ホント、猫系ポケモンつて気まぐれだよな。可愛いから別にいいけど。ああ…癒されるなあおい。

「…ん? コマタナ、これ、オレにくれるのか?」

『…………!』

更にコマタナがアーンしてくるとか、オレ、明日死ぬんじやないだろうか。

自慢の手刀で綺麗に切り分けたケーキを、オレの口に刃が当たらないうよう持つてきてくれる姿に感動しつつ、頬張る。

…うん。甘いのは苦手だが、愛するマイラブリー達の為なら幾らでも食べよう。一旦コーヒー頼んで良い?

しかし、まあ…なんというか。

せつせとオレの為に奉仕してくれる二匹をみてると…

「もしかして落ち込んでるオレの為にやつてくれたのか?」

『…………!』

『――――!』

あ、照れた。

「つうくくく! 可愛い奴だなお前ら! 今日は一緒にベッドで寝るか? ん?」

そんないじらしい姿に我慢出来ず抱きついてしまう。オラオラお前ら暴れんなよ! つたくホントに愛しい奴らだなあおい!

「アハハハ! いってえ! いってえよお前ら! いってえしくすぐつテエ!? 待つてコマタナの刃物が食い込んでる! 食い込んでるつてマジで暴れんな離すから!」

強く抱きしめ過ぎてコマタナの全身刃物が腕にブツ刺さった。あまりの痛さに反射的に離す。

そのまま二匹はオレに威嚇した後自分のボールに入つてしまつた。解せぬ。いや解せるけど。

「クソオ…ちょっと甘い顔したと思つたら直ぐに攻撃的になりやがつ

て…そこが良いんだけどな。帰つたら死ぬほど特訓と称してじやれついてやる。…で? テメエは何してんだサイトウ? 取り敢えずその手にある皿とフォークを静かに置け?」

「いえ、大した事じやないです。唯少し、貴方にケーキのお裾分けをしたいと思いまして」

皿にナイフが当たる音に、数少ない客の話声、そして微かに豆を炒る音が響く。寂しくなつた店内に、糖に染まつた口を潤そうとコーヒーに口づけて。

目線をずらした直ぐ先に皿とフォークを持ったサイトウが映し出される。思わずコーヒー吹きそうになつた。てか何言つてんだこいつ。

「話聞いてたか? オレ甘いもの苦手なんだよ」

「…このチーズケーキはとても絶品でして、思わず頬が落ちるかと思いました。はい、アーン」

「いや話聞けよ!? オレホントに甘いもの苦手なんだって!」

「かくどうタイプ使いとして、あくタイプに負ける訳にはいきません。さあいざ尋常に、勝負」

「ホントに何言つてんだテメエ!?! てか近い近い近いツ!?!」

「インファイトは超接近戦闘(インファイト)と書きますので近いのは当然ですが。もれなく今の私はとくぼうとぼうぎよが一段階ダウンです。大人しくしてください。ハイ、アーン」

逃げようと席を立とうとして、ガツチリと肩を掴まれる。更にそのままオレの関節やらなんやらに身体を当ててきやがつた。完璧にキマッてるのだろうか、ぴくりとも、動かせない。

てかガチで顔が近い…! 砂金のように煌びやかな髪やら、程よく濃くて健康的な褐色肌やらが全身にぶつかってきて、クソ、女特有の良い匂いが…!

お、落ち着けアクサキ…こいつはオレの宿敵なんだ。超えるべき壁。動搖するな動搖するな…あくタイプ使いとして、こんな情け無い形で負けランねえ! ゼットえくわねえぞオレは! 隙見てその澄まし顔にコーヒーぶっかけてやラア!

結果だけ簡潔にいうと、オレは盛大に砂糖を吐く（物理）を体験し、即落二コマみたいなセリフを言う羽目になつた。  
かくとうタイプには勝てなかつたよ‥。

## あくのはどう

オレはあくタイプが大好きだ。

何故あくタイプが好きなのかと問われれば、軽く半日は語つてしま  
う程、オレはあくタイプを愛している。

あくタイプと聞けば、人によつて顔を顰める人もいるだろう。  
が、少し待つて欲しい。『あくタイプ』という五文字だけで、あくタ  
イプの全てを判断するのは、あくタイプ使いとして許せないものがあ  
る。

そんなI LOVEあくタイプと街中で叫ぶ事も辞さないオレ。

我が宿敵、サイトウをぶちのめすべく、今日も元気にララテルタウ  
ンでバトルを…と思っていたが、今日はお休みだ。

何故なら…

「ヤローの兄貴！これ此処に置いとけばいいっすか!?」  
「おー頼むよー！」

ここは、段々畠の間に家が並ぶターフタウン。

オレは今、旅費を稼ぐ為に絶賛バイト中である。

「つ、疲れた…！」

ソルロックも高々と畠を浮くお昼時、どかりと僕の上に腰を下ろ  
す。巻き上がつた藁とウールーの匂い。思わず噎せ返りそうだ。実  
家のメリープ牧場を思い出すぜ。

「朝の6時に起きて、ウールーの世話に小屋の掃除、畠を耕して野菜を  
取り、直売所まで運搬その他諸々…！クソツ、ポケセンでの勧誘が余  
りにもフワフワしてたから騙された…！ヤローの兄貴見りやわかん  
だろ、オレのバカ！」

こんな大変な目に遭つてるのも、全部あいつの所為だ…！あの野郎  
サイトウ

遠慮もせずにボコボコケーキ食いやがつて、お陰で今月めちゃくちや  
厳しいわどうしてくれんだッ！

「昼飯もこれっぽっちしか買えねえしよお、ホント、チャレンジャー支  
援ホテルとかがなけりやどうなつてた事やら…なあ、コノハナ！次は  
あの褐色銀髪をぶつ潰してやろうぜ！」

『……』

お陰で今日の昼飯はおにぎり三つと沢庵だけだ。

隣で座っていたコノハナがオレの気持ちに合わせてガツツポーズ  
をしてくる。

動きに合わせて頭の葉っぱが揺れる姿はなんとも言えないものがあ  
り、そのまま疲れているオレの後ろに回つて肩やら腰を叩いてくれ  
る姿に父性が湧いてきた。とても葉っぱで笛作つて音色で人を不安  
にさせるポケモンには見えない。

ごめんよこんな不甲斐ないトレーナーで。お前にはもつと美味し  
いもの食べさせてやりたいんだが、ほら、おにぎり二つ食つていいぞ。  
お水もしつかり飲め。

「…はあ…疲れたなあ…」

しかし、最近ため息を吐くことが多くなつたと。

おにぎりを頬張るコノハナの頭を撫でながらそう思う。

ため息を吐く理由、心当たりは…ありすぎて困るが、一番の要因は  
バトルの勝率が悪いと言う事だろう。

昨日だつて…

『やいサイトウ！今度こそバツチ貰つて今まで奢られた分きつちり返  
してもらうからな！いけ、コマタナ！アイアンヘッdーー』

『インファイト』

『え、ちよまつ、コマタナ！クソツ、ニユ、ニユーラ！コマタナの仇を  
とつたーー』

『インファイト』

『ノータイム!?おま、ふざけッ…チクショウツ！相手はぼうぎよとく  
ぼう二段階下がつてんだッ、頼むコノハナ、一げkーーー』

## 『インファイト』

『ちよつと待てやアアアアアア！？』

なんて事になつて、一日中買い物に連れ回されたからなあ…。

何が「か弱い乙女に荷物を持たせる気ですか」だよ。お前全然か弱くないじやん。なんだつたらオレより力強いじやん。

「何より凹むのは、その後オレより全然年下のガキ二人が簡単に勝つた事だよ。なんだよサイトウのやつ、簡単に負けてんじやねえぞ…」確かに、あの二人はチャンピオンから推薦を貰つたトレーナーだった。今年のジムチャレンジからトレーナーになつたそつだが…とてもルーキーとは思えない。

バランス良いチーム編成、技構成。力強く育てられたポケモンに、的確な指示。上位トレーナーになる為に必要な全てが詰まっていた。特に凄かつたのは、あのニット帽を被つた女だ。あいつはヤバかつた。

まるで未来でも見えてるのではないかと思うほど、サイトウの交代ポケモンを読み、相性の良いポケモンに入れ替えてくる。

道具と特性を駆使して、爆発的に能力を上げ、一般的に使い辛いとされている技同士を組み合わせて、一方的なバトルに持ち込む、など。トレーナーのポテンシャルとして、規格外だった。

「ポケモンも六体所持していて、どれも実戦で使用出来るくらいに育つてんだろう？ジムリーダーでさえ一気に扱える数は五体が限界って言われてるのに、チャンピオンと同じ事出来るとか、あのガキ何者だよ。ああく凹むなあ…」

詰まる所、オレは。

トレーナーとしての才能の差を見せつけられて、こんなにも落ち込んでいるのだろう。

幾らレベルを下げているからとは言え、折り返し地点として重要な役割を果たすあのサイトウ相手に、ダイマツクス切らせて勝利するなんて。

未だに奴のポケモン一体すら倒せていないオレからしたら、到底無

理な話だ。

てかなんであいつインファイト打たなかつたんだ。使えよ。あの大事な局面で使つてたら勝てたかもしんねえのに。

「あああああモヤモヤする…！なんだこれ、めつちやモヤモヤする！サイトウが負けてざまあみろって所なのに…！」

何故だろう。今日は調子が悪いのだろうか。どうしてこんなに感情に霞が掛かるんだ。たかが他人のバトル、オレが直接負けた訳じやない。しかも負けた奴は宿敵、サイトウなんだ。

せせら笑う事はあれど、気に食わない顔をする必要はないんだ。

一体全体、オレはどうしたのだろうか。アイツは負けていいんだ。いつも真顔でスカしてきた野郎が負けた。ハハツ、こんなに気持ちの良い事はない。清々するぜ。

…いや、それともオレはーーー

「悩んでるね、アクサキ君」

「男の癖に、うじうじしてみつともないわよ」

「え、あ、ヤローの兄貴に：ルリナパイセン、来てたんすか。お疲れ様ツス」

思考の海から引きずり上げられる。頭を抱えていた俺に被る二つの影。声の方向に視線を飛ばすと、麦わら帽子を脱いで汗を拭つているヤローの兄貴に、ハウタウンジムリーダー、ルリナパイセンの姿が。この感情の事は一旦後回し。立ち上がり、脱帽しながらお辞儀をする。

二人ともジムチャレンジで戦つた相手だし、カブさんの所でバッチを取つた時に送り出してくれた。その後も色々お世話になつてたりするし、二人には足向けて寝れない。

オレは口も態度<sup>人相</sup>も悪いから、せめて礼儀だけはちゃんとしないとな。

「しかしどうしたんすかルリナパイセン。バイト？てことは今日の手持ちはルンパツパか」

「違うわよ。私はヤローとバトルしたかつただけ。最近あんたみたいなのに負け続けてるから、鍛えないとと思つてね」

「先日のサイトウさんと彼女の試合を観て、僕たちもジツとしてられないからねえ。いやー彼<sup>チャレンジャー</sup>女のバトルの才能は凄いもんだなあ」

あーそういう事。ジムリーダーも大変なんだな。

しかし、そうか。

ジムリーダーである二人の目からしても、あのガキは異彩に見えるのか。

案外自分と同じ考えという事に安堵しつつ、反面。

ジムリーダーさえ鍛えようと考えるあのガキとの差を、再度はつきりと見せつけられた気がして、身体が重く感じやがる。

「てことで、今日はここまでにするんだな。はい、お給金。どうもありがとうね。君もコノハナもしっかり働いてくれたから、とても助かつたなあ。またよろしくね」

「あ、うつす。こつちこそまたよろしくお願ひします」

取り敢えず、これと後数回働けば次の振り込みまで耐えられるか。思考を強引にズラす。

コノハナをボールに戻し、身支度を整える。思つた以上に余つてしまつた時間、さて、この後どうしようか。

心の蟠りが残つたまま、サイトウとバトルしたつて勝てるわけがないし、何も得られない。今日はワイルドエリアで育成でもしようか。いや、なんならもうホテルで寝ちまおうかな。うん、それがいいな。今日はすごく疲れたし、テンションが上がる気がしない。何やっても失敗しそうな雰囲気がする。こんな日は一日モチベの回復に徹するのが一番だ。今日は、休んでしまおう。

「アクサキ、あんたどうせこの後暇でしょ? ちょっとバトル見て行きなさいよ」

「え?まあ、時間があるつて言つたらあるツスけど、これまた急だな」しかし、そんなオレに待つたを掛けるルリナ・パイセン。

自転車に跨ろうとしたオレを呼び止める。どうやら試合を観ていけとの事。

別にこの後何もないから観ても大丈夫だ。寧ろジムリーダー同士のバトルなんてそう簡単に見れない代物。チケットなしで、

しかもジムリーダー直々に招待してくれるなんてとてもレアだ。

観に行くべき。観に行くべきなんだが：

正直言つて、乗り気じゃない。

なんかもう、今日はダメだ。大好きなバトルでさえ気分が上がりないなんてもう終わってる。二人には悪いが、早くホテルに行つて休みたい。

「誘つてもらつてなんですが、オレ今日はちょっと——」

「よし、スタジアム行くわよ！」

「え、いや、ルリナバイセン？ 話聞いて下さい？」

「どうせあんたのちよつとなんて休むかカレー作るかの二択でしょ。そんなの後でいいわよ」

「んぐつ：バレてたか。

しかし、今日はやけに強引だな。

負けん気でとても気が強い事で有名だが、人の用事・用事？に割り込んでまで予定を入れてくる様な人じやない。

普段ならヤローの兄貴も止めてきそうだが、ニコニコ笑つてるだけで、なんなら地味にスタジアムに続く道へと誘導してくる。本当にどうしたんだろうか。

うしたんだろうか。

だつて——

「——大丈夫よ。あなたの悪い様にはしないから」

渋々道を辿つて行くオレの顔を覗き込んで。

不敵に笑う姿は、かつてない程にカッコ良かつたから。

：本当にどうしたんだろうか。

そう思つてしまふのも、無理はない。

「ダーテング、あくのはどう！」

「受けてシザリガー！ すかさずゆきなだれよ！」

スタジアムに立つ、二人と二匹。熱氣と闘志がここまで伝わつてくる。

視界を埋め尽くすのは色取り取りの技。エネルギーが、縦横無尽に駆け回る。技と技の応酬、そこに加わる司令塔的確な指示、作戦。状況を瞬時に把握できる力があるからこそ映える一戦に、一進一退の攻防に、鳥肌が立つ。

ジムチャレンジの時の様な、課題として出すポケモン達じゃない。ジムリーダーとして、いや、それ以前に一トレーナーとして鍛え上げたポケモン達が、そこにいる。

「ハイドロポンプで牽制、接近してきた所をクラブハンマーで叩き潰しなさい！」

「にほんばれを放つた後にソーラービームを溜めて！その間に扇で砂埃を巻き上げ狙いを定めさせるな！」

しかも使っているポケモンが、シザリガードとダーテングというのが堪らない。

シザリガー、ダーテング。

どちらもあくタイプを所持しており、二人の専門タイプもそれぞれ入っている二体。

最終進化系であるためステータスが高く、物理型が多いが特殊型もいけるという、二刀流スタイルで多くのバトルに起用される、あくタイプの中でも有名なポケモンだ。

また、育てにくいポケモンとしても有名なポケモンである。二匹の進化前はそこまで扱いにくいという事ではなく、たんぱんこぞうが少し練習をすれば捕まえられるレベルなのだが：進化した際に手が付けられなくなり、レンジャーを呼ぶケースが毎年百件にも上る。

よって、シザリガーとダーテングを捕まえているトレーナーはエリートトレーナーと同じ実力があるとされ、育てられるブリーダーは食うに困る事はないと言われている。

つまり、だ。

その二体を手足の様に扱い切り、しつかりと鍛え上げる事ができるジムリーダーの二人は、トレーナーとして最高峰に位置付けられるのだろう。

「ダークテングとシザリガードか…オレも欲しいなあ」

こいつらもあくタイプ使いとしては憧れで、一種の目標みたいなもんだ。

ボールから勝手に出て試合を観戦しているコノハナを見遣る。

：一応、目標の片割れを達成する条件は満たしている。コノハナからダーテングへの進化方法はリーフのいしを使う事だし、進化させようと思えばいつでもできる。

じやあなんで、欲しいなと言つてるので、手に入れようとしないのか。進化させる事が出来るのにしないのか。

答えは簡単だ。

オレに、使いこなせるのがどうか。

それが常に頭を通り、手が止まってしまう。

オレだって、自分を信じたくない訳じやない。今は停滞中だが、腐つても脱落者が多くなると言われている3番目のジムリーダー、カブさんに勝利したトレーナーだ。

一応山場を越えたトレーナーとして、エリートまで行かないにしてもホープよりかは上、所謂中堅に属する実力はあると思つていて。だが、これはあくまでジム・チャレンジャーとしての評価であつて。あくタイプ使いとしては、オレは未熟者にも程がある。

サイトウにいつまで経つても、ポケモンの一體すら倒せないのが良い証拠だ。

あくタイプは強い。18あるタイプの中で、トップクラスに強いと言つても過言ではないほど、あくタイプは強い。それは、頑冥もあるが事実だ。少なくともオレはそう思つていて。

それ故に、難しい。育てるのも、バトルも、全てに何かしらの癖がある。育てがいがあると言えばそれで済んでしまうし、真摯に付き合えばしつかりと答えてくれるというのも、それはそうだが。少なくとも初心者にはオススメされないタイプだ。

まあ、なんというか

ここまでグダグダ言つてきた訳だが、何が言いたいかというと…詰まる所、怖いのだ。

『……！』

オレの袖を引っ張つて、バトルの興奮を伝えてくるコノハナが、進化してダーティングになつた時。

今までと同じ様に、その届託のない笑みを向けてくれるか。オレの言う事を、指示を、最後まで信じてくれるか。

——トレーナーとして、オレを見限らないでくれるか。

それだけが、唯々怖い。

当たり前だが、ポケモンだつて感情を持つ生き物だ。

オレがバトルで勝てば嬉しく思う様に、ポケモンも嬉しく思う。きちんとした好意を伝えてくる奴は好ましく思うし、的確な指示や意見を何回も伝えてくる奴の事は信用する。

じゃあ、逆に負け続ければ？

言うまでもない。オレが地団駄を踏んで悔しがる様に、今こうやって気分が落ち込んで暗くなる様に、彼等にも負の感情が湧き上がつてくる。やるせない気持ちにもなるだろうし、機嫌も悪くなる。

問題は、その溜まりに溜まつた感情の吐き出し先だ。

当然……トレーナーに来るだろう。

何度も間違つた事言つて、失敗を誘発させる上司が信用出来なくなる様に。

弱小チームの敗因は、全て教え方が悪いと監督が責められる様に。ポケモンも、次第にトレーナーが自分を妨げる目障りな存在となつて行く。仲良くなればなるほど、ポケモンは強くなるという話は、ただ道徳を育てる為に言われている訳じやない。

タイプ相性のせいだつて？

そんな言い訳、ポケモンに通じる訳が無い。向こうは例え相性不利でも闘つてくれている。

それで勝てないというのは、結果的にトレーナーの力不足としてこれまで信用を失う事に繋がつてしまう。

カリンさんを見てみろ。あくタイプ使いという事を宣言しておきながら、今まで四天王としての職務を全う出来ているんだ。

完璧に、これはオレの力不足なのだ。

：ああ、本当に今日はどうしたんだろうか

折角好きなポケモンが、最高峰のトレーナーに使われている試合を見れているのに、まるで嘆言を宣う病人だ。

情け無い。本当に情け無い。

マジカルシャインを当てられたかのように、バトルをしている二人と二匹、そして隣にいるコノハナが眩しくて。

少し煩わしく思つてしまつたオレに、嫌悪感と罪悪感が止まらないんだ。

「ちよつとアクサキ、何下向いてるのよ！ちゃんと観てたの!?」

「僕の粘りに粘つた試合、自分なりに良かつたと思つたけど：飽きちゃつたかなあ」

「え、あ、ちや、ちゃんと観てましたよ」

そんな物思いに耽るオレを他所に、どうやらバトルは終わつてしまつたらしい。観戦席に上がつてきたルリナバイセンとヤローの兄貴が、思い思いのことの葉を告ぐ。

しまつた。途中からあまり見てなかつた。最低すぎんな、オレ。「つたく、せつかく私達があなたの為になるポケモンを使つてあげたつていうのに」

「アクサキ君、僕が言うのもなんだけど、ジムリーダー同士のバトルは得られるものが多いよ？ちゃんと観てくれると嬉しいなあ」

「そうよ。あなたがあくタイプだけで勝ち上がりたいって思うなら、今のバトルはちゃんと観なさい。ヤローからはダーニング、私からはシザリガーの立ち回りを学べる絶好のチャンス。そんな事ばっかりしてると、いざこの二匹をゲットしてバトルする際、扱い切れなくなるわよ？あくタイプの事を良く思うのはいいけどね、過信は怪我の元なんだから」

「いや本当、すいません。せつかくのバトルを…今の手持ちでさえ、上手く扱う事ができないっていうのに、ダーテングやシザリガーなんて難しいポケモン、ハハハ…」

「…？」

俯いて、弱音を吐き出すオレに、目を丸くするルリナバイセン。いつもならあくタイプは過信しても良いんだよ、だつてあくタイプだからとか、反論している所なので、拍子抜けなんだろう。

もう、今日は帰ろう。ホントに今日はダメだ。

「すいません、今日はもう帰るツス。試合、あざつした」

二人と目を合わせないように、帽子を深く被り強引に席を立つ。コノハナが不思議そうに二人とオレを交互に見ながら後を付けてくるが、こんな姿をいつまでも手持ちに見せられないでの、ボールに戻した。

そのまま、いやに重たい身体を引き摺りながら、スタジアムの出口を目指して

「——この地方には、十八ものジムがあるの」

足を止める。

背中に投げつけられた言霊、反射的に首を回すと、仁王立ちをしたルリナバイセンの姿が。

バトル前にいつもしているルーティーンの姿勢で此方を見つめてくる。ただ、少しいつもと違う所を挙げるとすれば、表情が柔らかい事か。いや、そんな事はどうでも良い。

会話の意図が掴めない。ジムが十八もある、その事は知っている。だが、何故今それを…?

「ガラル地方のジムにはちょっとしたルールがあつてね、メジャー リーグとマイナーリーグに分けられるの。十八人いるジムリーダーが競い合って、上位8名までがメジャー、それ以下はマイナーと言う感じで。まあ、今年は少し例外で、メジャーが十個あるんだけど、そこは置いといてね」

勿論、私もメジャーリーグに入っているジムリーダーよ？

そう言つて、尊敬しろと言わんばかりのドヤ顔をオレに向けてくる。それが、どことなくツボに入つてしまつて、力なくも笑みが漏れてしまつた。

話は続く。

「ジムチャレンジャーは、そこから各々の実力に合つたジムを受けて、

バツチ八個の獲得、本戦への出場、果てはチャンピオンを目指すの  
……突然だけど、ジムリーダーの仕事つてなんだと思う？」

本当に突然だな。唐突に提示された質問を、ゆっくりと咀嚼する。

……ジムリーダーの仕事、か。

「ジムチャレンジャーを、倒す、とか……？」

「うーん、半分アタリで半分ハズレね。確かにジムチャレンジャーを

倒すのも仕事に入るのだけど、正確に言うのならば：

——選抜かしら」

「選抜？」

「そう、選抜」

倒す事と、それの、何が違うのだろうか。

頭の悪いオレにはよく分からないが、それをそのまま口にするのは  
憚られる。きっと、何かが違うのだろう。

「私達はね、常に挑戦者に壁を設けるの。それも、見上げる程高くな  
れば、飛び越えられる程低くない。必死になつてよじ登る事が出来る  
ギリギリのラインをついた、そんな壁をね。もし倒す事が目的な  
らば、わざわざ挑戦者に合わせたレベルのポケモンを出す必要はない  
でしょう？」

：確かに、そうだ。倒す事が目的なら、オレの時もそのシザリガード  
を出していれば良い話。わざわざポケモンも三体にしなくていい筈  
だ。

「相手に合わせたポケモンで、トレーナーとしての真価を測り、更なる  
高みへと登り詰める補助をする……それがジムリーダーの仕事だと、私  
は考えているの。

でも、そのためには——勝利の喜びを与えるくてはならない。

……この意味、分かるかしら？」

つまり私達は：

「負ける事を必要とされるトレーナーってことよ」

「——」

息を飲む。ゴクリと喉がなる。蒼い瞳に、射抜かれる。

此方をどこまでも真っ直ぐ見つめてくるそれは、まるで広大な海に

全てを曝け出しているかの様な錯覚を起こす。

：いや、実際見抜かれているのか。

「勿論、バトルはバトル。ジムリーダー以前に一トレーナーとして本気で望むわ。本気で勝ちに行く。

——それでも、負けてしまう時は負ける。

よじ登れる人はどんどんと私を踏み台にして登っていく。それを私は是としなければならない」

——当然、ポケモン達にもそれを強要する。

どくり、心臓がなる。確実に核心についてくる言葉に動悸が早まる。

そんな事をしてしまえば、ポケモンが信用してくれなくなるじゃないか。ポケモンとの間に亀裂が入つてしまう。負け続ける司令塔など、彼らにとつて必要——

「つたく、うじうじと男の癖に、みつともないわね」

ガバリと上げた顔に、ふわりと潮の香り、頬を撫でる。視線に絡まるのは、やはり海のように綺麗な青である。

「あく使いが、あくのはどうを恐れてどうするのよ」

全てを、押し流してくれた。

「さ、こんな長くてしみつたれた話は終わりっ！さ、アクサキ、もう自分がやるべき……つてもう居ない。挨拶ぐらいして行きなさいよ……」

「それは無茶の話だなあ、ルリナさんが焚き付けたお陰で、彼、すつかり火がついちゃつたんだな。このまま勢いでワイルドエリア、突つ切っちゃうんじゃないかな？」

「もう、何から何までピンキリな男ねアイツ……リーグスタッフに一応連絡入れときましようか」

「それが良いんだな。して……どうするルリナさん？勢い付いてるチヤレンジャー達に負けないためにも、もう一戦……今度は負けるつもりはないんだなあ」

「あら、望む所よ」

そんな二人の会話が霞む程、気付いたら走り出していたオレ。挨拶もせずに飛び出してしまった。衝動に突き動かされて、勝手に身体が

動いたとはいえ、だいぶ失礼な事をしちまつた。後日、お礼も兼ねて詫びをしよう。

腰にかかる黒と緑のカプセルに触れる。

ぐんぐんと風を着る音、もうやるべき事は、決まっていた。

「あ」

晴れ渡る蒼い空、暖かなそよ風、漂う自然の香り。コロコロと気候が変動する特徴を持つこの地域からしたら珍しい、絶好のワイルドエリア日和。

キャンプグッズを片手に、鼻歌を歌いながらスキップをしていた矢先。

何故かカイリキーと組み手をしている、サイトウと、ばったり。いや何やってんだこいつ。ポケモンと殴り合いて。カントーの四天王シバジやあるまいし、薄々感じていたが、やっぱこいつ頭の方がちよつと：

「何か失礼な事考えていませんか？」

「はつ、なんのことだか」

しかし宿敵のあたおかな一面を見てしまつた反面、これはナイスタイミングもある。この二日間、ワイルドエリアとヤローの兄貴の元で修行を受けた成果、今発揮できる絶好のチャンス。

見てろよサイトウ、今日という今日こそは度肝を抜いてやる……！  
「……」であつたが百年目！ 今日こそテメエをボコボコにして、今までの金全部返してもらうぜ！ 残念だつたなサイトウ、今日ここでオレに

会つちまつたのが運の尽きだ！これが公式戦じゃねえ事が惜しまれるぜ、なあおい？」

「正確には私たちが出会つてから流れた月日は二ヶ月と七日、十三時間とちょっとですね」

「え、あ、そうなんだ、早いな、もう二ヶ月も経つたのか…ん？あれ、でもジムチャレンジが始まつたのつて、一ヶ月半前くらいじゃ…つてそんな事はどうでも良いんだよッ!?さつさと準備してオレとポケモン勝負しやがれ！」

てか十三時間とちょっととか。サイトウも冗談なんて言うんだな。全然面白くねえぜ。

「あと運の尽き、と言いましたが、全然運尽きてないです寧ろアルセウスに押んで良い程に運がツイてます」

「どうでも良いだろそんな事!?早よポケモン出せや！」

「どうでも良くはないですね、今私と貴方が出会つているこの時間に、どうでも良い事など無いのです。そのどころ、しつかりと教えてあげなくては」

チツ、こいつさつきから訳のわからんねえ事ばつか言つてやがる。ポケモンと殴り合いなんてするから、頭逝かれちまつたんじゃないのか。

「クソ、ラチがあかねえ！もういいさつさとやるぞ！  
出てこいダー・テ・ン・グ！」

『――!!』

腰にかかつているダークボールを投げる。中から飛び出し、雄叫びを上げるはダー・テン・グ。

コノハナに、リーフの石を使つた姿。

吹き上がる旋風、目を細めるサイトウ。どうだ、カツケエだろ？昨日までのオレだと思わない事だな。

「ほう、ダー・テン・グですか…コノハナ、進化させられたのですね」

貴方には、まだ当分先の話だと思つていました

そう言つて、油断なくファイティングポーズに移行したかと思うと、ボールを投げるサイトウ。選出は、カボエラー。

「おいおい、オレを誰だと思っているんだよ。あく使いのアクサキ様  
だぜ？ダーテングなんてお茶の子さいさいよ」

「つい先日まで、進化による命令違反など恐れていた癖に、どの口が言  
うのやら…減らず口は私が塞いであげましょうか」

「はっ、余裕ぶつこいていられるのも今の内だ。オレのダーテングを  
甘く見てると痛い目あうぜ？それになあ…」

あく使いが、あくのはどうを恐れちゃみつともねえだろ？

「いくぞダーテング、あくのはどうツ!!」

オレ達の、初陣が幕を開けた。

「因みに私、ここ二日間くらいお預け状態みたいなもんだったので、空  
気とか一切無視しますね。溜まるものも溜まっていますし、さて、何  
して貰いましょうか」

「え、ちょ、まつ…!?」

## かみくだく

オレはあくタイプが大好きだ。

何故あくタイプが好きなのかと問われれば、軽く半日は語つてしま  
う程、オレはあくタイプを愛している。

あくタイプと聞けば、人によつて顔を顰める人もいるだろう。  
が、少し待つて欲しい。『あくタイプ』という五文字だけで、あくタ  
イプの全てを判断するのは、あくタイプ使いとして許せないものがあ  
る。

そんな、最近あく使いの兄貴がいるらしいバツドガールと友達に  
なつた、あくタイプの達人ことオレ。

今日も元気にラテラルタウンへレッツゴー…と言いたいところだ  
が…多分、今日もジム戦はお休みだ。

何故なら…

「材料はしんせんクリームにモモンのみにしましよう。甘くてとても  
美味しいんですよ」

「は⁈何言つてんだテメエ甘いカレーなんて不味いに決まつてんだろ  
うがツ！漢は黙つてスパイスセットにマトマのみだろおおおオオい  
!?ちょ、ま、勝手に入れんツ、テメエ⁈話聞けやア⁈」

ここは、ガラル名物、ワイルドエリア。

オレは今、カレーを作るため、絶贊サイトウとキャンプ中である。

「ああ甘い…ぐすつ…このカレー甘いよ…」

「何を言つてるんですか。この甘さが美味しいんですよ。ピリツとし  
たカレーに甘いホイップ、最高じゃないですか」

「オレは最近お前が怖いよ…」

コイツの味覚、どうかしてるんじゃないかな？

涙目になりながら、クリームが染み込んだ米にカレーを混ぜて口に  
突つ込む。甘口カレーで舌が汚染された後、おいうちをかけるように

クリーミー米が口内でだいばくはつを起こす。リバースしそうになる所を寸出で抑え、コップを煽り水で胃へと流し込んだ。

やばい、胸焼けがすごい。吐き気がする。まだ二口しか食べてないけどお腹一杯になつちました。

「なあダー teng、オレもう腹が膨れたからこのカレー やんよ。お前カレー好きだろ?」

『……ツ』

「あ、テメエなに材料のきのみだけ食つてんだよ! 羨ましすぎるだろオレにも寄越しやがれ!」

流石に限界が近いのでダー teng にパスしようと思つたら、コイツ材料のモモンのみだけ食つてやがつた…! 羨ましからん…!  
しかも…? あらびき ヴルストを取り出して、扇を振りかぶり…ツ?  
ね、ねつぶうで焼いた、だと…! なにそれ羨ましい?

ダー teng のねつぶうにより程よく焼けた ヴルストは、ジユワリと音を立てながら脂を溢れさせ、キラキラと輝いてる。

普段なら、あー美味しそうに焼けたなあ、ぐらいにしか思はないが、今のおれからしたらそれは垂涎のご馳走、文字通り涎が垂れてきた。  
「ダ、ダー teng? オレたち、ホウエン地方を一緒に旅した仲間だよな?  
? そ、それ、ひとつ、一口くれよ…!」

『……』

「ちよちよちよ!? ちよつと待つてくれよ!? 分かつたツ! 今度買う ポケモン フードは少しお高めにするから! な!? 頼むよ!」

『……』

「おいダー teng う…! 頼むつて…お願いしますつて…オレこのままじゃお腹減つて動けなくなつちまうから…!」

『……ツ』

「く、くれるのか!? ありがとうダー teng! やつぱお前は最高の相棒

パートナー

だぜ! 大好き!」

あくタイプ最高! カツコよくて優しさも兼ね揃えてるとか、やつぱ神タイプですわ。

今にも泣きそうなオレに、 ヴルストを突き出してくるダー teng。

はい、アーン、とでも声が付きそうなこの状況、心からアルセウスに感謝する。

おいおい、わざわざオレの手が汚れないように食べさせてくれるとか。やばい鼻血でそう。

いかんいかん。せつかくダーテングがくれるというのに、待たせてしまつては気が変わる可能性がある。

さあ、ダーテング、お前のその<sup>天</sup><sub>使</sub> ヴルストを、オレの口に突っ込んでくれッ！

「ア～…」

「はい、アーン」

「ンツ…ン？…ンブツ!?」

「美味しいですか？美味しいですよね。私の唾液と共に味わつて食べて下さい。吐き出したらカレーを司る神様から天罰が下りますから」

ホイツ<sup>魔</sup><sub>魔</sub> プカレーを突っ込まれた。

「オエエ…なんで、オレはヴァルストを…て、テメエサイトウ！なんてことしやがる！危うくお茶の間に流せないレベルの、あられもない姿晒す所だつたぞ！」

「いや、なんとなくあのままにしどくのは、貴方が新しい扉を開くように見えてしまつたので。ダーテングには負けられないかなと。あ、泣き顔もいいですね凄いそそります」

「いや訳わかんねえよ！なに新しい扉つて！？って、そんなことはどうでもいい、ダーテング！？すまん、もう一回ーーー」

『…ムグムグ…』

「アアアアアアア…!？」（慟哭）

ヴァルストが、オレが咥える筈だつたヴァルストが…！クソ、こんなあたおかぬ奴にあたおかぬカレー突っ込まれたせいで…！ダーテングも少し待つてくれたつていいじやん…！

「はあ…今日は実質お昼抜きかよ…この後動けるかなあ…」

「何を言つてるんですか、お昼ならここにありますよ。はいアーン」「うるせえもう食うかそんなもんッ！それ食うぐらいだつたらマトマのみ丸かじりした方がまだマシだ！だから、サイトウ…頬むから皿

「持ちながらにじり寄つてくるの、やめろ？ あと一歩でも前に進んだら、戦争が起きるからな？」

「構いません。どうせ勝てますし」

「アア!? なんだとテメエじゃあやつかあ、すいませんすいません嫌だ  
な冗談だろ、あつ、あつ、腕掴むのヤメッ、このツ、相変わらず力強ツ  
!? なんで動かせないのやめてやめてごめんそれだけはやめてなんで  
もするから、なんでもするか――――――!?

「いやはや、美味しかつたですね。またやりましょうか」「うぐつ…ぐすつ…もう胃が何も受け付けない…」

かくとうタイプには勝てなかつたよ……

もうなんなんコイツ、力強過ぎない？腕掴まれたかと思つたらあつ  
という間に組み伏せられたんだけど。皿持ちながら。おかしいよホ  
ントに。ああ、口の中が糖分に侵されている…気持ち悪い…！

「ああダー テング、お前だけだよオレの天使は」

「成る程、なら私は貴方にとつての女神ですね。さあ、抱擁してあげますよ、こつちにきなさい」

# 「黙れ閻魔大王」

ツヤツヤしているサイトウの抱擁をあしらいながら、ダー・テングの純白な後ろ髪に倒れ込む。

あ、あ、う…もつふもふ…！

なんかもう、一日ワイルドエリアを回ったかのように疲れた。まだお昼ちょっと過ぎたくらいなんだけどな…この後やりたい事、てか目的があるんだが…

「そういえば、貴方は何故ワイルドエリアに？私とのジム戦をすっぽかしてまでやる事があるのですか？ないですよね？ねえどうなんですか？」

ああ、そういえばコイツに言つてなかつたな。

「今日はちょっと仲間にしたいポケモンがいてな。そいつを探しに来たんだ。テメエはなんでワイルドエリアに？」

「無視とは偉くなつたものですね：私は修行です。あのチャレンジャーには、悔しながら完封されてしまつましたからね。いてもたつてもいられなくなつてしまつて」

「それでカイリキーと殴り合うのかよやばいなお前」

やっぱコイツと深く関わらない方がいいんじや：絶対に怒らせないようにしてよ。別に怖くないけど。怖くないけど、一応ね？

「因みに何が欲しいのですか？タチフサグマとか？」

「タチフサグマなー：欲しいなあ：欲しいけど、タチフサグマはまた今度にしようと思つてんだよな。今オレが欲しいのは…ホレッ、コイツ、シザリガーだ」

ロトフォンに掲載された写真を見せる。

そもそもオレの旅の目的は、各地方のあくタイプを捕まえる事。よつてガラルにきた理由も、タチフサグマを捕まえる為だつたりする。ジムチャレンジの存在はこつちにきて知つた。

だが、今回狙うポケモンはシザリガー。みず　あくタイプ。高いこうげきに、低くないぼうぎよ、とくこう。

特性できおうりよくから繰り出されるタイプ一致アクリアジエットで有名だ。

またとても気性が荒いポケモンで、すぐに他ポケモンに乱暴をするなど、育てにくいとして話が多々あがる。

ハイガニを育てていた新米トレーナーが、シザリガーに進化した後手がつけられず、ポケモンレンジャーの御用となる、なんてケースは、年間を通して百件を超えるとかなんとか。

そんな、あくタイプは新米トレーナーが手を出してはいけないと、一步引かれる要因を作つたポケモンの一体、シザリガー。

なんとしてもゲットしたい。ホウエン地方で捕まえられなかつたリベンジを、ここで果たしてやる…！

「成る程、シザリガーですか。随分と大きく出ましたね」

「まあな。いつまでも癖のある奴を扱えない訳にはいかねえし、オレ

も成長してゐるつてことよ」「

と、言つたものの…

「しつかし、中々見つからないもんだな。朝からこの辺りをぐるぐる回つてゐるんだが、痕跡すら。なんだつたら、もう今日は疲れだし、そろそろ帰ろうかつて思つてる所だ」

ワイルドエリアはコロコロと天候が変わるから、出現するポケモンもその気候に合わせてコロコロ変わる。きっと今日はシザリガーが出てくる天氣じやなかつたのだろう。また日を改めて、万全の対策を整えて出直そうと思う。

ダーテングも、バトルに負けたばかりで疲れてるだろうし、ニユーラとコマタナはポケジヨブに行つて貰つてるから今居ないし。「じゃ、オレもう行くわ。またなサイトウ、首を長くして待つていやがれ。次会う時が、テメエの最後だ！」

さ、帰つて寝よ。

ダーテングをボールに戻し、荷物を纏めてそばに置いていた自転車に跨る。近くに浮いていたソルロックの高さが下がつているのを見て、時計を確認したら一時半過ぎだつた。

意外にも長い時間コイツとキャンプしてゐる事実、少しシャクに思いながらも、楽しくなかつたかと聞かれたら、直ぐに頷く事が出来ないのもまた事実。

まあ、丁度良い暇つぶしごらいにはなつた、それぐらいの気持ちだろう。

心に残るザワザワに首を傾げながら、取り敢えずポケセンに向かうべく、ペダルを勢い良く踏み込んだ。

「いやちよつと待つて下さいよ」

「グエエエ!?」

襟思つくぞ掴まれた。

思わずガマゲロゲが踏まれたかのよう、潰れた汚い声が出る。自

転車でバランス崩した時特有の冷や汗が止まらない。心臓バクバク言つてやがる。

コ、コイツ…殺す気か…!?

「バツカヤロテメエ何しやがるサイトウ!? 危ねえだろが!? お前自転車漕いでる人にチヨツカイかけちやいけませんってポケモンスクールで習わなかつたのかよ!? オレアあくタイプ使いとして、砂糖と塩の位置逆にしたり、友達の水筒の中身をこつそりサイコソーダにしたり、色々な悪事に手を染めてきたが、自転車乗つてる奴の服掴んで引きずり落とそうとした事はねえぞ!」

「貴方にとつての悪事がその程度という事に衝撃が隠せないのですが。めちゃくちやシヨボいじやないですか貴方年上ですよ？ 背丈は変わりませんが、私より長く生きてますよね？」

「ぶつ飛ばすぞテメエ!? 身長はカンケエねえだろ!」

大体テメエのガタイに身長が異常なだけで、断じてオレは低身長じゃないわ！ ちょっと平均より2、3センチ足りないだけだ！

「そんな事はどうでも良いんですよ。問題は、私というものがいながら、貴方が勝手に帰ろうとした事です。何帰ろうとしてるんですか」「別にいいだろうがオレが帰つたつて！ なんでそんな事をテメエに決められなきやなんねえんだよ!」

「何言つてるんですか？ 何故貴方が私とカレーを作つていたか…それは貴方がバトルに負けたからでしょ？ 勝つた方がなんでも言う事を聞く、というルールのバトルで」

「シグッ…！」

チクショウ、そうだった。今度こそ勝てると思つて、いつも見たいに勝つた方がなんでも言う事を聞くつてルールをつけたんだつた。有無を言わさずボコボコにされた事が衝撃的で、すっかり忘れてた。「だ、だけどもうお前の、『一緒にキヤンプをして下さい』つていうのは、さつきのカレー作りで終わつた話だろ？ あれも立派なキヤンプじやねえか！ 無効だ無効！ ノーカンツ、ノーカンツ、ノーカ

「は？」

「え、あ、その、や、やめろよ、急にそんな怖い声出すのウオ!?」

底冷えするようなサイトウの声にビビつていると、掴まれてる襟に力が込められ、自転車から引きずり倒される。

咄嗟に受け身は取つたは良いものの、突然の凶行と、まさかコイツが本当に危害を加えてくる筈がないという、一種の信用的なものが揺さぶられ、脳震盪を起こしたかのように身体が硬直する。

上手く力が入らない。周りの気温が一気に下がつたかのように思えた。心なしかサイトウの、常時ハイライトオフの瞳がさらに昏いような気がする。

「…」

「な、なにすんだよサイトウ!?おま、本当に怪我したらーーーツ!?

流石にチヨツカイにしては度が過ぎてる。

そう抗議しようと口を開いたら、人差し指で撫でるように塞がれた。黙つていて下さいと、またもや底冷えするような声に釘をさされ、完璧に萎縮するオレの心。

「何故貴方が勝手にキャンプの期間を決めているのですか？勝つたのは私です。そして貴方は負けた。これは揺るぎようがない事実。貴方の行動を含め、全ての決定権は私にあります。なんでも言う事を聞く、その重みを少しは考えた方がいいのでは？いえ、今すぐ教えてあげましょウか」

私、これでも結構我慢している方なんですよ？

襟を掴みながらオレを無理矢理引き上げ、耳元でそう囁いてくる사이트ウ。全身の毛が総毛立ち、経験した事のない冷や汗が滝のように出てきた。小刻みに震えてるのを必死に抑えるが、バレているだろうか。

てか怖…!?え、怖ッ、え、すつごい怖い。かつて無いほどの恐怖を感じてる。首根っこ掴まれて怒られてるチヨロネコの気持ちが凄い分かった。

コイツ怒るとこんなに怖いんだ。最早喧嘩にもなつてねえ。

確かに約束破つたのはオレだけど、なにもそんなに怖い顔しなくてもいいじゃん。

それよりオレ一体なにされるんだ。流石に全財産寄越せとか言つ

てこないよな…? ちよつとストレス発散がてら殴らせるとか…!?

實に死ぬ！

「ああっ、その顔も凄くそそりますっ、あまり私を困らせないで下さいよ…! どうしましょう、メインディッシュは今日の夜にと思っていたのですが…もう、いただいてしまいましょうか。」こらでちょうど良い茂みは…」

いやホントに何されるのオレ!?怖いよ怖いです怖すぎるつて!?!だ  
だれか、助けツ…そうだ、だ、ダーテング!ダーテングに助けて貰お  
う!?

何故か辺りをキヨロキヨロして、あそこはダメ、あそこも微妙だと  
かぶつぶつ言つてゐるサイトウの隙をつき、ダークボールの開閉ス  
イッチを押す。

開閉スイッチを押す

押す、押す、押す。

しかし たすけは あらわれなかつた☆

おいしいいいいいい!! ターテング!! ターテングさん!!

仮にも民家吹き飛ばせるぐらいの力持つてんだろ!? トレーナーのピ  
ンチに駆けつけてくれよ! このままじゃオレ…!?

「…何してるんですか?」

「ひやいつ!?いや、いや何もしてねえよ!なーんにもしてないけど!?

何もしてくれないって言つた方が正しいかなあつはつはこんちく

しうう!?てかもういい加減に襟離してくれませんかね!?服が伸びち

まう!これけつこう気に入つて」

貴方に決定権は  
「…無いです…」

どうしよう、取りつく島がない。オレもオレで情けねえなコイツ年

下の女だぞ。ビビつてんじやねえよ。

いや無理だよビビるわ。流石にカイリキーと殴り合える奴のことビビらないのは、人としてちょっとおかしいわ。ダーテング、お前が正しかった。

「…あそこで良いか…じゃ、行きますよ。講義の時間です。今回ばかりは私も経験がないので、痛くなつてしまつたらごめんなさい」いや寧ろ人を草込みに連れ込んだ経験があつたら怖えよ。なくて当然だよ。

てか、痛いって単語が出てくるという事は乱暴されるのねオレ。全力で回避させてもらうわ。オレまだ死にたくない。謝るには謝るから。謝るには謝るからオレにチャンスをくれ頼むツ！もう夜ご飯キヤンプのカレーになつても良いからツ！

「サイトウ、サイトウ！オレが悪かつた…そうだよな、約束だもんな！ちよつとオレどうかしてたよ！さあその手を離してキヤンプしようぜ？」

「…そんな取つてつけたように謝られても…」

「おいおい冷たい事言わないでくれよ！それにはらー！講義ならキヤンプの準備が出来た後、カレーでも食いながらゆつくりとやればいいじゃねえか？な？」

「流石にものを食べながらやるのはレベルが高すぎる気がするんですが。しかし…そうですね…」

なんでだよ飯食いながら勉強とかした事あるだろ。そのたまにくる良いとこのお嬢さん感なんなん？変などこで真面目ちゃん発動しなくていいから。とにかく誘いに乗れ。乗つてくれ…！

夜のワイルドエリアは危険だ。

唯でさえ全地方屈指の危険地帯とされ、バツチの取得がなければ入っちゃいけないワイルドエリアは、夜になると危険度が大幅に上がる。

強力な夜行性ポケモンの出現、足場が不安定な状態での視力低下、気候の変化も激しく、雪でも降つたら目も当てられない。

その為、ワイルドエリアには常にリーグスタッフが警備に当たつて

くれている。

あらゆるタイプに高い耐性を持つはがねタイプ使いを主軸に、人の危険などをいち早く察知出来るエスパータイプ使い。

夜に強く、靈的なモノを感知して解呪などを手伝ってくれるゴーストタイプ使い。

移動、運搬、上空からの警備を担つてくれていてるひこうタイプ使い。その他水難対策のみずタイプ使いなど、今オレ達が安全にワイルドエリアに利用できるのは、彼らがいてくれるからだ。

有名なところで言うと、ガラル地方で最初に貰える三体を連れているばあさんかな。その人バトルに勝つたらお小遣いくれるから、凄い有難いんだよなあ。

まあ、ここまでワイルドエリア運用体制取つてつけたよな設定を話してきたが、つまり何が言いたいかというと…

「ほらほら！カレーの材料になるきのみ取りに行こうぜ！こんなに天気が良いんだしよお、日中にしか出来ない事やらなきや！」

「……」

夜になれば、リーグスタッフの数が増える。

よつて、あんまり『痛い』なんて単語が出てくるような行為を、大っぴらに出来なくなる…！

さあ釣られてくれ！『夜』という言葉に惑わされてくれ！ワイルドエリアでは、夜の方が悪い事出来なくなるという事実に気付かないでくれ！頼む！

：それに夜だつたら、万が一そういう事になつても、オレがヤンチャしてたのを止めてくれたつていう、言い訳が効くだろう。写真も暗くて取りづらいだろうし。

一応コイツ、ジムリーダーだから、ストレスとか溜まるもん溜まつてんだろうけど、あんまり昼間つからネットに晒されるような事は、多分お互いの為にならないしな…

まあ、今度、今度な、ちよつとだけ相談に乗つてやつても良いかもしがれん。ライバルが、よく分からんものに潰されて終わるなんて、ほら、なんか、嫌だし…コイツ年下だからな！

オレってばなんて優しい男なんだろう！しつかりと年下に對しても気遣いが出来る！これはモテモテなのもしやあなしつすわ：（彼女いない歴＝年齢）（バレンタインチョコなし）

「…わかりました。やはり楽しみは後に取つておく方がいいですよね。キャンプの準備をしましようか」

「そうだよ、そうだよ！やつぱ後の方が楽しげ一倍だつて！」

考え込んでいたサイトウが顔を上げ、吉報を報せてくる。

よしッ、よしッ！なんからしくもない事を考えたが、そんな事はどうでも良い！ぬかつたなサイトウ、このまま夜まで粘り、適当にリーグスタッフと合流してトンズラこかせて貰うぜッ！

という事で、それまでは折角やるんだし楽しませてもらうか。

さあ、そうと決まれば早速準備だ。フフフ、遂に最近新調したオレのテントを見せる時が来たようだな…！

とは言つても、大した事はない。キャンプセットを開けば既に完成されたテントが飛び出してきて、指定された場所に設置、固定される。後は付随されている料理道具を、焚き火にセットすればもう終わり、あつという間にキャンプ場が出来上がる。

見てくれ、この太陽に映える漆黒と、あくタイプをモチーフにしたステッカーを！かあー惚れ惚れするぜ…中古ショッピだつたが、中々良い買い物をした。

わざわざ買い物に付き合つてくれたバツドガールには感謝だな。今度なんかお礼すつか。

：しかし、便利な時代になつたもんだな、と。

出来上がつたキャンプ場を眺めながら、そう思う。

オレがジョウトで野宿した時は、皆で一緒に汗を流しながら組み立てたもんだぜ。今のガキンチョどもがテントの組み立てる大変さと面白さを知らないのは、ちょっと寂しい気もするが、それが時代の流れつてもんなんだろうなあ…

「終わりましたか？…つて、どうしたんですが、そんな哀愁染みた背中して。思つた以上にテントがダサかつたとか？」

「ちげえよテメエブチコロがしてやろうか。ちょっと今ジエネレー

ショーンというものを実感しちまつてな、オレも歳を取つたなつて思つただけだ」

「歳を取つたつて、貴方今何歳ですか。まだ未成年でしよう」

「ん? いやオレはもう成人してるぞ? タバコと酒はやつてないけどな」

「え? 成人…え?」

「ん?」

何言つてんだコイツという顔をしながらこつちを見て固まるサイトウ、ハテナマークが頭に浮かぶ。

珍しいなコイツの顔に感情が現れるなんて。結構レアだ。

いやこつちこそ何言つてんだだよ。12を過ぎたら成人して、晴れてトレーナーなる資格を貰えるんじやないか。酒とかは二十歳あたりからだけだ。

スクールでトレーナーとポケモン協会の構造、聞いたことあんだけ? 博士やその街のジムリーダーに祝われたりしなかつたのか?

オレン時は、住んでた所が本当に田舎で何にもなかつたから、わざわざ親父がタンバジムまで連れてつてくれて、シジマさんに祝つてもらつた。

懐かしい、シジマさん、集まつた皆を連れて欲しいポケモン捕まえてくれたんだよな。

すつごいかくとうタイプ推されたけど。オレがデルビル欲しいつづつてんのに、バルキー渡そうとしてきたけど。

元気かな。元気だろうな。けどあの人修行してる時周りの声聞こえなくなるから、少し心配だ。

そういう同期の奴らとも連絡とつてねえな。PWTとかで忙しいんだろうけど、ホテル戻つたら電話の一つでも掛けてやるか。

「まあいいや。で、どうすつか。夜飯作るには少し早いしな。バトルでもするか?」

「そ、そ、そですね。どうしましようか。バトルは先程やりましたけど、正直私はなんでも良いですよ。……夜まで時間を潰せれば良いのであつ、そうだ」

「ん？どうした急に立ち上がつて。やつぱバトルか？」

「そうですね、バトルです。ほら立つて下さい」

そう言つてオレの手を引き、強制的に立たせてくる。訳も分からずされるがままのオレに、バツクを持たせ、何処かに連れて行こうとするサイトウ。彼女の手持ちのゴーリキーがいつてらっしゃいとばかりに手を振つている。

一体どこに行くんだ？

そんな疑問を口に出そうとして、直ぐに封じられた。

「貴方の目標、達成しに行きましょうか」

見たこともない。コイツの楽しそうな、したり顔によつて。

「ウオオオ…!？」

「良かつた、やはり居ましたか」

サイトウに手を繋がれたまま連れて来られたここは、ミロカロ湖の南にある桟橋付近。

オレたちは今、木の影からとあるポケモンを眺めていた。

「ヤベエ…！…はあ…はあ…ルリナバイセンが見せてくれた奴よりも、す、少しデカいんじやねえか…!…荒々しさが前面に出てて、フヒツ、めつちやワイルドだあ…！」

「落ち着いて下さい、目が逝つてしまつてますよ。トリップしないでくだ、ちょっと待つて下さい。え？ルリナさん？何故ルリナさんが出てくるのですか？その話、詳しく述べてくれますよね？」

今回オレがワイルドエリアきた理由兼目標である、シザリガーを。「しかし、こっちの方にいやがつたのか。前来た時はキングラーボー辺りしか出なかつたから、てつきりいないのかと思つたぜ」

「シザリガーを探しているのに、水辺付近を念入りに探索しない貴方の思考に疑問を覚えますが。そんな事よりも話を」「しかもあいつの特性、てきおうりよくじやねえか！見たか今の！喧

喧嘩つてきたキングラーのクラブハンマーを、かみくだくで迎撃しがつたぞ！ま、ますます仲間に加えたくなつたぜ……」

「……はあ……」

……どうしたため息なんかついちまつて。幸せが逃げるぞ？

何か呆れてるサイトウも気になるが、そんな事よりシザリガード。さて、どうしたものか。そのまま近付いてバトル、つてのもいいが、ダークネスはサイトウとのバトルで疲れている。あのシザリガーレベル高そうだし、幾らタイプ相性は良いといえ、余り無理をさせるのも酷だろう。

よし……久しぶりにアレ、やるか。

「では、私はカレーの具材となるきのみを取りに、辺りを周っているので。くれぐれも怪我のないようにして下さい」

「おう、頼んだ。甘いきのみばつかとつてくんnya。テメエも一応気をつ……けなくて大丈夫だな。ポケモンなしでも大丈夫だろお前」

「あ、あそこにモモンの木がありますね。ちょっと行つてきます」「土下座するからそれだけはやめる。頼むから。ちよ、おい！」

あの野郎……！真っ直ぐ甘いきのみしか成つていらない木に向かいながらつて……！

まあいい。人が居なくなつたのは、此方としても好都合だ。

さて、ここで取り出したるはポケモンフードと高級缶ヅメ。

それらを皿に盛り付け、最後にオボンのみを添えれば完成だ。ダークネスは出さず、空のダークボールのみ腰に携える。

上着は全て脱ぎ、タンクトップ姿、これで害は有りません、怖くありませんとアピール。

そのままじりじりと、じりじりとゆつくり、シザリガードに近づいて行く。

美味しいものを与え、極力身軽になる事で相手の危機感を煽らず、好感度を上げてから捕まえる、ジョウトで旅している時からやつている、オレの捕獲戦法だ。

アイツらからは良く呆れられたが。

しかしこれでヤミカラスとコノハナは捕まえられた。ノクタスも

ギリ捕まえられた。サメハダーハは無理だつた。

あいつはヤベエ。開幕オレの手を噛みちぎろうとしてきやがつたからな。拳で語りあつたよ。一人だつたら危なかつた。

あれ、そう思うとオレ、案外サイトウの事バカに出来ないのか？

『……ーーーツ！』

「おーよしよし……怖くねえぞ怖くねえぞ……ほら、これ美味しそうだろ……？」

此方に気付いたシザリガーハが、両手のハサミを振り上げて威嚇してくる。ハサミに張られた薄い水のベール、あれはクラブハンマーの構えか。

当たれば相當に痛いだろうが、ここでビビつたまうのは不策だ。

野生のポケモンにあからさまな恐怖心を見せると、刺激してしまい凶暴になる事が多々ある。

野生のポケモンに襲われて怪我するケースは色々あるが、理解のない人が無闇矢鱈に敵対心や恐怖心を持ち、野生ポケモンの本能を煽る、というのが大半だ。

『——！——！……？』

「お、偉いお前は。賢いなうそうだぞ、オレは仲間だ。それ、たーんと食べてくれ」

敵意がない事が伝わつたのか、威嚇行動を辞めてくれるシザリガーハ。差し出されたエサを確認し、静かに口に運ぶ。お気に召してくれたのか、そこからは早く、ガツガツと食べ始めた。

よしよし、ここまで来ればほぼ作戦は最高だ。後は食べ終わるのを待つて、目の前にボールを差し出せば良いだけ。凶暴なポケモンって言われてるが、案外大人しいやつじゃねえか。

「なあシザリガーハ、お前は強い。強い故に、もうここら辺のポケモンじや相手にならないだろ？もつと強い奴と戦つて見ないか？」

『……！』

「そうかそうか戦いたいか。なあ、オレと一緒に来ててくれよ。そしたら、お前に世界を見てやれるぜ？ほら、このボールに入つてさ」

差し出されたダークボール、徐々に近づいていく。自分の捕獲道具が迫っているにも関わらず、全く逃げる素振りを見せないシザリガー。

ふふ、完璧に決まったと見た。さあシザリガー、一緒にあの銀髪褐

色をボコボコにしようぜ！

「お前は本当に良い奴だな…さ、いくぞ。大丈夫、飯もちゃんと食べさせてやれるから。な？」

『―――』

目と鼻の先まで距離が縮まるオレとシザリガーの距離。他人が見たら狂人か自殺志願者かと思われるだろう。

だが、そんな事はない。これは逢瀬だ。愛するあくタイプに送る、愛情だ。

シザリガー、オレの愛を受け止めてくれッ！

遂に距離はほぼゼロとなり、ダークボールの開閉スイッチが押される。

『―――』

筈だった。

「え？」

先程まで穏やかだったシザリガーの顔が、凶悪な笑顔へと変わる。

口元に、かみくだくのエフェクトを発生させながら。

『―――ッ!!』

差し出したオレの腕に、凶牙を突き立てた。

「―――ッテエ?!?!

瞬間、爆発。かみくだくに使用されたエネルギーが奔流となり、オレの体を吹き飛ばす。

ゴロゴロとコミカルに転がつていった先には、先程隠れていた木があり、思いつきり背中から叩き付けられた。

クツソイテエ!?あの野郎、大人しいフリして騙しやがったな!?

「テメエこの、なんて事しやがる!だましうちなんて卑怯だぞ!やら

れたのかみくだくだけどな！みろこの腕！血イ出ちまつたじやねえか！」

『――――――』

チクショウ、ゲラゲラ笑いやがつて……！

かみくだくをされた腕を見る。ああ、なんて痛々しい。

肘から先が打撲やらなんやらで青黒くなつており、モロに食らった掌付近はダークボールの破片によるものなのか、所々裂傷が刻まれていた。

別に命に関わる程の怪我でもないが、かと言つて無視していいかって程浅い怪我でもない。血も中々な量が出た。後で包帯でも巻いておこう。そうすりや大体なんとかなんだろ。

それよりも……

「久々にキレちまつたよ……来いッ、ダーテングッ！」

取り敢えずコイツだけは泣かすッ！そして捕まえてやるッ！

「ダーテング！ちょっと辛いかもしれねえが頑張つてくれ！リーフブレード！」

『――――！』

ダーテングの扇が淡い緑の光を放つ。十分に力を貯め、自然の刃となつたそれを、風神の如く肉薄、シザリガーに向かつて叩き込む。

みずタイプのシザリガーに、くさタイプの技、更にダーテングもくさタイプだからタイプ一致補正が掛かる。大体のみずタイプはこれでファニッシュとなる。

「なッ……!?」

『――――！？』

が、奴はその大体には当てはまらないらしい。

シザリガーのハサミに薄い水のベールが張られたかと思うと、勢い良く振り上げられる。

降り掛かる二刀に合わせて繰り出されたクラブハンマーは、リーフブレードと僅かに拮抗、打ち破り、ダーテングを跳ね上げた。なんとか空中で体勢を立て直し、着地するダーテング。

息が荒い。かなりのダメージが入つたようだ。

「幾らシザリガーのこうげきが高くて、てきおうりよくが発動するとしても、こうかいまひとつで半減される筈なんだが…ダーテング、まだ行けるか？」

『…ツ…ツ…！』

「ナイス根性、あともう少し頑張ってくれ！」

しかし参ったぞこれは。リーフブレードが入らないとなると、残る選択はあくのはどう、ぼうふう、ねつぷうしかない。

あくのはどうとねつぶうは、こうかいまひとつだし、ぼうふうは後隙がデカすぎる。

それに天気が雨じやないから、あまり命中率にも期待が出来ない。あれ体力結構使うらしいし。

やつぱリーフブレードが妥当か…？

「ただいま戻りました。見てください、こんなに美味しそうなモモンのみが…あれ、まだ捕まえてないんですか？貴方ならすぐだと思つたのですが」

「いちいち煽んなやこの野郎！てか本当にモモンのみしかねえのかよ！嘘じやん！」

次の一手をどうするか、オレたちが攻めあぐねている所、きのみを取りに行つてたサイトウが帰つてきやがつた。

クソ、コイツが帰つてくるまでに決着をつけたかったんだが…割と時間が掛かっている。早いところ捕まえなくては…！

「あまり時間がかかる様だつたら、助太刀いたしますよ。それとももう助けて欲し…つて、どうしたんですかその腕!?」

「誰がテメエなんかの助けを借りるか！この腕？ちつと作戦が失敗しちまつてな、それだけだ！お前はモモンのみ以外のきのみ探して来い！」

「そんな場合じゃないですよ！血も出てるじゃないですか！見せて下さい、今手当てしますから！」

「うるせえな！ちょっとシザリガーのかみくだくが当たつただけだ。こんくらい後で適当に包帯でも巻いとけば治るんだよ！そんな事ヨリバトルに集中させやがれ！」

「……成る程、アーツがやつたのですか。へえ…成る程…」

怪我なんか気にしてたら逃げられちまうかもしれない。致命傷じゃねえんだ、そんな騒ぐ必要はない。

さて、どうやつてつかまえようか…ん?

『ツ…!?ツ…!?一ーー!』

「ど、どうしたんだお前、急に震えだして?」

なんかシザリガーがめちゃくちゃ震え始めたんだが。遠目から見ても分かるぐらい冷や汗を出していやがる。まるで滝のようだ。いや本当にどうした?腹でも下したのか?でもさつきのフードには悪いもん入つてない筈…マジでどうした?

『ーーー』

「だ、ダーテング!?おい、勝手にボールに戻るなよ!そんなに疲れてるのか!？」

しかもダーテングまで拳動がおかしくなつたし。一目散にオレの腰に目掛けて突っ込んできて、ボールに戻りやがった。

ちょっと待つてくれよ!お前がやつてくれなきやどうやつて戦えばいいんだ!

「おやおや、ダーテングは随分と疲れているみたいですね?どうです?戦えるポケモンは居ない事ですし、私に任せてみては?何、悪い事はしませんよ。ね?」

「あ?いや、それは…でももうポケモンいねえし、回復薬はキャンプに置いてきちまつたからな…」

「まあまあ、ね?任せてくださいよ。直ぐに、弱らせてあげますから。その時に、貴方がボールを投げればいいんです。簡単なはなしでしょ?是非ともつ、私にやらせて下さい…お願ひしますよ…?」

「お、おう、お前も急にどうした?スゲエやる気じやねえか」

なんか少し怖いな…目がなんか怖い。怒つてんのか?

しかしどうすつか。自分のパートナーを自分で捕まえないってのは、なんかアレだしな…でもシザリガー欲しいんだよな。

特にあのシザリガー強いし、絶対に即戦力になる。コイツに助けてもらうつてのは、少し癪だが…

「そうだな、せつかくの厚意を無碍にするのも悪いか。じゃ、サイトウ、頼むよ。おいシザリガー！ テメエ、今からコイツが相手してくれることから覚悟しろよおおおおい！？どうしたお前！？なんで土下座してんだけ！？」

すつごい勢いで地面に頭打ち付けてんだけど！ めっちゃ目に涙浮かべてるし！ さつきまでのあくタイ普らしい感じは何処行つたんだよ！？

「さ、許可も降りましたし、やりますか。シザリガーサン、楽しい楽しいバトルの時間ですよ？ 思いつきりやりましょうか」

まあ、許可とか関係なしにやりますが。

「唯では済まないと思つて下さい」

「さ、サイトウ？ あくまで少し弱らせてくれるだけで良いんだからな？ あんまり張り切りすぎんなよ？」

「分かつてますよ。カイリキー、ビルドアップ。直ぐ様インファイトを叩き込みなさい」

「ちよ、ダメダメダメ！ オーバーキル!! オーバーキルだからそれは！」  
全然話聞いてねえなこの野郎！？ ひんしにさせちまつたら捕まる前にポケセン直行じやねえか？

それにちよつとシザリガーが可愛そだから！ ほら、もうビビるくらい頭下げてんぞコイツ！ なんならもう捕まえられんじゃねえか？！  
「そこをぞいて下さい。カイリキーが戸惑つてるじゃないですか。カイリキー、彼が退くまでビルドアップをし続けて下さい」

「ますます退けなくなつたわ！ シザリガー！ 今のうちにオレのボール入れ！ 殺されるぞお前！ ほら、ダークボール！ 今度は壊すなよ！」  
『――――――！』

オレがボールをシザリガーの前に転がすと、アクアジエット並みの勢いでボールに飛び込んでいった。三回ボールが揺れ、カチリと捕獲完了を知らせる音が鳴る。

い、色々あつたが、シザリガーゲットだ。なんか凄い疲れた。  
「チツ…逃げましたか…おめでとうございますアクサキさん。目標達成ですね。どうですか？ 早速バトルをしませんか？ シザリガーもきっと

と力が有り余つてゐるでしよう。やりましょうやりましょう。さあ、早く出して下さい。さあ、さあ！」

落ち着けサイトウ。一体どうしたつてんだ、いつもに増してわけわからん事になつてんぞお前。

『……ツ…』

お前もお前で、ボール越しにぶるつてんじやねえよシザリガー。どうしちまつたんだマジで。

「イテテテテテツ…!? おいサイトウ、もう少し優しくできねえのか?」

「これぐらい我慢して下さい。男が情け無いですよ……よし、出来た。暫くは安静にしてくださいね。無理に動かすと悪化しますよ」

「くうく滲みるなあ…! こんなにしつかりしてなくても、適当にして

りや勝手に治んのに…」

「アクサキさん?」

「ひつ…!? 分かつた分かつた! 暫くは動かさないように気をつけるよ! 危険な事もしねえ! これでいいか!?

「よろしい」

煮えるカレーの匂い、パチパチと、薪の弾ける音が黄昏に響く。すっかりと暗くなつてしまつた空、オレたちはキャンプ場へと戻つて来ていた。

綺麗に巻かれた包帯に、熱い光が照らされより一層白く映える。

「しかし惜しかつたなあ…今まではこれで捕まえて来られたから大丈夫だと思つたんだが…何がいけなかつたんだ?」

「何がいけないとしたらそれは貴方の思考回路です。馬鹿なのですか

?捕獲されているポケモンならまだしも、野生のそれに生身で近づくとは…もう一度とやらないで下さいね」

「そいつは了承しかねるな、アレはオレが生み出した最高の作戦、数回失敗しただけでやめられ、嘘嘘冗談だよ!? もうやんないからその怖い顔やめろ！ 手エ掴んでこなくていいから！」

クツ…どいつもこいつも人の作戦にケチ付けやがつて…！ 前もガミガミ煩かったんだ、別にオレが少し怪我しようと関係ねえだろ…！ 「…いや、でも…」

もし逆の立場だったら…心配するか、オレも。

オレの腕を見た時の、サイトウの顔を思い出す。

普段の無表情が嘘の様に、感情が表に出ていた。隙を見せないよう振り舞っているコイツが、あの時オレの前で感情を発露させた。それを見て、何も分からぬ程オレは鈍感野郎じやない。少なくともオレは、コイツの中では知り合い以上のカテゴリに当てはまつているのだろう。

それはなんだか…悪い気はしなかつた。

「サイトウ…今度ナツクルシティの駅前に、期間限定で他地方のスイーツが売られるそうだ。暇があつたら、少し買つといてやるよ」

「…？ それはとても嬉しいですし、有難いのですが…どういう風の吹き回しですか？」

「ちよつとした気紛れだ、気にすんな」

だから、ちよつとぐらい感謝の気持ちを送つたつて、バチは当たらぬいだろう。

きつとこんなふうに思うのは…少し長く、一人旅が続いてしまっただけだから。

こみ上げてきた、このよく分からぬ感情を、ゴーリキーが渡してきたカレーと一緒に飲み込む。

サイトウを押し切つてマトマのみを入れた筈のそれは、何故だろう、少し甘さが残つているように感じた。

あれ…何か忘れているような…？

## ちようはつ

オレはあくタイプが大好きだ。

何故あくタイプが好きなのかと問われれば、軽く半日は語ってしまう程、オレはあくタイプを愛している。

あくタイプと聞けば、人によつて顔を顰める人もいるだろう。が、少し待つて欲しい。『あくタイプ』という五文字だけで、あくタイプの全てを判断するのは、あくタイプ使いとして許せないものがある。

そんな、最近サイトウとどう接すれば良いのか分からず、ポケギアと胃薬が離せなくなつたオレ。

今日も元気にラテラルタウンへ…と言いたい所だが、その前にちよつと寄り道をしよう。

何故なら…

「なあバツドガール、あの野郎に勝つにはどうしたら良いと思う？」

「ねえアクサキ、マリイにはマリイつて名前があると。そんバツドガールつて言うん、たいがいやめてくれん？」

ここは、蒸気機関によつて近代化を遂げた工業都市、エンジンシティ。

の、なんて変哲もないチャレンジャー用ホテルのロビー。

オレは今、数少ないあくタイプ使いであるバツドガールと共に、絶賛作戦会議中である。

「…てのが、オレの普段のバトルスタイルだな。それでいつもボコボコにされんだが…バツドガールはどう思うよ？」

「やけんマリイにはマリイつて名前が…そんバツドガールつてなに？」

「あア？あくタイプ使つてそんな奇抜な格好してんだから、お前はバツドガールで間違いないだろうが。違うのか？」

「全然違う。そもそもバツドガールって言葉、初めて聞いたばい」

あれ、おかしいな？同期が出るからつて、わざわざPWTの試合観に行つた時に知り合つた奴らは、バツドガール、ガイで通じたんだが…こつちでは言わないのか？」

「まあそんな事はいいんだよ。で、何か考えついたか？オレはここに新しく迎えたシザリガーを加えようと思うんだが、どうだ？アイツのかみくだくの威力は惚れ惚れするぜ？きつとサイトウの野郎もイチコロだ」

「なんでマリイン名前は呼べんでサイトウさんの名前は呼べると…！こん低身長唐変木…！」

「はあ!?なんでここでオレの身長が出てくるんだよ！第一人の事言える立場じゃねえだろこのチビ助がつ!!」

「マリイには夢と希望があるばい。第一何歳と比べとーと、マリイはアクサキと違うてまだまだこれからん歳やけん！」

この、言わせておけば…！

つて、イカソイカソ。このままでコイツの関係ない話に巻き込まれて作戦会議が長くなるパターンだ。落ち着け。大丈夫。オレにもまだ夢と希望がある。毎日同期と実家から送られてくるモーモーミルク飲んでるから。

きつと数年後には…あ、クソ絶妙に抜け出せねえ！

「身長の事はどうでもいい！さつきとあのにつくきサイトウをぶつ潰す作戦考えつぞ！で、お前の考えは！オレはシザリガーを軸に火力で攻めようと思うんだが！」

「お前でもなか！マ・リ・イ！」

「分かつたよウルセエな!?で、マリイはどう思う！」

クツ、大人びているとは言えガキはガキ、弟どもと大して変わんねえ歳だ。一体何が気にくわないのか、オレには全く訳が分かんねえ。バツドガールでいいだろうが。オレならバツドガイつて呼ばれても振り向くぞ。カツケエもん。

つて、だからそんな事はいいんだよ。早くお前の意見を聞かせてく  
れ…！」

「…えへへ…で、なんの話だつけ？」

「ふざけんなよお前!？」

嘘じやん!?えへへじやねえよ笑つてんなや！コイツ何にも話聞いてなかつたのかよ！なんの為にわざわざ菓子折もつてスパイクタウン行つたと思つてんだ…！」

オレ、何故か知んねえけど危うく街の人たちに殺されかけたんだぞ！？あーもー全然進まねえ！

「冗談ばい冗談、ちゃんと聞いとー。あんまり怒鳴ると目立つばい？サイトウさんばどげんして倒すか、ちゅう話やろ？」

「ツ…冗談かよ…！いらん嘘をつくな…！」

オレ、もしかして相談する相手間違えたか…？なんだつたら、ニット帽かウールー使いの方が良かつたんじや…

「ユウリは無口やけん、きつと何も上手ういかんし、後レベルが高過ぎてマネできん。ホップもホップであくタ一ブなんか使うた事がなかけん、期待するんな無理やて思うばい」

「…実はお前、サイキッカーだつたりしない？」

「アクサキは顔に直ぐ出るもん。簡単な話、頼りになるんなマリイだけ。マリイだけなんばいアクサキ」

「グツ…」

しようがない…自尊心やらなんやらが傷つくから余り思いたくないけど、コイツオレよりバツチ多いし、バトルも上手いからな…べ、別に圧力にビビつたとかそんなんじやねえから！

…それに、そろそろオレも焦らないといけない時期だ。

「で？天下のマリイさんは、一体どういう作戦を思いついたんだ？」

「急かしやん急かしやん。そうばい…アクサキは、変化技ば使う気はなか？」

「変化技あ～？」

変化技つて…つるぎのまいとか、おにびとか、そういうやつか？

確かに、今までアイツとのバトルで使った変化技は、ニューラのリフレクターぐらい。行き詰まっているオレには丁度良いアクセントかも知れない。

けどなあ…

「なんか…卑怯臭くないか…？」

「なんですよ、変化技ば使うんな別によかやろ？ 正式に認められと一ポケモンの力ばい？ 別に悪か事やなか」

「いやまあそりゃなんだが…」

なんだかなあ…バツドガールの言つてる事は正しいんだけど…

昔、ホウエンで旅してた時に、旅費稼ぎがてら腕試しをしようと、ちょっとした大会に出た事があった。

当たつたんだが…あれはひどかった。

そんな時にエルフーン、ヌケニン、ドヒドイデを持ったトレーナーと開幕普通にすばやさ抜かれてやどりぎのタネ撒かれるわ、どくどくまもるじこさいせいやられるわ、先にドヒドイデを倒そうとしても、ここつていうタイミングでヌケニンに交代されてスカされるわで、もうコテンパン。マジで散々な目にあつた。

あの時が初めてだな、人に対して明確な殺意を持ったの。

まあそいつは次の対戦相手に何もさせて貰えず負けたんだがな。

勝った奴に、君の犠牲は無駄じやなかつた、ナイスファイトって言われたよ。手を出さなかつたオレを褒めて欲しい。

「てな感じで、余り変化技に良い印象ねえんだよなあ…それにさほら、漢なら、真っ向勝負で勝ちたいじやん？」

「うーん、ホップも偶にそしあだばつてん、男つてなしてこうも馬鹿なんやろ…大体アクサキ、そげん事言うてらるー暇なかやろ？ それにもリイとバトルする時はリフレクターとか使うとに、なんでサイトウさんには使いとねえん？」

「え、あ、それは…その…」

そうだ。オレはバツドガールとバトルする時は、ニューラのリフレクターを数枚貼つてから、それを活用して有利に進めようとしてい

る。

なんなら、何もホウエンの時までいかなくても、簡単な積み技や妨害技ぐらいなら使つて自分がある。

実際使いたいって気持ちは、恥ずかしい話、常にある。

『正々堂々、全てが壊れるまで。貴方に敬意を表します』

…でも

「オレも…良く分からんだけど…」

でも、なんだろうか。

サイトウとバトルすると、だんだん、だんだん、心に染み付いた何かがザワザワしてきて…

そういう、勝つ為だけのバトルつてのが、頭から抜けていくとか…いや、それは単純に頭に血が上つて判断力が低下してるからだろうけど…

詰まるところ、オレは何を言いたいのだろうか。

「なんとなく…アイツとは、正面からぶつかりたいから、かな…多分」力ない笑みが溢れる。

やつぱり、良く分からぬ。分かつていたとしても、これしかない。全く持つて矛盾塗れ。勝ちたいと思つている癖に、変なプライド掲げて変化技は使いたくない。

常人なら嫌悪感を抱くであろう、勝手な考え方。

喉に小骨が突つ掛かっている感覺だ。話が上手く纏まらない。心中に何かある、それはハツキリしている。

けど、何があるのかは、未知のまま。

どうやらオレは、ジムリーダーというものに、何かしらのしがらみがあるようだ。因縁、ともいうべきか。

まだ、きっとオレは——

「つと、すまんすまん。気分を悪くしちまつたな。せつかく考えてくれてるのに、柄にもなく変な事口走つちまつた。忘れてくれ。長く旅してると、色々あんだよ」

苦くなる口を慌てて閉じる。

いけねえいけねえ。こんな事、これからガキに話す様なもんじや

なかつたな。何歳だよオレ、話の流れ的に急すぎんだろ。

それにさつき焦らないとつて言つたんだから、なり振り構う暇はないわな。

「…… 薄々気づいとつたばつてん、手強かね？」

「ん？どうしたバツ・マリイ、俯いちまつて。具合でも悪くなつたか？」

「別に？唯アクサキに、絶対変化技教えてやるて思うただけ。あくタイプば甘う見よーと、酷か目に合うつて思い知らしぇちやる」

「お、おう。それはオレも賛同するが…なんか…怒つてない？」

「怒つとらん」

そう言つて立ち上がり、ツカツカと出口へと歩いていくバツドガール。黙つてついてこいとばかりに、親指を立ててクイッと外を指す。その背中には、とてもその歳で出して良いようなものではない、おどろおどろしいオーラが漂つていた。彼女の後ろにいるモルペコが、お前何してくれとんねんとガンを飛ばしてくる。『ごめんなさい。お、おい、何処行くんだ？この後サイトウのジムに行かなきゃなんねえから、あんまり遠出は…』

「しぇからしか」

「はい」

なんかオレ、ガラルに来てから凄い振り回されてないか？

タクシーゆんてんしゆのアーマーガアを撫でながら、早く乗れとばかりに睨んでくる彼女を見て、今年一番のため息が口から溢れた。  
ああ、ジョウトの同期が恋しい…

「ああ…結局スパイクタウンまできちまつた…ラテラルタウンと真反対…」

マリイによつて連れられたここは、スパイクタウンの外れ、9番道

路。昼過ぎぐらいに予定しているジム戦とは、真反対の場所。

これ、約束の時間に間に合うか…？間に合わなかつた場合、講義という名の折檻が始まるんだが…やばい、思い出しただけで鳥肌立つてきた。もうよそう。

「タクシーやればすぐに着くやろ。それよりもマリィとん時間ば大切にしんしやい」

「お前なあ…ま、ガキなんてこんなもんか。ワガママ言えてりや、健健全証だな」

バツドガールの少し横暴な意見に、ついつい文句が口から溢れそうになるが、そもそも、バツドガールに時間を取らせているのは他でもないオレだ。出かけたそれを噛み砕き咀嚼、飲み込んでおく。

オレもコイツぐらいの時は、良くワガママ言つて親やポケモンを困らせたもんだ。コイツは歳不相応な奴だからな、初めてあつた時は少し心配だつた。

ワガママを一言も言わないつてのも、いつか溜まつたものが爆発しそうで怖いし。

だからオレと会う時はそんな遠慮しなくていいぞと言つたんだが…流石に限度というものはあるぞ、バツドガール…

「それに、アクサキにとつても悪か話やなかばい。ほら、あそこば見て」

「おーあれは…フォクスライか…！ そういうこら辺に分布してたな」

バツドガールが草をかき分けた先に映るは、赤褐色の毛皮にモツフモフなしつぽを持つキツネ、フォクスライだ。

フォクスライは、ガラルで捕まる事が出来るあくタイプのポケモンだ。別名きつねポケモンとも言われ、身軽なフットワークや鋭い爪からなる竊盗術は、確かに昔話に出てくる悪戯狐を彷彿させる。

主にタマゴや農作物を荒らし、酷い時には旅人のバツクを掠め取つて行くから、割と嫌われているな。オレは大好きだけど。あの美しい毛並みにダイブしたい。しつぽ触らせろ。

因みにこういったポケモンによる被害は、大体レンジャードアが済ませ

てくれるのだが：彼らも別に暇ではないし、付きつきりで雇うとなるとお金も掛かる。

よつてブリーダーや農家は、一家に一四、番犬の役割を果たしてくれるポケモンを置いている事が多い。

これが各地方によつて違うから、中々面白い。

カンターでは忠誠心が高く、むしタイプに強く出れるガードイを使つている人達が多いし、ジヨウトではナワバリ意識の強いデルビルに吠えて貰つっている。

ホウエンの農場にはポチエナがいたな。あれはしつこい性格だから、一度見つけた侵入者をいつまでも追いかけ回しやがる。

オレン家はヘルガーとブラッキー、グラエナにゴルバットが番をしてた。お袋には絶対服従してたなアイツら。

特にグラエナ。お袋の「おい」だけで直ぐ腹見せたかんなアイツ。んでもつてガラルでは、パルスワンを使うようGA（ガラル農業協同組合）が推奨してる。フォクスライの天敵がパルスワンだし、元々進化前のワンパチが牧羊犬として人気で、普及率も高く扱い易いし。それに可愛いしな。この前ウールー使いと一緒にいたポニテ助手のワンパチ触らして貰つたけど、あれはヤベエ。抱きしめたら離せなくなる。二つの意味で。

これは捕まえないと訳にはいかないな。

丁度良い、今回はフォクスライを主軸にして挑んでみよう。今までこうげきが高い奴しか使つて来なかつたし、とくこうで攻めてみるのも悪くない。

取り敢えずちょっと遅れるかもしれないってメール送つとこ。本当に、すまん、埋め合わせは、する…つと。よし、これで大丈うわもう返信きた！？

「こん前アクサキが全国んあくタイプば捕まえと一つて聞いて、マリイも少し協力したかねつて思うて。どげん？ マリイつてば気が効くやろ？ ずっと一緒におりとうならん？」

「お、おう、いや、でも助かるよ。この前もモルペコとオーロンゲのタマゴ貰つたし。今大切に育てるぜ。そろそろ生まれそうだから、実

家に送る前に一度見に来てくれよ」

「勿論、見に行くばい。なんたつてマリイとアクサキの間に生まれた子やけん、しつかりと見届けな。アクサキったら土下座してまで欲しか欲しかつて言うんだから、マリイ、頑張つたんばい？」

「おいおい言い方、誤解を招くぞお前。正確にはオレのポケモンとお前のポケモンの間、だ。あんまし外でそういう事言うと、悪い人に嫌な事されちまうかもしけねえから気を付ける。ま、ホントに有り難いと思つてるよマリイ、ありがとうな」

したり顔で胸を張つているマリイの目線に合わせ、頭を撫でてやる。フワリと巻き上がる整髪剤の香り、手入れが行き届いているのだろう。絹のよう艶やかな髪の感触が、手を擦つてくる。

懐かしい、弟や妹が褒めて褒めてどうるせえ時は、こうやつて撫でたもんだ。ガキは、たっぷり褒めてやんないと性格ひん曲がるからな。しつかりとお礼を伝えなくては。

そしてオレはさつきから秒単位で送られてくるメールは絶対に見ないぞ。絶対にだ。だつて怖いもん。

「…ア、アクサキ…？」

「あつ、すまん。いつもガキ共にやつてるよう撫でちまつた。幾ら知り合いとはいえ、野郎に髪を弄られるのは嫌だわな。配慮が足りなかつた」

困惑した顔で此方を見てくるバッドガール。視線が交錯した所で、自分がセクハラ紛いな事をしている事に気付き、慌てて手を離す。

：押さえられた。

おバツドガール、何やつてんだよお前。オレの方から触った手前こんな事言うのもなんだが、手を離せ。見られたら事案案件だからこれは。ジ Yun サーさん呼ばれちゃう。

ほら、なんか町の方から殺氣が…!?

「…他の人にもやつてるんだ…へえーそうなんや…とんだタラシばいね。あ、撫でるんなそんま続けて」

「タ、タラッ…? 何処で覚えるんだそんな言葉。けど、あながち間違つちやいねえぜ? オレは全てのあくタイプポケモンにモテモテだから

なあ！後もう十分だろ？もう手エ離させてくれ」

「撫でるんなそんまま続けて？」

「はい」

怖いなあ：ガラルに来てから歳下にビビりまくつてんなオレ。情けねえ：でも怖いなあ…！」

今の目見た？完璧に人一人ヤレの目だつたよ。コイツ若干サイトウに似てる気がする。

「えへへ、アクサキン手、大きゅうてぬくかね。いつまでも撫でられてたい」

「そうだろ？オレの手は兄弟と手持ちポケモンの中では割りかし評判なんだぜ？育て屋や保育士にスカウトされた時もあつたし、立ち寄った町でガキ共の世話を頼まれた事もある。旅先で、同期の奴らが熱出した時は、一晩中頭を撫でてやつたもんさ：ホント、懐かしいな…」  
あん時は割と必死だつた。確かポケセンに泊まつた時で、そろそろ行くかつて準備してんのに全然起きてこなくて、布団ひつペ剥がしてみたら顔めっちゃ赤いの。

んで焦つてもう一人の方起こそうとしたらそつちも顔赤くてうなされてんの。

いや、ビビつたね。急いでジョーイさんと医者呼びにいって、階段から転げ落ちたの今でも覚えてる。医者からは君丈夫だねつて引かれながら言われた。ちゃんとカルシウムとビタミンとつてるからな。でも、普段は大人びてるコイツがこんなに甘えてくるのは、兄貴さんが忙しいからだろうな。確かあくタイプのジムリーダー、ネズさんだつけるか？ジムリーダーは多忙だから、じつくりと甘える暇なんてなかつたに違いない。この歳で甘えたがるんだから、相当団欒の時間が取れなかつたんだな。

ま、どんとこい。こちとら十人兄弟の長男、一人くらい妹分が増えたつて訳ないさ。

「それはそうと、あそこにいるフォクスライはチャチャつと捕まえちまいましようかね。バッド：マリイ、手伝ってくれるお礼に良いもん見してやるよ。ちょっとこれ持つてくれ。見てろよ～」

「え、ちよつアクサキ!? なんで上着脱いで…って何やつとーと!?」

取り敢えず、わざわざこつちまで来たんだ。要件きつさと済ませて、約束の時間に間に合うよう頑張ろう。

待つてろサイトウ、今回のオレは一味違うぜ…！ 捕獲作戦、開始だ！

この後、近くを通りかかったジ Yun サーさんに死ぬほど怒られて、騒ぎを聞きつけた町の人が本気でオレの息の根を止めに来るという、ちよつとした騒動になつたんだが、それはまた別の機会に話そうと思う。

あ、でも…唯、一つだけ。一つだけ話させて貰うとしたら。

バツドガール：お前何故オレの背中に飛び付いてきた？

そのせいでのオクスライにも逃げられるし、あらぬ誤解を掛けられるし、殺氣は倍増するし…大変だつたんだぜ？

せめて、町の人から逃げる時は背中から降りような…てか、今すぐ降りて？

「おいバツドガ…マリイ、いい加減降りてくれよ。いつまでおんぶされる気だ？ オレもうバトルしなくちゃなんねえんだが」

「嫌。まだ全然足らん。それにバトルん後、どうせサイトウさんとどつかいくんやろ？」

吹き抜ける乾いた風に、枯草色が擦れる音、出店に立つおつちゃんとマラカツチの客寄せ声に包まれる。

時は流れて、ここはナックルシティの西に位置する山間の町、ラテラルタウン。

色々一悶着があつた末、無事にオクスライと変化技の使い方を取得したオレは、確かな重量を持ちながら、丘の上にあるジムへと目指

していた。

「それはサイトウに負けた場合だ。それも条件付きの場合。今日はそういうなるつもりはねえよ。だつてオレが勝つからな」

「やつたら一層こんまでおらんと。ほら、うりうり！」

オイコラどういう意味だ、振り落とすぞ。

でも、最近はアイツの方から条件提示してくんだよな…毎回つて訳でもねえが。それに頼まれる内容も、ちよつとご飯でもどうですかとか、少し散歩しませんかぐらいだし、支障を来す程でもねえ。

いや…けど、ほら？先日が先日だつたから…少し…な？

「てかさつきから何やつてんだお前！背中でわちやわちやと鬱陶しい！オレもそろそろ疲れてきたから、そういうチョツカイやめて欲しいんだけど！」

「別に何にもしとらんばい」

「嘘をつけ！思つきしオレの髪いじつてんじやねえか！おい、頬擦りするな！顔を埋めるな！帽子を返せ！息が首に当たつてくすぐつてえんだよ！」

クソ、コイツ鼻でも詰まつてんのか？さつきから耳元でスンスンうるせえよ。ほら、ティツシユやるから、絶対オレに鼻水垂らすなよ？それに腕もそろそろ限界だ。

元々オレは、昔からあくタイプを捕まえる為に鍛えてたし、長旅を続けてきたから、持久力も付いている方だと思う。

最近はサイトウが、「健康の為です」とか言つてガラル空手なるものを教えてくるから、そっこ身体はしつかりと作っている筈だ。しかし空手つて、殴る蹴るだけじゃなく、組技もあるんだな。

けど、幾らガキとはいえ30～40キロぐらいはある。

詰まる所、そんな重りをつけたまま、ナックルシティから徒步は流石にキツい。もう腕パンパンだ。ラテラルタウンつて日差しが強いし暑いから、汗も凄いかいまつた。

特にコイツと密着してる部分が蒸れて気持ち悪い。女つてこういうの嫌いなんじやないのか？

そもそもつて何より…

「…ツ…」

「ママ～わたしもおんぶして～」

「コラッ、みちやいけません！行くわよ！」

「チツ…ここがガラルじやなきや、マルマインを思いつきり叩きつけたのに…」

「もしもしジュンサーさん？今人相の悪い男が女の子を…はい…場所は…」

「までまでまでまで!?」

周りの視線が痛すぎる…！

そうだよね…！人相の悪い年した野郎と年端もいかねえ女のガキが、街中で堂々と密着している…？確実に事案じやねえか…？オレは断じてそういうのじやねえ！ガキなんて対象外だろ、どうやってそんな、その、こ、こい、恋仲の…だあーしやらくせえ？

「大体、これだけでそういう風に勘ぐつてくるこの世の中が悪いんだ！なんなんだよクソ、唯ガキ一匹おぶつてるだけだろうが！あつたとしても庇護の対象だ！庇護の対象！」

「アクサキ、それやと余計、そげな風に見らるーばい？言い訳しとーごとしか聞こえんもん」

「クソがあああ！！じやあテメエはさつさと降りろやアア!!」

「絶対降りん。別に構わんし、寧ろそつちん方が都合が良か」

どういう風に捉えたらそんな結論に達するんだよ！なんか恨み買うような事したかオレ？いいから降りろ!!おいテメ、ガツチリ脚でホールドしてくんna！降りろ！降ーりーろ！

「ちよつといいですか？」

何がなんでも降りようとしないバツドガール、オレの手から逃れる内に抱つこの体勢になつた所で、後ろから声を掛けられる。

ほらあ！お前が変に粘るから、遂に話しかけられちまつたよ！どうすんだよオレまだジュンサーさんのお世話になりたかねえぞ！

しかしここできよどつちまつたら尚更変な事してくるクソ野郎みたく思われちまう。なら、ここは…！

「悪いいな！今取り込み中だからヨオ、後にしてくれや！」

堂々と、押し切つてやる！

背筋をはり、ハキハキと。帽子のつばを上げ、語尾を荒くする事でビビつてませんよとアピール。

目を鋭くさせ相手を牽制し、まるで自分何にも疚しいことしてませんよの体を押し付ける。声的には多分女だ。オレは日つきが悪いから、大抵の奴はここで引く筈ツ！

さあ、果たしてお前は、オレに説教する事が出来るかな！

引き剥がしたバッドガールが腰に巻きついてくるのを無視して、後ろにいる勘違い野郎に勢いよく振り返り

「い　い　で　す　か　？」

見た事もない表情でオレの肩を掴んでくる、ジユンサイより怖い人がいた。

「――――ツア!? サ、サイトテメ、なん、なんでここに!?」

「なんでも何もここはラテラルタウン。私がいるのは当然ですが。少し遅れると聞いたので、その間少し街の警邏でもと思いまして。そしたら…」

黄昏よりも深い黒に染められた瞳、チラリとオレの腰辺りに揺れたかと思うと、直ぐ様此方を射殺せんばかりの目線を飛ばしてくるサイトウ。

汗腺が全開され、冷や汗が滝のように溢れ出てくる。悪い事をしていない筈なのに、ずつしりと肩に特有の重圧が。

思わず膝をつき、正座に移行する自分の姿を幻視してしまう。本能の警告、彼女から発せられるオーラだけで、オレはコイツに敵わないと刷り込まれそうだ。

こ、怖い…怖いよ…この前の比じゃないくらい怖いんだけど…?

オレ、この後無茶苦茶（意味浅）にされるんじゃ…?

「随分と面白い事してるじゃないですか。ねえ? アクサキさん」

「い、いや待てサイト」

「口答え、していいと?」

「はい」

肩に掛かる重圧（物理）が強くなる。骨が軋む音、弁明すらさせて貰えない。反抗したら死、それだけが脳裏に過り、口をかたく閉ざした。オレに変質者のレツテルを貼つて来た周りの奴らが離れていく。この街の代表とも言えるジムリーダーが来たので、事が終息すると思つたのだろう。喧騒が蘇る。

なんか…皆顔引きつつてるように見えるのはオレの気のせい?

おつちやんの呼び込み声、悪くなつた空気を飛ばそうとするセンコーエみたいなんだけど。

あ、目があつた。

直ぐ逸らされた。

すつごい憐みの念が籠つてた。目に。泣きそう。

「今何時が分かりますか?一時です。予定していた試合時間は十二時半、つまり三十分も遅れているんですよ。ねえ、分かりますか?極東の人は時間にしつかりしていると聞いたのですが。貴方には当て嵌まらないようですね。まあ、ここまで良いんです。過ちは誰でも一度は犯します。本当に遅れるべき理由があるかも知れませんしね。てっきり私も貴方が遅れる理由はその類に属するものだと思つていました。しかし…どういう事でしようか?どういう事なんでしょうかね?貴方から送られてきたメール、『フォクスライ捕まえてくる』なんですよ。必要ありますか?私との時間を減らしてまで、必要あるのですか?ねえ、どうなんですか?」

「え、えと…その…お前に勝つ為に、必要かな?…な、なんち」

「ないんですよ、全て。カケラも。微塵も。何もかも必要ないんです。貴方に必要なのは一秒でも早く私の所に来る事。そして長く時を過ごす事。全く持つて遺憾です。何故思うように進まないのでしょうか。メールもそうです。私が何度も何度も返信を打つていてるのに、既読すらつけない。連絡の取れない携帯電話など必要あるのでしょうか?否、不要です。今すぐに口トムフォンを出して下さい。他のデー

夕諸共粉々にしてあげますよ。代わりに新しいのをお渡しします。高性能の新型です。何、遠慮はいりません。問題は何一つ、電話帳に登録できる件数が一しかない事以外は確認されていませんから。貴方に少しでも期待をした私の落ち度です。甘い顔も過ぎては毒、油断は大敵、修行不足も甚だしかった。蜜に虫が寄ってくるのは道理でしょうに、それを平氣で外に置いておくなどと。大事なモノは入念に保管しなければ、現に悪い虫が付いてしまった。さあアクサキさん。今すぐその婦女子<sup>完年女</sup>を引き剥がして下さい。そして今すぐにジムに向かいましょう。あ、バトルが終わつた後も用があります。少し組み手にご協力を。道着は貸し出します。今日の私は多少熱が入つてしまふと思いますが、頑張つてくださいね。簡単に帰れると思わない事です」

メキメキと悲鳴を上げるオレの肩、濡れた瞳が晒される。一步踏み込まれ、更に近くなつたサイトウの顔。心なしか少し上気したそれが視界を染め上げる。

てかやめて痛いから!? なんでそんないじめっ子みたいな顔するの!? 目え怖いよ!?

「ああ、垂涎の馳走とは当にこの事ですね……食器とテーブルが揃つていたら直ぐに頂いたのですが、まあいいです。後でいつでも頂戴出来ますし。さ、行きますよ。そこの、確かネズさんの妹さんでしたつけ? 余り彼に迷惑を掛けないように。貴方と彼の立<sup>年齡</sup>位置を考え、今後行動して下さい。時間を取らせてしまい申し訳ございませんでした。気をつけて、帰宅、してくださいね?」

「あ、いやサイトウ、バッドガールはオレのバトルを」

「見学は許可していません。過度な騒音は試合の妨げとなります。いつもそれで貸し切りにしているでしょ?」

「いやまあそうだけど、でも一人で帰らせんのは」

「はい?」

「なんでもないつす、はい」

「ごめん、もう無理。キヤパ超えた、完璧にキヤパ超えたよ。いつもならこんなガキ一人で帰らせるなんて何考えてんだテメエと突つか

かる所だけど、今のオレには無理だわ。

マジすまんバツドガール、不甲斐ない年長者を許してくれ。ちょっと買い物出来るぐらいの小遣いは渡すから。

「だってよバツド…マリイ、見学ダメだつて。マジですまねえな、せつかくここまで付いてきて貰ったのに、オレがアイツ怒らせちまつたせいで。ほら、小遣い。終わるまで、ちょっとそこら辺プラプラしててくれ。変な人に付いていくなよ？なんかあつたら直ぐに電話かける、一応ブラツキー預けておくから。ブラツキー、頼んだぞ。コイツを守つてやつてくれ」

「…」

「マ、マリイ…も、もしもーし？」

財布から数千円取り出し、ブラツキーが入っているボールと一緒に渡す。

が、ホルスターをちょこんと掴んだまま俯いているバツドガール、反応がない。ただのしかばーーーーー

「…かね…」

「え？」

「仲間外れは、寂しかね…？」（裾クイツ十つぶらなひとみ）

「――――」

「こうか は ばつぐん だ！」

「そ、そうだよな！ そうだよな！ 仲間外れは寂しいよな！ 悪い悪いオレがどうかしてたぜチビツコ一人にさせるなんて何よりも避けなきやなんねえのによオ！ 一緒にジムまで行こうな！ しつかり応援頼むぜ！」

「え、ちょっと、何勝手に決めてるんですか。見学は許可しないと言つた筈ですが」

「うるせえ！ 己の目的の為に街中でガキ一人にさせるバカになんて、

オレはなりたくねえ！遅れたオレが全面的に悪いが、バツドガールに見学許可がおろせねえってんならまた別の日にさせて貰うぜ！大体お前なんとも思わないのかよ、ジムリーダーだろそれぐらいの器量を見せつけてくれや！」

「クッ…至極真っ当な正論…！し、しかし何を言われようと彼女に対して私はなんとも思わ、嘘です。見学を許可しましよう。だからお願ひしますそんな目を私に向けないで下さいその顔もとても素敵で疼いてしまいますがそれ以上に怖いです！」

普段ならこんな威圧的な事はしないようにしているんだが（特にサイトウには）、別に構わない。恐怖心も罪悪感も這つてこない。彼女を見てクソみみたいな劣情が浮かび上がった訳でもない。

あるのは、間欠泉の如く腑の底から噴き上げてくるこの感情のみ。遠い昔の記憶が蘇る。

ジョウトで暮らしていた時、駄々をこねる弟や妹の為に近所の駄菓子屋へと連れて行つた記憶が。

カントーを巡っていた時、公園に来たガキどもを面倒見て、丸一日をそいつらの相手をしてやつた記憶が。

ホウエンで旅費を稼いでる時、知り合つた奴らと臨時で保育士になり、ガキどもにもみくちやにされた記憶が。

長々とすまない。簡潔に言おう。

父性がダイマックスした。

「アクサキ、おんぶして欲しか…ダメ？」

「は？ダメに決まつてますよなんでアクサキさんがそんな事しないといけないんですか。ジムまで坂やら階段やらありますから、彼に負担が掛かります。第一貴方、さつき嫌がられてたじや」

「おういいぞ！おんぶの一つや二つくらい、どうつて事ねえぜ！ほらマリイ、しつかり掴まれ、よッ！」

「アクサキさんッ！」

今のオレならなんでも出来そうだ。

彼女の細い腰に手を回し、力を込めて高く上へ。磁器のようになじみ、太腿を肩に乗せ、足首掴んで固定すりやあ俗に言う肩車という奴だ。突然の行動に少し戸惑つたバツドガールだが、すぐに軽快な笑い声を上げる。あ、おんぶつて言つてんのに肩車しちまつた。まあ喜んでるしいいか。こら、帽子とんな。

「ダ、ダメです認めません！…どうしても何かを背負いたいと言うのなら、私を背負つて下さい！ほら、年頃の婦女子を生に背中に感じられますよ役得じやないですか、早くソイツを下ろして屈んで下さいよ！」

「なんでだよ。高々ガキのワガママ、可愛いもんじやねえか。それになんでテメエをおぶらなきやなんねえ、テメエで歩け」

「くっ！いいから屈んで下さいッ！」

そのまま進み出したオレ達の横をついて回り、ダメだダメだと抗議するサイトウ。延々と文句を言う姿からは、普段の覇気が見る影もない。さつきまであつた殺氣（なんちつて）が消え失せた。

大人顔負けの雰囲気を出す彼女の姿から一転、まるで駄々を捏ねるガキそのものだ。どうしたのだろうか。

「…アクサキがいいつて言つてるのに、

ジムリーダー<sup>筋肉ダルマ</sup>が、ごちやごちやとしやあしかね…背負つても堅か感触しか感じられんアクサキがかわいそう」

「此方の台詞です。色白な癖に脳内真つ黒な貴方に触れられたら彼まで汚れてしまう。早急に離れて下さい。それとも…喧嘩なら買いますよ、妹さん？」

「きやあーえずかばいアクサキー、サイトウさんえずうて一人で歩けそうになかねー」

「…随分と汚らしい蛆虫だ。急いで取り除かなければ彼が膿みに蝕まれてしまふ。ソイツを下ろしてくださいアクサキさん。後すいません、先に彼女とバトルしなくてはいけなくなりました。なに、すぐ終わらせますよ」

現に、なんかバツドガールとバツチバチになつてるし。

冷静沈着を心掛け、常に感情を表に出さない彼女にしては信じられ

ない光景だ。バッドガールの何がそんなに気に食わないのだろうか。

案外コイツ子供嫌いなのか？いや、ゴースト仮面と一緒に飯食つてる所も見たし、子供ファン対応もしつかりしてるから、そういう訳ではないと思うんだが…

やっぱ、かくとうタイプとあくタイプは馴れ合えねえのかな。フフ…矢張りあく使いは孤高の戦士、皆から求められる正義の鉄槌とは混ざり合えないって訳か…シブイな！

ま、取り敢えずこの空氣耐えられんから止めよ。

「おい、こらお前ら、喧嘩すんな。サイトウ、さつきからみつともねえぞわーきやーと。仮にもコイツの年上でジムリーダーだろ？ガキのやつすいちようはつぐらい、そんなガチで怒らんでもいいじやねえか」

「ですが…！」

「ですがもデスカーンもねえの。オレみたいななんかが何言つてんだつて思うんだろうが、ここは一つ、年長者を見せてくれねえか？」

「ツ…――分かりました」

「マリイ、お前もだかんな。変に人を煽るな。相手は年上なんだから、ちゃんと敬意払え。勿論オレにもだ」

「はーい、サイトウさんと違うて、マリイはお利口やけんちゃんと言うこと聞く」

「一言余計だ一言余計。ホントに分かつてんのか？」

よし、二人とも落ち着いたみたいだし、これで大丈夫…だよな？相変わらずオレの髪わしやわしやしてくるバッドガールを横目に、黙つて歩きだしたサイトウを見る。

キビキビとした動き、伸びた背筋にいつものサイトウを見出しが、いかんせん、表情が冴えない。本人はポーカーフェイスを保ててていると思つてんだろが、その顔には沈痛といった感情が浮かんでいる。…少し、強く言い過ぎただろうか。

オレン家は喧嘩した時、まず年長者が叱られて、我慢してあげてくれだの譲つてやれだの諭されるタイプの家だ。それに反発する事は多々あつたけど、いつも親父やお袋の姿を見ていたから、長男として

の理解は出来ていた。

だから、ついついサイトウにも同じノリで言つちまつたんだが：でも、幾ら「コイツが大人顔負けの天才少女だとはいえ、少女は少女。オレよりも年下だ。オレが勝手にテメエのルールを押し付けるのは、確かに良くない。物分かりがいいから理解してくれているけど、納得はしていない筈。

大体約束遅れてきた奴から説教くらうとか、クソ煩わしいに決まつてる。オレだつたら速攻殴り掛かる。何してんだオレ。

そう思うと、矢張りコイツはしつかり者なんだろうな。問題は、そのしつかり者がなんでこんな喧嘩するか、その要因。

：コイツも、案外人に甘えられねえ人生歩んできたらしいからな：英才教育、なるものを受けていたらしい。

兎に角厳しい両親を持ち、表情筋が衰える程の辛い修行の毎日。弱音なんて吐けなかつたと、この前ポロリと溢していた。話だけ聞いたら胸糞だが、本人は感謝をしていると来てつからどうしようもねえ。ジムリーダーとなつてからは一層弱い所なんて、彼女の性格上見せられないだろう。そんな溜め込む毎日送つてる時に、約束遅れた野郎が知らねえガキ甘やかして、テメエは我慢しろ…鼻につく事この上無いな。

てか改めて見てみるとクズじやねえかオレ。これは不味い。ちょっとフオロー入れないとかなり不味い。

それに、これでは彼女が仲間外れだ。一人は…とても寂しい事だとオレが一番わかってるだろうに。

しううがねえ、人生の兄貴として、此処は一肌脱ぎますか。

「マリイ、ちょっとしつかり捕まつてろよ。絶対離すな」

「？分かっただばい」

「よし良い子だ。おいサイトウ、ちょっとといいか？」

「…なんでしようか…？」

一步前を歩いているサイトウを止め、此方に身体を向けさせる。振り返ったサイトウは明らかに自分拗ねてますオーラを醸し出しており、声にはハリがない。

まるで構つて貰えなかつた兄弟たちの様だ。それが尚更、オレの行動を後押しさせる。

「…先程は取り乱してしまい申し訳ありません。矢張り、自分にはまだ修行が——」

「ちよいと失礼」

「——あ」

自分の態度に謝罪を要求されたと勘違いしたのか、頭を下げてくるサイトウ。その丁度良い高さになつた頭に手を当て、ゆつくりと。手を櫛にして、砂金の様にきめ細やかでサラサラとした髪をかき分ける。

ゆつくりと、ゆつくりと。ガキに込める慈愛を、そのままサイトウに。今までの経験を全て動員させ、ゆつくりと浸透させていく。コイツの心に溜まつたヘドロを、少しづつ、掻き出していく。

「さつきは少し言い過ぎちまつてすまねえな…いつも頑張つてくれてんのに、ちょっと配慮が足りてなかつた」

「——あ、いえ、そんな…私は、その…」

「謙遜すんなつて。いつもジムリーダー頑張つて、偉いな。オレアお前のおかげで、毎日ホントに助かつてるぜ…ありがとうございます…！」

「…あ、ありがとうございます…!」

髪を梳く作業を繰り返す。

こういう、真面目で、謙虚で、中に溜め込む癖のある奴は、自分でも分からぬ内に承認欲求が募つていくと聞いた事がある。ガキは褒めてくれと遠慮しねえが、彼女はもうそんな歳では無い。ジムリーダーという立場、向けられる期待、厳しい両親、作り上げた自分自身。褒めてくれなどと、嘯く事なんか出来やしない。

だけど、彼女が褒めてくれと言えないのなら。

此方が、頑張つたなど。褒めてやる事が必要だろうに。

まだ、その全てを背負うには、早すぎるだろうに。

いかんせん彼女は天才だから、出来上がつていると勘違いしてしまふ。誰も彼女を褒めやしない。彼女に掛けられる言葉は常に『頑張れ』であり、『頑張つたね』ではない。

それがどれだけ寂しい事なのか、オレは、全て理解出来ている訳では無いけれど。

美味しそうにケーキを食べているサイトウを。

楽しそうに買い物をしているサイトウを。

嬉しそうに、ポケモン達と戯れているサイトウを。

コイツは普通の女の子なんだと、それだけは知っている。

だからせめて。

周りが彼女を褒めないならば、せめてオレだけでも。

かくとうタイプ永遠の宿敵ライバルとして、彼女を労おうじやねえか。

任せとけ、こちとら十人兄弟の長男。

一人や二人、妹分が増えたって、どうつて事ない。

「よしよし、頑張ったな…ほれ、お終い。惡りいな、髪くしゃくしゃにしちまつて、女つてえのはセットとか大変なんだろ？今日の遅刻の事も合わして、今度埋め合わせするから、勘弁な？」

「……え？あ、もう終わりですか…いや、その…お気遣い頂き、ありがとうございます…埋め合わせの件、是非とも、よろしくお願ひします。しかし…何というか…ホントにアクサキさんですか？頭でも打つたのでは？」

「おいコラどういう意味だ」

「そのままの意味です。あと、婦女子の髪を断りもなく触らない様に。他の人には絶対やつてはいけませんよ？」

…正直言つて、危なかつた…彼にこんな一面があるとは…！落ち着けサイトウ、落ち着くのです…！」

良かつた、いつものサイトウに戻ってくれた。顔つきも、大分ハツキリとして、矢張りストレスとか溜まっていたんだろうな。なんかぶつぶつ言つてつけど、これにて一見落着つて訳かな。

しかしさつきからバツドガール静かだな。どうした？

「あ、そつかそだよな。やつべ、マリイにも同じ事言われたの忘れてた。いや普通にすまんな

…妹さんにもやつたのですか？」

「え？おう、やつたけど…」

「…まあいいです。それ以上に、構つて貰う事とします」

「おう任せとけ。テメエはいつも頑張っているよ。甘えたい時はいつも甘えてこい。この最強のあくタイプ使い、アクサキ様が労つてやろう！フフツ、あくタイプを頼つてくるかくとうタイプ…実質コレ勝ちなのでは？」

「馬鹿な事を言わないでください。貴方が私に勝てる訳ないでしょうーーーありがとうございます」

「…いいって事よ」

一瞬不穏な空気が流れた気がしたけど、気のせいだつたみたいだ。再び一步前を歩き出すサイトウ、足音だけが響いて、沈黙が続く。

だが、悪くない沈黙、という奴だな。その静寂が、不思議と気持ちが良かつた。

あー、今日も善行を積んでしまつたな。全く、オレってばなんて罪作りな男なんだろうか。バツドボーイがグツドボーイになつてしまふ。

これはアルセウス（こわもてプレート）もほつとけないわ。よつしや、なんだかいけそうな気がしてきた。バツドガールが教えてくれた戦法もあるし、今日こそテメエをボコボコにしてやるぜ、サイトウ！

見えてきたララテルジム、逸る気持ちを胸に秘め、そのまま足に力を込めた。

「…ねえ、アクサキ」

「フフ…うん？どしたマリイ？」

バツドガールが発した言葉で

「やつぱり、やつぱり他ん奴らにも同じ事やつとつたんやなあ。ばり悲しゆうて、残念ばい」

「ハツ、それはそれは残念でしたね。下らない妄想が崩れ落ちて、お気持ち、ご察し致しますよ？」

「はあ…こりやあんまり言いとくななかつたつちやけど、まあ、さつきからちよつと優しゆうされただけで、勘違いして有頂天になる可愛そ

うな人見てられんし、現実教えちゃつた方がよかね…アクサキ」

「？」

場が凍りつくまでは。

「アクサキがくれたカジツチュ、今も元気にしとーばい」

「…は？」

ああ、あの時のサイトウの顔、多分一生忘れないだろう。  
油のささつてないギアルの様に、ゆっくりと振り返り。

お前、それは本当かと、目線で投げかけてきたサイトウに対して。

「え？ おう、やつたけど…」

そう言つた時の、サイトウの顔を、一生。

見えない筈なのに、何故か粘着質な笑顔を浮かべているバッドガールが、脳裏に過つた。

## ふいうち

オレはあくタイプが大好きだ。

何故あくタイプが好きなのかと問われれば、軽く半日は語つてしま  
う程、オレはあくタイプを愛している。

あくタイプと聞けば、人によつて顔を顰める人もいるだろう。が、  
少し待つて欲しい。『あくタイプ』という五文字だけで、あくタイプの  
全てを判断するのは、あくタイプ使いとして許せないものがある。  
そんな、最近次男と長女から旅が順調だという報告を受け、なんと  
か崩壊寸前のメンタルを立て直したあくタイプ使いことオレ。

我らが宿敵サイトウを倒すべく、今日も元気にラテラルタウンへと  
足を運ぶ…のだが、今回は同じラテラルタウンでも目的地が違う。  
何故なら…

「頼むゴースト仮面！オレにゴーストタイプの扱い方を教えてくれツ  
！」

「え、え…あの、その…どちら様ですか…？」

ここはいつもお馴染み、枯れた風が吹き抜けるラテラルタウン。  
そこの、サイトウのジムとは真反対の丘に建つてゐる、チャレン  
ジャー最初の選択肢が一つ、ゴーストジム。

オレは今、ゴーストタイプの極意を教わるべく、このジムのジム  
リーダー、オニオンことゴースト仮面に絶賛土下座中である。

「悪いいな、こんな無茶振り聞いて貰つてよ！あ、自己紹介が遅れたな  
！オレはアクサキ！唯我独尊、疾風怒濤を掲げし新星のあくタイプ使  
いだ！ま、あくタイプ使つてもう数年は経つてつから、新星でもなん  
でもねえがな！アツハツハ！」

そう言つて、土下座により真っ黒になつた顔を振り上げ、自己紹介  
をしてきたチャレンジャーさん。

名を、アクサキ、というらしいです。取り敢えず、ジムの入り口で土下座されても目立つし困るので、ロビーへと入つて貰いました。

後、汚れが凄いので、拭う用にハンカチを…あ、でも…僕なんかが使つたもので大丈夫かな…大丈夫、だよ、ね？

「あ、すまねえな、ハンカチまで貸して貰つちやつて。洗つて必ず返すぜ。あと、これ…ちよつとした菓子折だ。フエンせんべいってんだけどな、お茶でも飲む時食つてくれ」

「あ…わ、ざわざどうも…ありがとうございます」

よ、良かつた…見た目に反して、意外と律儀な人のようだ。

なんでも彼は、サイトウさんの所でチャレンジを受けているそうなのでですが、使つてているタイプの都合上（彼は頑なに自分の腕の問題と言つたのですが）中々突破出来なくて困つていたそうで。

そこで悩んだ結果、かくとうタイプの技を無効化できるゴーストタイプを扱えるようになればいいんじゃないのか、という結論に達したらしく。

じ、自分で言うのもなんですが、一応ゴーストタイプを上手く扱える方である僕の所に、教鞭を振つて貰うべく訪ねてきた…らしいです。

ここまででしたら…その…ポケモンの、何よりゴーストタイプの事で頼つて貰えるのは…あの…僕的に凄く嬉しいし、一トレーナーとして誇らしいんですけど…

「いやあ、噂には聞いていたが…ホントに仮面つけてんだな！その仮面どうなつてんだ？なんかの骨で作られてんのか？なんか、ミステリアスでカッケエな！しかし…お前ちゃんと飯食つてるか？随分と細い身体しちまつて…オラ！」

「わ、わ…！」

「ほらこんなに軽い。お前まだまだチビなんだから、いっぱい食わねえとおつきくなれねえぞ。よつしや！先ずは飯屋に行つて腹揻えするか！好きなの言つていいぜ！カレーか？ラーメンか？それともジョウウト料理屋か？勿論勘定はオレが持つぜ！」

「そんな、お気になさらず、お、おろして、下さい…!?」

急に彼が立ち上がったと思うのも束の間、腰に手を回されます。何を、と彼に問い合わせる暇もなく、そのまま一気に重力から引き剥がされ、彼の頭上へと…所謂タカイタカイの体勢です。

そう、この人…口調が乱暴な割に、凄く眞面目で律儀な人なんですが、いかんせん、なんというか…：

僕たち、初対面のはずなのに、凄いグイグイくるというか…!?なんなのだろう…いや、ホントになんなのだろう。

完璧にノリが昔ながらの友達感覚で接してきます。人付き合いが苦手な僕にとって、この状況は少し厳しいものが。

正直言つて、タイプ相性が不利すぎる。流石はあくタイプ使い、ゴーストタイプ使いの弱い所をズンズン突いてきますね…：

「そ、その…!…ご飯に、行くのも良いで、すが…その前に、あの…貴方のポケモンを、見せて、欲しい…です。どんな、子か…その…ゴーストタイプも、色々、あつて…教えるのも、楽なので…」

「お、そつかそうだよな、今日はゴーストタイプについて教わりにきたんだつた。色々飛ばしそぎちまつたな、すまんすまん。えーと…ほれ、こいつだ。こいつの事で、少し話を聞きたくてな」

そのまま僕を担いで外に出ようとするとアクサキさんを、なんとか引き留めます。幾らゴーストタイプの扱いに長けているとはいえ、ゴーストタイプにも、それぞれ個性がありますから。

事前にどんな子か、知つておくおかないで、大分、対処の正確性が、変わつてきます。そ、それに、僕も、もう男の子なので、流石に恥ずかしいですからね、肩車。

僕の、必死に捻り出した言葉を、しつかり聞き取ってくれたアクサキさん。肩から下ろしてくれました。

そのまま流れるように、目線を合わせようとしゃがむ所を見ると、僕のような年齢の子との、接し方には慣れているのでしょうか…：

あ、あの、なんで頭を撫でてくるの…?

「…出てきてくれ、ヤミラミ。少し話をしようぜ」

『…』

少し躊躇つたような表情を見せた彼は、ホルスターからダークボー

ルを取り、中にいるポケモンを呼び出します。

出てきたポケモンはヤミラミ。あく ゴーストタイプのポケモンです。

土を掘り返す鋭い爪と、主食の鉱石を噛み碎く尖った牙を持つており、暗闇で宝石の瞳が光る時、魂を吸い取ると言われ恐れられています。

で、ですけど…

洞窟のゴーストタイプと言つたら、というポケモンですが…シャンデラやフワライドなどと比べたら、比較的扱い易い方に分類されます。

アクサキさんは脱落者が多く出るカブさんのチャレンジを突破する程の実力を持っていますし、とても扱えないという程のポケモンでは…

「ヤミラミ、です、か…あくタイプ、ちゃんと入つてますもんね…」

「そなんじよ、あく ゴーストつていうスッゲエ優秀なタイプですか、何よりキートでミステリアスだろ？オレは大好きなんだが…いつてえ！」

『……！』

「だ、大丈夫、ですか…!？」

アクサキさんがヤミラミの頭を撫でようと手を伸ばした、その腕に、ヤミラミが妖しく光る紫紺の爪を突き立てます。

加減はされているようですが、衝撃により仰反つたアクサキさんの腕には、真っ青な痣が。

「イチチチチ…相変わらず乱暴な奴だなお前は。そこもいいんだけどよ…あ、大丈夫大丈夫、心配すんな。日常茶飯事だから」「いや、でも…痣が…！」

「大丈夫だつて、ほつときや治る」

ほ、本当に大丈夫でしょうか。ポケモンの技を、それもゴーストタイプの技を受けるなんて、普通の人なら慌てるなりすると思うのですが…

顔に刻まれている裂創然り、腕に染み付いている咬傷然り、随分と、

自分の怪我に頓着がない人の様です。

：サイトウさんが良く話してくるチャレンジャー、今更ですが、この人で間違いないですね。あの人が嘆く気持ちが、すつぐく分かります。これは確かに心配になつちやう。

「今のを見てくれれば分かると思うけど、この通り、あんまオレには懷いてくれなくてなあ。バトルでも言う事聞いてくれないし、ホント、どうしようかって思つててよ…だから…」

「…なるほど…なんで、こんなに懐かないのか、知りたいと…」

「そう言う事。オレの知り合いで頼れる靈能力者はジョウトにホウエント、聞こうとしてもちつとばかし無理があるだろ？お前の事はサイトウやマリイから聞いてたし、少しばかり、仲良くなるきっかけになるかなつてな」

そう言つて、アクサキさんはボールに戻つてしまつたヤミラミを、愛おしそうに、寂しそうに見つめます。

トレーナーに牙を剥くポケモンなど、運が良ければポケモン大好きクラブ行き、悪ければ捨てられるのに…それでも自分のポケモンとして、愛そうとする彼は本当に優しい心の持ち主なのでしょう…顔は怖いですけど。

さて、では早速始めましょうか。

「で、は…その、ボールを、貸してもら、えますか…？」

「ん…OK、分かつた。気を付けろよ」

「だ、い丈夫…です。こう、見えて…ジムリーダー、ですから…」

「ははっ、そりや頼もしいこつて」

む…また頭を撫でられました。僕が幼く見えるのはしようがない事ですが、やつぱり恥ずかしいものは恥ずかしい…なまじ気持ち良いのが厄介すぎます。

おつと、気が逸れてしました。いけないいけない、集中しましょう。

彼からダークボールを受け取り、開閉スイッチを押します。飛び出すヤミラミ、辺りを見回せば、後ろに主人、正面に訳の分からぬトレーナー。

そのトレーナーが、自分に掌を向けてくる。とても不審に見えるでしょう。ヤミラミの、歪む顔、強ばる体、妖しく光る影の爪。空気が張り詰める。

「ツ、おいヤミラーネー！」

「——まつて」

それを見たアクサキさんが腰を浮かせますが、手で制します。

詰まる喉、瞳に不安の色が濃く、されど此方の意を汲んで言葉通りに、ソファーに重量が加わる音。

下手に、ゴーストタイプの気を立てると、靈氣や波長が合わせ辛くなってしまいます、からね。少し、待ってください。

『……ツ！ツ！』

「だ、いじょーぶ、怖くない、よ…」

ゆっくりと、手を伸ばす。彼から発せられる靈氣、波長を、取りこぼさないように。紺碧の身体へと、手を伸ばす。

この力を扱えるようになつたのは、小さい頃の、大怪我がきっかけ。あの大事故で、生死の狭間を彷徨つた僕は、亡くなつたゴーストタイプのポケモンが見える程の、靈力を授かつた。

他人には見えないモノが、僕には見える。

他人には聴こえないモノが、僕には聴こえる。

他人には感じられないモノが、僕には感じられる。

ゴーストタイプ

当時は唯々恐怖の象徴でした。無理もありません。まだ今も未熟な僕ですが、あの時はもつと未熟、まだ暗がりで二の足を踏む、年相応の子供です。

当然、怖かつた。周りにいた、大人達でさえ、ゴーストタイプの事を恐れ、避けていたのですから。

だから最初は、戸惑い、怖くて、不安で。

もう普通の生活が送れないと、暗澹とした気持ちになつたりもしました。

勿論、最初はですけどね？

ヤミラミに意識を向けながら、チラリと自分の腰にかかっている

ボールを見る。中に入っているのは、小さい頃から共に戦い、共に泣き、共に笑った相棒、ゲンガー。

ゴーストタイプとはいえ、ポケモンはポケモン。

そう、僕に教えてくれた、掛け替えの無い存在。

あれは確か：朝から雨がシットシットと降っていた、薄灰色の日曜日。家族みんなで、おばあちゃんが眠っている靈園へと足を運んだ、あの時に。

墓石の前に、1束の花を添えて、手を合わせるゴーストを見て。僕の世界はさっぱりと晴れたんです。

「…よし、掴ん、だ…」

構える姿勢は、次第に、鷹揚。

一つ一つの細い糸が絡み合い、丈夫な紐へと昇華する感覺に、ヤミラミの周りに張られていた空気が弛緩します。色々と思いに耽つている間に、どうやら波長があつたようです。

これが野生のポケモンだつたら、もつと時間が掛かつたのでしょうが…そこはモンスター・ボールの力か、はたまたこのヤミラミが、まだ彼に対して心を塞ぎ込んでいないのか。

多分、後者でしょう。

短い付き合いですが、アクサキさんはポケモンの事をとても理解している優しい人つて分かります。どんなに邪険に扱われても、どんなに反抗的な態度を取られても、それを許して、自分のポケモンをどこまでも愛せるポケ格者。

きつとヤミラミも、それに気付いている筈です。ただ今は、ちょっとした、それこそ反抗期のようなものが来ているだけ。

さあ、ヤミラミ。僕に、君の想いを教えて下さい。

君が、彼の事をどう想い、どれほど愛しているのか。

恥ずかしがらなくていい。僕だけに、少し、教えて下さい、ね？

それらの言葉、その意味を靈力に乗せて、さつきより淡くなつた紺の手を取り込みます。

びくりと跳ねるヤミラミ、しかしこちらの求めているものを理解して、考え込む。しばらく下を向いて、心の整理をしているようです。

その姿は、まるで告白前の子供の様。

少し微笑ましく思いながら、ようやく意を決したヤミラミの、光り輝く瞳。それを介して、彼の想いが乗った靈力を受け取ります。

ふふふ、さて、一体どんな事が書かれているのかな…？

## 『アノヒトノ、コトガ、トテモ、コワイ。タスケテクレ』

……あれ？

「あ、あれ？ お、か、しい、な…？」

「おつ、どした？ なんか分かつたか？」

「え、え…確かに、彼の想いを、聞き出すことが出来、た、のですが…」「おお！ 流石ガラル一のゴーストタイプ使い、靈能力者としての力もピカイチだな！ で？ なんつってた？」

「いやあ、その…なんというか…」

これは伝えても良いのでしようか…？

思つた以上に、深刻な想いを伝えられた事に対する動搖が隠せません。

え？ あのヤミラミそんな事思つてたんですか？ てつきり、『最近中々素直になれなくて…』みたいな事がくると思つてたのですが。どうしましよう、頭に思い浮かべたものが一気に崩れ去りました。結構ちゃんとした恐怖の念が含まれていましたからね。

あれ？ もしかしてアクサキさんつて、見た目通りの人？ 僕の早とちりなの？

いや、一旦落ち着きましょう。先ずは彼にこの事を話さない限りには、進みません。何かしらの事情があるのかも知れませんし、それを知つてからでも対処は遅くないでしよう。

万が一、ゴーストタイプが軽視されている様な事をしていたら…お家に藁人形余つてましたつけ…

取り敢えず、伝えておきましょうか。ゲンガー、一応構えてて。

「……はー成る程、オレの事がめちゃくちゃに怖いと…」

「はい、確かにその様な事を…あの、つかぬ事をお聞きしますが、何か心あたりとかはありますか？どんな小さいことでも構いません。洗いざらい話して下さい。いいですね？」

「お、おう、急にハキハキ喋りだすな…なんか怒ってる？」

「怒つてません」

「いやだつてダークボール構てるし、ヤミラミの事抱きしめて離さないみたいになつてるし、やっぱ怒つて」

「早く話して下さい」

「は、はい」

そ、そうだなあ…と頬に手を当てるアクサキさん。記憶の海へと泳ぎだす。さあ、ちゃんと想い出して下さい。

何も危害を与えていないなら、ゴーストタイプが、ゴーストタイプがつ、人をこんなにも怖がる筈が無いんですからっ！

…ああ…オレの事怖がつてる理由、分かつちまつたかも…

「なんですか！」

「ちよ、近い近い仮面落ちるぞお前、ちゃんと話すから落ち着け。しつかし何処から話したもんかなあ…」

ま、無難に出会いからか

「そいつはさ、実はオレが捕まえたポケモンじゃないんだ。話すと少し長くなるんだが…オレがホウエンを旅してる時に、ゴーストタイプ使いと友達になつたんだよ。そいつから貰つたポケモンでさ」

「友達から、貰つたポケモン？」

「そう、貰いモン」

交換ではなく、貰つたポケモン、ですか。

でもそれだけで、ここまで彼を怖がるでしようか…もしかして、半

分奪う様に貰つていつたとか…！

「お前が考えている様な、強制的に連れていくたつてえ訛じやねえぜ？ちゃんとそいつから直々に貰つたんだ。

『この子を見て、いつでも自分を思い出して』つて。

まあ、確かにトレーナー直々に貰つただけだから、ヤミラミが納得

してたかって言われたら、首を傾げるしかないんだがな。そこは悪いと思つてる。でも多分そこじゃないんだよ、オレの事怖がつてる要因は。問題は…その、貰う前に過ごした時間かもしんねえ

「そこで酷い事をしたと」

「違うよ? 急に辛辣だなお前。バトルをな、したんだ。特訓とも言うか。最初もいつたが、そいつの親トレーナーゴースト使いだろ? そいつがな、自分はあくタイプ使いに中々勝てない、克服する為にも手伝つてくれつて言つてきたんだ。まあ別に断る理由もねえから、当時持つてたポケモン達で付き合つてやつたんだけどよ。そんときには…」

「そんときには…?」

「そのお…ほら、オレつてば最強のあくタイプ使いじやん?だから、さ…あの、ちょこつと見栄を張つちやつたというか、ゴースト使いには負けたくなかったというか、なんというか…結構、そいつと派手に殺りあつちやつたんだよね…ガキどもに見られたら泣かれるレベルで…」

⋮

「子供が泣いてしまう程この子を虐めたんですか…?」

完璧にギルティじゃないですか。問答無用案件ですねこれは。ゲンガー、出番です。彼に向かつてシャドーボール、手加減はしなくていいですよ。

「待て待て待て! 誤解だ! いや誤解じやねえかも知れねえが! 少なくともオレは戦闘不能の奴に死体蹴り行為なんてクソみたいな事やつてねえぜ! 泣くつてえのはオレの顔を見て、つて話だ!」

「…聞きましよう

「シヤ、シヤドーボールの構えは解いてくれないのな…お前もさつきからチラチラ見てるから分かると思うが、オレの顔つて結構ワイルドだろ? 当時もこの傷はちゃんとあつてな、なんなら今より生々しく刻まれてて…

それに…オレ、よくサイトウとかから言われるんだが…本気で集中してたり、かなり気持ちが昂ぶつてきたりしやがると、な。それらが合わさつて、かなり怖く映るらしいんだ。この前なんてサイトウのやつに、何人ミロカロ湖に沈めましたか? なんて聞かれちまつてさ…で

も、そうか…ヤミラミお前…」

オレのこと、怖かつたのか

そう言つてアクサキさんは、本当に悲しそうに眉を下げて笑いました。自分の顔に刻まれた裂創を、ゆっくりとなぞり、色濃くそれが歪みます。

彼の顔見たゲンガーハはシャドーボールを引っ込めて、申し訳なさそうに隣のソファーへ。元気だせよと、背中を摩ります。

「す、すいません、早とちりしてしまつて…」

「いや、いいんだ、気にすんな。確かにオレは人相が悪りいし、オマケにあくタイプ使いときてらあ、そりや勘違いの一つや二つするさ。この傷も、テメエの落ち度でついたつて訳だし、元々こつちにくる前はトラブルとかもあつた。使つてるタイプの関係上、エスパーやゴーストに嫌われやすいことは分かつてた筈だしな、ありがとよゲンガー、もういいぞ」

深く帽子を被り直す仕草、ソファーから立ち上がり、ゲンガーハの頭を揉みくちやに撫で回します。気持ち良さそうに目を細めるゲンガーハ、その様子を見て僅かに口角を上げますが、直ぐに戻し、僕に向きます。

そのまま僕に抱かれたままのヤミラミを真っ直ぐ見つめた後、机に置かれていたダークボールを構えて、中に戻しました。

「すまねえなヤミラミ、今までお前の気持ちに気付かなくて。今からお前の親元に送り返してやつから、少しだけ我慢してくれよ。ホント、今までありがとな、楽しかったぜ？少なくともオレはな。でも、その分お前に迷惑掛けちまた」

やつぱり、オレなんかがゴーストタイプなんて扱おうとした事が、間違ひだつたつて訳だ。

そう、とても悲しそうに、とても寂しそうに呟いて。

それなのに、それら苦しい事を、心の奥底に押し込んで、見せない様に笑顔を浮かべたアクサキさん。

そんな姿を見てしまつた僕は。

「——ツ、そ、そんなこと、ないですよ！」

思わず声を荒げてしまった。自分でもこんなに大きな声が出せたのかと驚くほどに通る声量、キヨトンとするアクサキさん。どうしたんだと此方を見てきます。

当然、その先の言葉なんて考えていませんでしたから、あたふたと慌ててしまい、何を思ったか彼の手をガツチリと握ってしまって。「その、あの、無理なんてッ、そんな事ないですよ！た、確かにアクサキさんは、そ、あ、えと、顔は怖、怖いですけど、僕も勘違い、しちゃいましたけど！と、と、とても優しい方だつて分かります！あんなに自分を嫌っているポケモンに、愛おしそうな目を向けられる人、それにゴーストタイプに、ぼ、僕、初めてで！きつと、きつと、まだお互に心がすれ違つてるだけで、少し気持ち、分かるんですつ、ゴーストタイプも見た目だけで怖がられる事がありますから！でも、その、あの、僕は何を言いたい、えつと、その…！」

——あ、アクサキさんなら、絶対にゴーストタイプと仲良くなれますよ！僕が保証します！！

だ、だから、付いてきて下さい！

そう叫んで、手を繋いだままジムの外に彼を連れ出した僕を、本気で殴り飛ばしたい気分です。

ああ：僕は何て恥ずかしい事を…穴があつたら入りたい…！？

「しかし驚いたぜ、お前つてばあんな大きな声出せたのな。急に手を掴んでくるし、ようやくガキらしい姿見せるじやねえか」

「あうあう…や、やめて下さい、思い出しただけで恥ずかしいんですから！」

「そうかあ？ 年相応な姿だつただろ、恥ずかしがる事なんてなかつたと思うが。オレも弟が増えたみたいで楽しかつたぜ。ほら、なんなら今も手工握つてやろうか？」

薄暗い空気、どんよりとした空模様に、湿った風が吹き抜ける。

ここは、ガーデル名物ワイルドエリヤの中でも屈指の人気（僕調べ）質問対象：サイキツカー、オカルトマニアその他）を誇るゴーストタウンの名所、見張り塔跡地。

一一一！

「あつぶツツ!? 馬鹿野郎テメゴースト何しやがんだ!?! 石投げてくんな  
よ殺す気か!?!」

「だ、大丈夫ですか…？」

ラテラルタウンから移動した僕たちは、そびえ立つ崩れそうな影に身を包まれながら、彷徨うゴーストポケモン達と戯れていきました。「つたぐ、ゲラゲラ笑いやがつて…で、この作戦とやらは本当に上手行くのか？オレ、さつきからイタズラばつかされてんだがあつダメアア！？ゴビツトおま、スネはダメだつて…！」

「い、いえ、大丈夫……です……上手くいきますよ……多分」  
力ない返事、不安そうな表情を浮かべ、少し離れた倒木に腰掛ける  
ヤミラミを眺めるアクサキさん。大丈夫だろうかと頬を搔きます。  
僕も確証がある訳じやないので……すいません……

僕たちが現在実行している作戦、ゴーストポケモンに好かれちゃいたい、通称G.P.S大作戦は大変難航していました。

内容は極単純 僕がお友達のエリストボケモン達を呼び アクサギ  
さんが仲良くなる事で、ヤミラミの恐怖心を失くし、打ち解けようと  
いうもの。

アクサキさんはゴーストポケモンと戯れるだけ、というとても簡単な作戦なのですが：

「アツチイイイイ!? 馬鹿かヨマワルおにびすんな馬鹿かお前!?

が、僕の想像を数倍超える程悪いと言う事です。

しかし凄い嫌われ様ですねアクサキさん。さつきからゴースト達に揉みくちゃ（物理）にされています。

僕、何回もここに足を運んでいますが、ここまで誰かに過激なイタズラするゴーストポケモン達は初めて見ました。

いや、でも本気で命を取りにいこうとしている子はないので、見ようによつては仲良しに見えない事も…

「ヤミラミーほらほら怖くないぞーみんなとこんなに仲良く出来てるぞー遠慮なくオレの胸にグボはア!?の、ノータイムあくのはどう…良い威力…流石はオレのヤミラミ、良い腕してるぜえ…！」

「す、凄い音鳴りましたけど…いや、ほんとに大丈夫ですか？」

「へ、へ、ふう、おぶ、ヘーキ、ヘーキ…まだいけるおえええ…」

「む、無理しないでください…ほら、お水です…これで冷やして…」

…まだまだ先は長そうです。

で、でもまだ始まつたばかりですからね。全然チャンスはありますよ…きっと。

「うう…やつぱりオレはゴーストタイプに嫌われるんだなあ…もう無理なんじゃ…」

「そ、そんな事ない、ですよ！ アクサキさん、中々良いスジ持つてますから…！」

「本当かよ…まあお世辞でも助かるぜ、もうちつと頑張ローブシン、なんちつぐべば!?は、鼻つ面に、ダイレクト…！」

「は、はは…」

ドヤ顔でそう言つた彼に、何処からともなく飛んできたモンスター ボールがめり込みます。群がるゴーストポケモン、溢れてしまう乾いた笑み。ついつい先の言葉を否定できなかつた。

でも、お世辞ではありませんよアクサキさん。今のギャグはお世辞にも面白くありませんでしたが、貴方は本当に良いチカラを持つています。

確かに、びっくりする程彼はゴーストタイプと相性が悪いです。ですが…ゴースト使いとしての素質が時折垣間見えます。

例えば…

「――ズボン下げようとしたな、そうは行くかゴーストテメエ！」

『――!?』

彼は、異様にゴーストタイプの察知に長けています。  
最初にここを訪れた際、お友達のゴーストポケモン達はすり抜け、  
いわば靈力者など一部の人を除き、姿を見せなくする状態で彼を驚か  
せようとしていました。

当然僕には見えていましたし、少しかわいそうにも思いましたが、  
これもゴーストタイプの特徴、知つてもらうには良い機会だと、意趣  
返しも込めて見逃したんです。

『そこの岩陰に一匹、草むらに三匹、地中に一匹…おおお前ら二匹は積  
極的に近づいてくるな。よつ、オレアクサキってんだ、仲良くしよう  
ぜ？』

彼は、全て気付きました。流石に種類までは判別出来なかつたよう  
ですが、それでも隠れているゴーストタイプの位置や距離感を掴める  
なんて、普通ではあり得ない事です。

多分最初のそれが原因ですね。

ゴーストタイプ達が執拗にイタズラしてくるのは、彼らにもプログラ  
イドはありますから、全く驚きもせず、怖がりもしない。

挙げ句の果てに自分の居場所を突き止めて挨拶してくるなんて、一  
泡吹かせないと気が済まないでしよう。

まあ、大半は今みたいに事前で気付かれているので、クリーンヒッ  
トしたイタズラは数回程度しかないので。

これはアクサキさん自身が知らず知らずのうちに薪割つて火に投  
げ込んでいますね。別に彼は何も悪く無いので、気の毒です。

あまりにも酷いようでしたら、僕が一言言つておきましょ。

十分今も酷いですが、これも作戦の一つ。アクサキさんがゴースト  
タイプに弱い所を見せれば、ヤミラミの恐怖心を消せるかも知れない  
という期待も込められていますから。そこは彼とも話していますし、  
大丈夫だと思います。

『――――――――!』

『……』

「あ、コラ、人のバッグを勝手に開けちゃダメだよ…大切な物が入つて  
るかもだから、ね？」

あらら、言つたそばから、ですね。

直接的なイタズラは効果が薄いと感じたのか、二匹がアクサキさんのバッグを物色し始めました。

人の物を盗つたり、隠したりするイタズラは今回の主旨に反してい  
ますし、それ無しにしてもやり過ぎですので止めに行きます。

「ねえ、ダメだつてば。ちよつと君たち度が過ぎていいよ…ほら、  
えーと…それはバッヂケースかな？それもちゃんと戻してあげて」

『――』

「聞いてる？もう、いい加減にしないとぼく怒るよ？早く返しなさい」  
何度呼びかけてもやめようとせず、バッヂケースの様な物を持つた  
まま固まる二匹。あまりにも言う事を聞かない彼らに顔を顰めるも、  
それほど言う事聞かない子達だったつけなと首を傾げます。

しかし持つて逃げようともしていないので、ゆっくりと近づいてい  
き、そつとバッヂケースを抜き取ろうとして。

「――へいへーい、面白そうな事やつてんじやねえかイタズラっ子  
共」

影が差す。背中に感じる暖かな気配、

しかし、一抹の違和感を抱きながら、振り返れば、口角を上げたア  
クサキさんが立っていました。

「あ、アクサキさん、すいません。この子達が…アクサキさん？」

いつもより影が濃い目元、それでも分かる色を含む瞳に気圧されな  
がらも、状況を説明しようと口を開きます。

が、その言葉を最後まで聞く事なく、アクサキさんは僕の横を通つ  
て、バッヂケースを持ったまま動かない二匹の前で屈み、手から引つ  
たくるように取り上げました。

今までの彼を見てきて、らしくもないその行動。抱いた違和感が拭

えず、困惑します。帽子を取られた時は、あんなに有無を言わさず取り上げたりなどしなかつたのに。

なすがままにされているゴーストポケモン達然り、本当に、どうしたのでしょうか。

「楽しんでらところわりいな。しかし、これあオレの大事な物なんだ。失くされたり壊されたりしたら堪んねえからよ、返してもらうぜ。おいおいそんな怖がるなよ、ちょっと注意しただけじゃねえか。ほら、仲直りのハグをしようぜーーもう、やるなよ？」

口調はいつも通りーーーいつも通りと言えるほど、長い時間を過ごしていませんがーーーフレンドリーで、少しワイルドなお兄さん。姿も表情も柔らかく、特にこれと言つたものは見受けられません。今も、イタズラした二匹を諭し、優しく抱きしめてあげています。ポケモンをどこまでも愛そうとしている、いつも通りの姿。後ろに控えているゴーストポケモン達が囁して…二匹は苦笑いです。心なしか、表情に余裕がないような…

確かに感じられるこの違和感は一体ーーー

「…い。おーい。ゴースト仮面、聞こえてるか？おーい」

「ーーーは、はい！」

「うおびっくりした：急に大きな声でたな。いやな、暫くゴーストタップとじやれついてみたが、この後どうすりやいいんだと思つてよ。お前に声掛けても返事がなかつたもん…どうしたボーッとしまつて。疲れてきたのか？オレが見張りしとくから、昼寝でもしたらどうだ？」

「いえいえ！少し考え方を、していただけで、まだまだ行けますよ！」意識を搖さぶる声、ハツと顔を上げると、アクサキさんが心配そうな顔をして、こちらを覗き込んでいました。どうやら考え方を集中しがちで、アクサキさんの呼び声に気が付かなかつたようです。

違和感の正体が分からぬまま急接近してきた彼に、一瞬身構えてしまいますが、直ぐにその違和感が感じられない事が分かり、杞憂に終わりました。

また、僕の勘違いかな…？

「それならいいんだが…いや、今日はもう帰ろうか」

「え…？い、いや、本当に大丈夫ですよ？これでも僕はジムリーダーですか。ほら、こんなにつ、動けますっ」

「それ以前にテメエはガキだ。そんなに飛び跳ねなくたつて分かつてラア。日も落ちてきだし、今日知り合った野郎にそこまで尽くす必要はねえってことだよ。暗くなつたら流石のオレでもゴーストタイプに遅れを取りそудし、なんかあつたら親御さんに申し訳が立たん」

「で、でも夜は僕にとつてホームグラウンドの様なものですし…」「夜遅くまで起きると背伸びねえぞ？十時から一時まではゴールデンタイムつつてな、その間に熟睡してると身長が高くなるらしい。オレも最近その時間に寝るようゲフンゲフンつまりだ、夜のワילדエリアに居て得られるモノは危険と睡眠不足つて訳。すまねえな勝手な男でよ。もし次の週末暇だつたら、またオレとこに来て、ゴーストタイプを扱えるよう手伝つてくれよ、な？」

「…そ、うですね…分かりました。約束しましょう」

…うん、勘違いだな

やつぱり、なにかの気のせいだつたようです。

しかし、全くアクサキさんは、凄い人だ。確かに少し疲れてきた僕を一目見て、それを当ててしまふんですから。

顔が怖くて、ガサツで、口が悪い、でもそこに有る不器用で柔らかな暖かさ。面倒見の良さで、彼の右に出る人はそうそういないんじやないでしようか。

サイトウさんが心の底から彼のことを楽しそうに話すのが良く分かります。確かにこれは居心地が良いです。

…もしこのままサイトウさんに勝てないというのなら、僕の所に来てもらうのもアリでしようか？

「ありがとな。さ、じゃあ帰る準備すつか！覚えてろよお前ら！次来たときはゼツテエに仲良くなつてやつからなブハア！？さ、最後に…丁寧なお見送り…きんのたまツ…！」

『―――！』

「う、わあ…い、痛そうだなあ」

浮かんで来た不思議な感情に首を傾げていると、ゴーストポケモン達に別れの啖呵を切ろうと近づいたアクサキさんが、殴られたのでしようか。下腹部を押さえて転がり回っていました。

ゲラゲラと笑うゴーストポケモン、背筋を硬らせながら同じく下腹部を押さえる僕。

とても下らない一コマの日常。ジムリーダーの仕事に加え、いつ終わるかも分からぬ特訓に、これから目が回るときがくる時が来るかもしれません。我ながら中々無責任な約束をしてしまったなど、ちよつぴりの後悔。

しかしそれを優に上回る期待に、お腹の底を持ち上げられる感覚、やはり彼との時間は心地が良いと思っている自分がいます。

これから、すごく忙しくなるだろうな

そんな不安を、心から楽しみに思うくらいには。

でも。

「が、は…あ、あれ…あれ…？」

「大丈夫ですかアクサキさん？どうしました？」

でもですよ。

「ヤ、ヤミラミの、ヤツ、どこいきやが…つた…？」

「――え？」

こんなに早くも忙しくなるとは、誰が想像出来ましょか？

存在の失くなつた倒木の上、顔から血の気が引いて行く感覚に目眩を覚えながら、僕はかなり動搖してしまいました。冷静さを欠いて、今思えばなんとも危ない判断だったことか。

「あ、お、おい待てゴースト仮面！一人で行く、な！ぐ…そつ、はよ治まれやオレのきんのたま…！」

黄昏が降り始めたワイルドエリア、ヨルノズクの鳴き声が響きわたら、ワイルドエリア。

そんな危険地帯を、後ろから飛んでくる制止の声も聞かず、聞こえず。

焦燥という魔の手に、背中を押されて走り出してしまつたんですから。

走る、走る、走る。

息が切れても、草木が身体を裂いても、喉がひでり状態になつても走り続ける。

原動力、すべてはこの背中に突き刺さる様な恐怖心。

ああ、あの同類達はなんて事をしてくれたんだ。心に有る古傷が再び開き、そこに新たな矢が刺さつた。思い出しただけで背筋が凍る。泥水の様な不快感が身体を満たす。

あの時、忘れもしない。

我が真の主人と、アイツが共に時間を過ごしていた、あの時に：自分も同じ事をした。

最初は好印象を持っていた。

主人と余り変わらない身長、されど鍛えられている肉体に、顔に刻まれた裂創の数々。斜めに帽子を被り、ニヒルに笑つて見せてきたアイツは、しかし我らが同類達を氣味が悪いとせず、主人にも分け隔てなく接していた。

アイツは天敵を従える者だつたが、不快な気配も感じず、波長もそそこあつていた。

アイツには我らを従えるのに必要な原石があつた。  
幽霊や、死んだ同類達を直接可視化する事は出来ないが、気配は感じ取れる。

主人も、彼の秘めたるソレに気付いたのだろう。同族だ、同類だと、縛を深めるのにそう時間はかからなかつた。

そのまま幾日か、主人はアイツについて行つた。確かに主人は若くて、それにしては忙しい立場にあつたが、別に急ぎの予定がある訳じやない。

羽を伸ばせと言われていたし、暇を潰せそうな、面白い人間がいたらついて行くのが我らの特徴、ある種のシキタリみたいなものだ。山道を進み、橋を渡つて、焚き火を囲む。主人は心底楽しんでいて、アイツはそれをとても喜んでいた。

一人旅は寂しいから、一緒に時間を過ごせる友達が出来て嬉しいそんな言葉を吐いて、顔に似合わない、とても懐かしそうな目をしていたのを覚えている。感情に敏感な我らは、それが何なのか気になつた。

が、主人は深く聞こうとしなかつた。それ以上に、友達、という言葉に意識がいって仕方なかつたようだが。

顔が怖くて 目つきが鋭くて、口が悪くて、だけど気さくで、優しい所謂いいヤツ。

詰まる所、それが、アイツに対する我らの評価だった。

終わりを告げたのは、ある街に着いたときだ。到着した途端、アイツは行く場所があると別れを告げた。

当然、主人がそう簡単に離れる訳もない。常に我らは娯楽に飢えており、アイツは飢えを満たすには十分過ぎる存在。

主人は邪魔じやなければ着いていかせて欲しいとアイツに頼んだ。少し戸惑つた様子を見せたアイツは、数秒思案、苦笑いしながら構わないと言つた。対して面白くないと思うぞとも言つた。

そのまま我らを治療する建造物に立ち寄り、何かの準備をするアイツ。腰に着いた六つの球体を確認し、町の中心へと繰り出していく。

結論から言うと、アイツは修行者だった。

各街に配備された主<sup>リーダー</sup>、それに従う者と力比べをする、人間と我らに最も関わり合いのある儀式。それに挑戦する修行者だった。

主人は喜んだ。何せ主人はその儀式に深く関わる重要人物。新しくできた友がソレに挑んでいれば、嬉しくなるし、応援したくなる。

次々と配置された主の手下を蹴散らしていくアイツの背中を見て、主人は満足そうに口角を上げた。

しかしここで問題があつた。アイツは、肝心の主には勝てなかつたのだ。何度も何度も、アイツは主に敗北を期した。

一日が過ぎようと、二日が過ぎようと、一週間が過ぎようと…果敢に挑んでは、負け続けた。

最初の数回は、残念だつたなど軽い気持ちで眺めていた主人も、後半になつてくると流石に焦り始めた。

何か彼に協力してやれる事はないものだろうかと、我らを交えて考える程に。

立場上、一人の修行者、挑戦者に肩入れをするのは気が引ける。

だが、それ以上に友が負け続け、挫折してしまう事を恐れた。主人は何度もその様な者達を見てきたし、何より、唇を噛み切る程に悔しがりながらも、何処か瞳に青を灯し、息が抜ける様に苦笑するアイツの姿が、頭から離れなかつたのだろう。

だから、不味そうに飯を食うアイツに主人は言つた。

ゴースト使いとして強くなる為にも、あくタイプ対策の特訓に付き合つて欲しい

極力アイツの心情を慮る言葉。アイツは気づいたのだろうか、二つ返事で頷いた。

主人はこの時、アイツに胸を貸してやる気持ちであつた。実際主人はとても強い部類に属していたし、我らもそう考えていた。相性など関係ないと思つていた。

しかし、嬉しい誤算というべきか。

アイツは、我らに対し滅法強かつた。

この街の主とのバトルとは比にならないくらいに、的確な指示を出し、冴え渡つた思考で此方の動きを読んできた。

完璧に虚をついた筈のかげうちを気配で察知し対処してきたのを

今でも覚えている。反撃で食らったあくのはどうの痛さは忘れもない。

拮抗した戦いの結果、主人は負けた。

もしかして、手を抜いていたのだろうか。相性不利とはいえ、あの主人が苦戦を強いられ、惜敗したのだ。

アイツは従えていた属性的に、我らや念力使いの対処には長けていふと言つていたが、それだとしてかなり異色だ。

姿を消しても気配で察知して攻撃を当て。

透過を使って地面に潜つても、靈感的なもので出現場所を割り出し。

靈力や怨念、神通力など不可視の一撃さえ避けれるルートを感じとり指示を飛ばす。

そして何より、アイツが発する凶悪なブレッシャー圧が、我らの心を揺さぶり、苦しめた。

顔の傷や、目つきに加えて、まるでそれは悪鬼の様で、我らより断然怖かつた。

主人はそれらアイツに備わつてゐる力を目の当たりにして、益々気に入つたようだつた。久しぶりに熱い戦いが出来る事を、アイツとの時間が更に心地良くなつたと喜んだ。

それからは毎日、アイツに戦いを挑むようになつた。

惜敗、惜敗、辛勝、惜敗……

勝つこともあつたが、それもギリギリで。

こうも立場が逆転し、戦いにも負け続けると我らにも不満が募つてくる。どうにかして、アイツを一泡吹かせてやりたいと皆が考える様になつた。

だが、アイツには我らの透過や姿消しなどが効かないし、何より器がデカく大抵の事は声を上げながらも笑つて許してくれる。

生半可なイタズラでは意味がない。もつと大きな事をしなければ。

そんな考えが、大きな過ちだと氣付く事なく——アイツの逆鱗に触れてしまつた。

さつきの奴らのように物入れを漁り、大事そうにしまつてあつた、

七つある勝者の証を、いじつてしまつたのだ。

『おいおいイタズラっ子共、何してやがんだ？人のバッグを勝手に物色するたあ感心しねえぜ？』

底冷えするような声が耳朶を打ち、呼吸が浅くなるのを感じた。そこにいる全ての同族は、かなしげりにでもあつたかのように動かない。

腰を抜かした者もいたし、完全に委縮する者もいた。

それほどまでに発せられた圧は強烈で、向けられる目線には暖かさなど微塵も残つていなかつた。

いつも通り、犬歯が見える笑みを浮かべていたが、中に渦巻く激情はドス黒く、我らの恐怖心を煽るだけだ。ただひたすらに怖かつた。七つの証を返したら、アイツはすぐに許してくれたが、それが意味を為さないほどに、植え付けられたものは大きい。

主人の様子も、アイツと共に過ごしているうちに少しおかしくなつてしまつた。固執、独占。少なくとも、自分を簡単にアイツへと送るぐらいには。

自業自得だというのは分かつてゐる。普通に接していれば、普通にいいヤツだというのも分かつてゐる。

だからこそ、そんな過ちを経験してしまつてゐるから。

アイツの裏に、何かとてもなく禍々しいものが潜んでゐるんじやないかと、恐怖心が募つていく。アイツの元で過ごすようになつてから、安眠出来た試しがない。

怖い。

アイツの一挙一動。従える者達。吐き出される言霊。  
全てが怖い。

不快だ。

アイツの力ない笑みが。青色に染まる瞳が。痛々しい傷が。  
無差別のアイジヨウが。

——それを拒んでしまう自分が。

不快だ。

ああ誰か、誰か頼む。

「―――い、た…！」

―――愚かな自分を、救ってくれ

「い、た…！」

すっかりと暗幕が垂れた林、持ち前の靈感と夜目を駆使しながら探しした先に、佇む小さな宝石人。安堵の二文字が、身体中を駆け巡ります。

飛び出た音に驚き、ヤミラミは此方を警戒してシャドークローを構えます。

しかし僕だと気付いたのか、直ぐにそれを解きました。響く安堵のため息。自分でどつか行つてしまつた癖に、ホツとしているんですね。

何故飛び出したか、理由を問い合わせたい所です。所ですが…

「よ、良かつた…！見つかって、本当に良かつた…！」

『……ッ』

駆け寄つて、紫色の矮躯を抱き寄せます。ビクつくヤミラミ、冷たい肌、泥だらけの顔が僕を迎えますが、構いません。

汗でビシャビシャになつた服を押し付け、ギュッと。もう離すもんですか。

本当に良かつた。この広大なワイルドエリアで家出もといトレーナー出をするなんて。探し当てられたのが奇跡です。ヤミラミがそこまですばやさの高いポケモンじやない事が幸いしました。

これで居なくなつてしまつたら僕が悲しいですし、何よりアクサキさんに合わせる顔がありません。

流れる風の音。暫くの時間が経ち、漸く落ち着いて來た僕は、ヤミラミの両肩に手を乗せ、その煌びやかな眼を見つめます。

「ダメ、でしょ…凄く心配、したんだよ？気付いたら居なくなつたから…もう、やめて、ね？」

『……。——』

怒つている事が伝わつたのでしようか、申し訳なさそうに目を伏せるヤミラミ。どんな理由があるにせよ、トレーナーをほっぽり出して何処かに消えてしまふなんて…ゴーストタイプと言えばという話なのですですが、いけない事です。

どれほど心配するか分からぬ悪い子に、少しぐらいの説教は許されていいはず。今度は手を掴み、力の抜けてしまつた膝を立たせます。

「ほら、帰ろう…？皆んな、待つてる。アクサキさん、が、怖いなら、僕が間をもつて…もつて…う、ん。出来る限りで、仲介するから」  
『——ツ……ツ……』

「君が、アクサキさんの、何に恐れて、何に縛られているか、僕にはわからないし、汲み取つてあげる事も、出来ないけど…でも、やつぱりそういうのは、しつかりと正直に伝えた方が、良いと思うな…案外、簡単に解決することだつたりして…」

『——！』

「お前に何が分かる…なんて言われても…さつき言つた通りだよ。僕は何にも分からぬ。でも、アクサキさんは、違うんじゃないかな…？大丈夫だよ、きっと…彼なら、君の事も…悪いようにはならないよ。ほら…帰ろう、ね？」

『……』

優しく頭を撫でてあげます。彼の様には上手く出来ないでしようが、心を込めて、少しでも和らいでくれる様に。

完璧に俯いてしまつたヤミラミを見て、頑固な子供を相手にしている気分、苦笑いを浮かべます。

ヤミラミの為にも、もう少しここにいてあげたいですが、そんな事したらアクサキさんの心臓が大変なことになつてしまふと思うので、戻らなくてはなりません。

アクサキさん…そろそろ歩ける様にはなつたでしょうか？

脚をプルプルさせているアクサキさんを思い浮かべながら、クスリ。

そして来た道を引き返そうと——

「危ねえ!!」

「——え?」

宙を舞う。

喉から漏れる呆氣ない声、力の奔流に錐揉み回転しながら、何かに包まれる感触。轟く爆音、漫画のワンシーンの様にゴロゴロと転がり、やがて木にぶつかって止まります。

視界が上下左右にままならず、脳が揺れ、思考回路がオーバーヒート、痛みを感じません。

滲む視界が、だんだんと晴れていきます。目に映るのは……

『——ツ……』

シャドーパンチを振り下ろし、割れた地面の上で此方を睨んでくる——ヨノワールと

「——ふ、いつテエ……お目目がパツチールだぜ……」

鉄の匂いを垂らしながら、僕とヤミラミを抱えて目を回す——アクサキさん。

本日何度目かわからない、血の気が引く。

「なんで、ヨノワール、気が付かなかつたツ……そ、それよりも、アクサキ、アクサキさん!? 大丈夫ですかしつかりしてください!?

帽子が吹き飛び、顕になつた額が血潮に染まるアクサキさんの肩を強く叩きます。

返る呻き声、目を回しながらも、ニヒルな笑みを浮かべて、青黒いガツツポーズ、そびえ立つ親指。全然GOODじゃないですよ!? 「大丈夫大丈夫。こんなの、お茶の子サイホーン、ルンパツパよオ……いやあしかしギリギリだつたな。お前らが抱き合つてる所ほのぼの見てたら、後ろからシャドーパンチ構えたヨノワール出てくんだもん。メジャーリーガー並のファインプレーみせちまつたぜ。これからオレの事、ヘイガニー・マナファイの再来つて呼んで良いよ。あ、あと……あんまり、肩、バシバシ叩かなイツデエ!?」

「言つてる場合ですか!? そんな、僕が気が付かなかつたばかりに、身を呈するなんて…！ ああ、頭から血が、ハンカチで止血を…いや、ヨノワールの対処が先…ダメだ、ホルスターはキャンプに置いて来てしまつた…僕のバカ!」

空を切る指、キャンプにゲンガーハンカチで止血を…いや、ヨノワールの特性。プレッシャーも相まつてか、今にもへたりこんでしまいそうです。

「あーあー顔面蒼白になつちまつて、白いお顔が最早舞妓さんの化粧だぞ。まあまあ落ち着けもちつけ、こう言う時はメリープを数えるんだ。メリープが一匹、メリープがぶはツ!」

「それを言うなら素数です！ あとなんでメリープ、というか、こんな下らない事ばつか言つて、このままじや全員戦闘不能のひんし状態ですよ！」

「待つて、ゴースト仮面待つて、先にお前のツッコミで戦闘不能になります。オレ怪我人だよ？ もう少し威力下げてくれもいいじゃん若干キヤラ崩壊してやがるぞお前。あと大丈夫だから落ち着け座つてろ。寧ろパニクつて変な事されるとそつちが厄介だ。ほら、オレの後ろに隠れてな」

「どーからそんな自信が…楽観主義にも程があります…！」  
ダメだ、きっとアクサキさんは頭を打つてこんらん状態になつてゐに違ひない。適切な判断が出来ないんだ。

なら、僕がどうにか、どうにかしないと…！ こうなつたのも、彼の制止を聞かずに寛つ走つてしまつた僕によるもの。

責任を、取らなくては。

此方を睨んでくるヨノワールを睨み返します。ヤミラミに戦つて貰おうとも考えましたが、既にいろんな事が起き過ぎて、心が耐えられなくなつたのでしよう。アクサキさんの胸の中で寝息を立てています。所謂氣絶、戦闘不能。

よつて、今出来る最善の策とは、靈媒師の如くヨノワールと波長を合わせ、気を鎮める事。それしかありません。それしかありませんが

：成功する確率は凄く低いでしょう。

ヨノワールは意思があるのかわかつていのポケモンです。

いや、実際には意思のある個体は確認されていますが、それは全て長い間人の手で育てられた者や、偶々そういう個性、性格を持つていた者ばかり。

さらにヨノワールは人やポケモンの魂を奪い、靈界へと連れて行つてしまふポケモン。

ゴースト然り、ポケモン界屈指のブラックリストと協会が直々に指定し、依頼を受け持つ際、ブリーダーランクはどんなに低くてもBは必要と義務付けられました。

（九段階評価 S、A～Hの順 Bは一般的にベテランブリーダーと称され、ポケモン協会本部直属のレンジャーやブリーダーの最低ライン）

それでも誘拐事件などが後を絶たず、毎年協会本部オカルト課が各地の僧侶、祈祷師、サイキツカー、レンジャーにオカルトマニアなどを収集し、被害者救助、魂奪還及び掃討作戦が繰り広げられる程。僕のヨノワールだつて、ブリーダー、呪術師、靈媒師管理下の元、ヨマワルの頃からしつかりと育てたんです。そう簡単に野生のヨノワールを従えられたら苦労はありません。

大好きクラブの初代会長は目を合わせただけで仲良くなれたと言われていますが…今の僕には関係のない話です。

『——』

「や、やつぱりダメ、かあ…！」

案の定、ヨノワールは手に靈力を溜め始めます。シャドーボール、とくこうは余り高く無いとはいっても、直撃したらタダでは済まないでしよう。

本能が危険を知らせるアラームを鳴らし、脚がガクガクと震えます。

しかし避ける訳にはいきません。何せ僕の後ろには重傷のアクサキさんと、気絶しているヤミラミがいます。ヤミラミはまだしも、アクサキさんに当たつてしまつたら今度こそ死んでしまうかも知れま

せん。

ノーダメージの僕にはまだ、受け切れるチャンスがあるんですから。アクサキさんが身を呈して守つてくれた様に、今度は僕が…！溜まり切ったエネルギー、妖しく光るそれを振りかぶるヨノワールを最後に、来たる衝撃に備え、ギュッと目を瞑ります。

で、出来れば、余り痛くありません様に…！

「いや、だから大丈夫だつて言つてんだろ。話聞いてる？あんまり信  
用してくれねえと泣くぞコラ」

けれど、終ぞ僕の胸にシャドーボールが叩きつけられる事はありま  
せんでした。

ゴキリと響く重低音、立ち上がる気配、鋭くも暖かい口調に恐る恐  
る目を開けば、唇をフルフルさせているアクサキさんと、頬を凹ませ  
ながら吹つ飛ぶヨノワール、凜とした佇まいに澄まし顔のブラツキー  
が。

腰が抜ける。

へ？つと、思わず情けない声が喉から漏れます。

「あ、アクサキさん…？怪我は…いや、それよりも何したんですか？」  
状況を飲み込めず、脳内ケーブルがこんがらがりショート寸前。純  
粋な疑問をアクサキさんに投げかけます。

アクサキさんは、ああ？と声を上げた後、頬を搔きながら答えまし  
た。

「何をつて言われても…ふいうち、わかんだろ？アレをタイミング良  
く叩き込む様ブラツキーに指示を出しただけなんだが…」

「ふ、ふいうち？ブラツキーってふいうち覚えれましたつけ？という  
か、アクサキさんポケモン持つていたなら早く言ってくださいよ…  
！」

「だから大丈夫つつたじやねえか。近くにボールを投げられた事悟  
られない為にも、無防備演じるしかなかつたんだからヨオ。ま、作戦  
は大成功つて言つた所だな。中々に名演技だろ？」

そう言つてカラカラと笑い出すアクサキさん。どつと力が抜けます。

ふいうちを、それもあんなに綺麗に当てたのに、唯当てただけ、なんて…それがどれだけ凄い事か、知つてて行つているのでしょうか？ 素早く攻撃できて、威力も高く、技の反動も極めて少ない、あくタイプの先制技、ふいうち。上位の大会などに良く見られ、ここぞという時の決め技として使われる事が多い技です。

その人気度は、あくタイプで印象的な技は何ですかと聞いた場合、イカサマ、ちようはつに次いで名を挙げられる程。

代わりに、完璧に相手の攻撃に合わせなければならず、下手したらねこだましより低い威力になつて後隙も多く生まれてしまうという、ハイリスクハイリターンな技でもあります。

ですから、あんな当たり前だろ？なんて顔されても困るんです。

いやでも、本当に良かつた、全て演技だつたのか…あの額から流れた血も、僕はてつきりかなりの怪我だと思つたのだけれど、アレも大した事なかつたなんて

「あ、それはホントだぜ？今も血止まんねえし、ガンガン頭イテエし。なんならアイツのシャドパン当たつた右腕スッゲエ腫れてきたからさ。いやあまいつたまいった！」

「馬鹿なんですか？相当な大怪我負つてるじゃないですかあ！」  
全然大した事だつた！今も血が止まらないなんて、普通に大怪我じやないですか！なんでそんなに余裕な表情浮かべてるんだろう！頭の怪我なのに！

「待つてください、今応急処置を…！」

「おいおい、んな事后でいいんだよ。怪我なんざほつときや勝手に治るしな。それよりも、今はやるべき事があるだろ？」

「何を言つてるんですか！ちよ、頭掻まないで下さい！ちよくちよく思つてましたけど、アクサキさんはホントに怪我に頓着がないですね！そんなではーーー」

応急処置をしようとした僕の頭に手を置いて、アクサキさんは渋い顔。

そんな彼に止血だけでも施そうと、頭に乗せられた手を退かそうと力を込めて。

「——今

「傷が残つて……今？」

再び響く、重低音。

「——!?

「……チツ、流石高耐久持ちのヨノワール。二発で墮ちてくれる程甘くはねえかあ」

アクサキさんの表情が更に渋く歪みます。振り返った先には、ダメージを負いながらも、瞳を赤色で染めたヨノワールが。

ブラッキーがまたしても綺麗にふいうちを当てた事に、アクサキさんの技量の高さが露呈しますが、それよりも、ヨノワールの粘着質な姿勢に啞然、緊張が走ります。

『——!——!』

「そんな怒んなよ、吹つかけてきたのはテメエだろ？しつつけえやツア嫌われるつて親父が言つてたぜ。さ、オレもブラッキーで攻撃しちゃつたし、ここは一つお互い様つて事で……』

『——ツ!!』

「ですよねー参つたなあかなりキテやがんぜコイツ。なんでこんなに虫の居所悪りいんだ？意中のヤツにでもフラれたりしたのか？しゃあねえな…ブラッキー、斜め右にあくのはどう！んでもつてそつからちよい右にふいうち…今！」

どうやら相当頭に血が上つている様です。制止という名の警告もなんのその。何度も何度も、ブラッキー繰り出すあくのはどうや、ふいうちを食らつているにも関わらず、目をギラつかせ、荒い息を吐きながらアクサキさんへとにじり寄つていきます。

それに対し、溜息を吐きながら、的確に指示を出していくアクサキさん。流石あくタイプ使い、完璧にゴーストタイプを捌いていくその背中は、男ながら心にくるものがあります。

というかアクサキさん普通に凄いですね：透過したり、すり抜けを使つたりするヨノワールの行動先、全部見極めて攻撃を当てるな

んで。

このバトルだけを見たなら、ジムリーダーのそれと言われても違和感はありません。はて…これぐらいの実力があるなら、タイプ不利とはいえサイトウさんのジムも突破出来そうな感じがしますが…?

『……ツ……ツ…!』

「いやしぶといなお前、いくら何でも堅すぎんだろ随分と頑張るじゃねえか。あくのはどうにふいうち、結構あてた筈なんだがなあ」

しかし、ヨノワールはブラッキーの猛攻に倒れる事なく、遂にアクサキさんの目の前まで到達してしまいました。息を切らしながら、待つていましたと言わんばかりにお腹の口を大きく開きます。

魂を奪う、ヨノワールの捕食行動。あれに食べられたら最後、現世に残るのは肉体だけとなってしまいます。直ぐにブラッキーで迎撃するべきーーーなのですが

「あ、おいブラッキーさんや。勝手にボール戻らないでくれよ」

「ーーー」

ーーーブラッキーが、あくびをしながらボールへと戻つてしましました。

予想外の事態、呆気に取られる僕に、苦笑しながらボールに呼びかけるアクサキさん、勝利を確信したヨノワール。

対抗手段がなくなり、絶対絶命のピンチ。

いや、え、何やつてるんですか!?

「眠かつたんかな。まあいつもこれくらいの時間まで寝てやがるからな、膝も貸してやらなかつたし、拗ねちゃつたのかも知れん。しゃあねえ、帰つたらおもつきしモフモフしてやつかあ」

「のんきな事言つてる場合ですか!?アクサキさん、アクサキさんツ!?早く、逃げてください!早くしないと!?なんで、そんなに余裕そうにしてるんですか!?

「大丈夫大丈夫、時間は稼げたし。ほら、そろそろ正義の騎士ヒーローさんが、颯爽とオレたちを助けに来る頃だぜ?なんなら、もうちつとピンチ演出しそとかないとなあ。きやー助けてー!たべられちゃーう!」「ふ、ふざけるのもいい加減に…!?

ダメだ、アクサキさん。今度こそ、今度こそ血を流し過ぎて、こんな状態、適切な判断が出来ないんだ…！現状どれだけ危険に晒されているか分かつてない。

僕がなんとかしなくちや、僕に何か出来る事は…!?考えろ、守つて貰つてばっかで、このままじゃ、アクサキさんがーーーアイタツ？

「あのなあ、ゴースト仮面？あつたばかりでキツイ話だと思うが、少しは信用してくれよ…そんな顔されつと、こつちまで悲しくなつてくれぜ？ほれ、もうそろそろ来つから、それつけとけ」

「イタタ…来るつて、なにが…？」

ズンと奥底にクる声色、アクサキさんの真つ直ぐな瞳、乱雑に混ざりあつた思考の沼から抜け出します。

アクサキさんが投げてきた何かが当たつた額をさすりさすり、疑問。一体彼は何を待つていて、何が来るのか。

涙目になりながら、それを提示しようとして。

アクサキさんの、曇りのないしたり顔が目に焼きつきました。

「何つて、そらあ言つただろ？」

「——ゴロンダ、つじぎり」

「正義の騎士さんだよ」  
（ヒーロー）

一陣の風が吹く。

砂煙を上げながら、アクサキさんの隣に立つたその人の背中は、随分と見慣れたものでした。

砂金の様に綺麗な短髪に黒いリボン、スパツツに包まれた健康そうな褐色の肌、服の上からでも分かる、鍛えられた肉体。

そしてなにより、男よりも男らしく、凛とした出で立ち。

「お待たせしました。貴方の騎士ナイトがきましたよ」

鈴の様に綺麗な声で——サイトウさんは、アクサキさんに迫ったヨノワールを吹き飛ばしました。

「ま、間に合つた！確保——！」

「ランプラー、ほのうのうず！」

「デンチュラ、エレキネット！オクタンはうずしおを頼む！」

サイトウの野郎がヨノワールをぶつ飛ばした後、続く三人のリーグスタッフ。吹き飛ばされたヨノワールを、見事なコンビネーションでたちまちに拘束していく。

目を回すヨノワール、戦闘不能。漸くそれが確認出来た所で、身体が休めと危険信号、ふッと息を吐く。流石のオレでも、ちつとばかり疲れちまたた。

怪我もあるし、サツサとゴースト仮面とキャンプに戻つて、今日は早めに寝よう。

「何もう全部終わつたみたいな顔して戻ろうとしてんだ？お前にはまだ治療と念のための解呪、事情聴取という名のお説教が待つてんだよ逃げんな

：そうだ厄介なのが残つてた

踵を返そとしたオレの肩を、いつの間に戻つてきたのか、ガツチリ掴んでくるランプラー使いのリーグスタッフ。言葉の通り、逃がさないと言う意思が伝わつてくる。

コイツは以前サイトウとワイルドエリアにいた時、オレの事を見捨てやがつたサイキッカー、靈媒師だ。暇なのか、コイツはいつもワイルドエリアをプラプラ回つてやがる。

オレ自身、特訓とかでワイルドエリアを使う事が多いし、毎回オレ

の捕獲方法にケチつけてきやがるから、いまじやすつかり顔見知りだ。同郷だし、話が合うつてのもある。

いつもならこのまま一、二時間くらい説教を喰らうハメになるが：

今回のオレは一味違うぜ。

何たって、今回は今までとは違い、人助けによる行動だもんなあ！ゴースト仮面という証人もいる。テメエの長い説教地獄からあオサラバだぜ！

「まあ待てサイキツカー、落ち着け。今回ばっかしは責められる謂れはねえぜ？何てつたつて、一連のオレの行動は、ゴースト仮面を助ける為のもの。人として、当たりまーーー」

「テメエオニオンさんの事ゴースト仮面つて言つてんのか!?不敬にも程があるだろふざけんな！てか何オニオンさんとワイルドエリアデートしてんだよ羨まけしからん俺と変わりやがれ!!」

「何処でキレてやがんだテメエは!?訳わからんねえ事言つてんなよデートな訳ねえだろ！デートつてのは、その、こ、恋人同士のやる奴だろ！オレたちや男だ！てかなんできつきからそっぽ向いてんだテメエ！」

「馬鹿野郎おま馬鹿野郎！今の状態のオニオンさん直視できる訳ねえじやねえか！生で見たら死ぬわ！仰げば尊死！淨化されちやう！あとテメエがそういうのでどもつても全然萌えないんだよ萎えるわ！」

「えつ」

「やかましい！てかテメ、なんて酷い事言いやがる!?顔見て死ぬとかクソ悪口じやねえか！謝れよゴースト仮面に！」

「そういう意味じやねえよお前本当にそういう所鈍感だよなサイトウさんが可哀想だわ！この天然タラシ！女だけには飽き足らず、今度はショタか!?ぜつてえさせねえぞコンチクショー!!」

「んでサイトウが出てくんだよぶつ飛ばすぞテメエエ!?」

「大丈夫ですか!?今すぐ手当てをしますので…つて何やつてんの!?」

取つ組み合いが始まる。右頬を抓つてくるサイキツカーと、鼻を擒んで上に引っ張るオレとの、あつき戦いが。

すぐ様もう一人のリーグスタッフが止めてきたが、両者はまだ睨み

あつたままだ。めっちゃほつペイテエ…ぜつてえはつ倒す！

「またオニオーンさん絡みで揉めてんの？いい加減大人になりなさいよ。ほら、アクサキくんだつけ？怪我したところ見て…うわあ派手にやつたねえ。こりや跡残るかもよ？エルレイド、いやしのはどうお願い」

「ほら言われてんぞサイキッカー、大人になれよみつともねえぞ？」  
「何度も何度も何度も何度も注意してんのに、事の重大さを理解できないオツムの弱えお前には言われたくないな！いい加減にしねえと、サイトウさんにいいつけんぞ！」

「バツ、テメエそれ言つたら戦争だろうがアア!?」

「ちよ、暴れないと治療中！傷が開くよ!!」

コイツが言つちやいけねえ事言つた！言つちやいけねえ事言つた！サイトウにバレたらヤバイ事になるに決まってんだろうが、人にはやつていい事と悪い事があるんだぞ！？

「―――ふ、アハハ！やっぱりアクサキさんは、愉快な人です。さつきまであんなどたのに：一緒にいるサイトウさんは、毎日が飽きないでしようね：羨ましいです」

唸り合つてるオレたちに、割つて入るかの様な笑い声。振り向けば、お腹を抱えて、目に涙を浮かべながら笑つているゴースト仮面が。なんか唐突にオレを褒めてきやがつた。

愉快？オレが？馬鹿野郎、オレはクールなあくタイプ使い。愉快なんて言葉とはかけ離れた存在だぜ？コイツめ…もう少し審美眼という奴を磨いてやつた方がいいな。

それにサイトウの野郎が飽きてねえ訳ねえだろ。何ヶ月顔あわせてると思つてんだ。そろそろヤツも次の街に進ませたいと思つてる筈だぜ。飽きてねえのは、どつちかつつうとオレの方じやねえか？

「して、アクサキさん。ジムチャレンジは、一回だけなら四番目と六番目のジム選択を変更する事が出来るんですよ。知つていました？」

一頻り笑つたゴースト仮面は立ち上がり、寝ちまつたヤミラミをオレに手渡してくる。サイキッカーがめちゃくちゃ青い顔しながら睨んでくるが、訳わからんから無視だ無視。

そりや、開会式のときにもう説明を受けたから知ってるが…それがどうしたんだ？

「アクサキさん、最近チャレンジが停滞してきたんですね？良かつたらーーー僕の所に来てもいいんですよ？」

そう言つて、笑みを浮かべて手を握つてくる。頭に疑問符を浮かべているオレに、ゴースト仮面が甘美な誘いをドストレートで打ち込んできた。

なんか嫌に粘着質で、一瞬マリイが頭を過つた気がするが、気のせいだろう。クソ、ゴースト仮面め…なんて優しい子なんだ…！

特訓に付き合つてくれるだけでは飽き足らず、オレがジムチャレンジを突破出来る様に心配してくれるなんて…！

思わず涙がでそうだぜ、ガキどもが積んできた花束を渡されて号泣してた親父の気持ちがわかる気がする。

「あ～成る程な。確かに前んところに行つたら突破出来る可能性が上がるもんな。ゴーストタイプだし」

「なら…」

「でもやめとくわ」

まあ勿論答えはNOなんだけどな。悪りいなゴースト仮面、舐めてもらつちや困るぜ。

オレにはな、ジム変更をしたくない大きな理由があるんだ。それだけは曲げちやいけねえつて、決めてあるからさ。

何故…？と困惑した表情を浮かべるゴースト仮面。そりや名案却下されたらそんな表情にもなる。ガキの考えた案は極力否定したくないが、流石にそれはな。

でも悪い事じやないつてことを、理由だけでも教えてやらなくちゃな。スゲエ自分勝手な理由だし。

「だつてそんな事したら、サイトウの野郎に会えなくなつちやうじやん」

「「「…え？」」」

「え?  
何、みんなどうしたんだよそんな目で見てきて。オレ変な事言つた  
か?」

## ダークホール

オレはあくタイプが大好きだ。

何故あくタイプが好きなのかと問われれば、軽く半日は語つてしま  
う程、オレはあくタイプを愛している。

あくタイプと聞けば、人によつて顔を讐める人もいるだろう。が、  
少し待つて欲しい。『あくタイプ』という五文字だけで、あくタイプの  
全てを判断するのは、あくタイプ使いとして許せないものがある。

そんな、最近ハウエンの友達から毎日電話がきて、ちょっとノイ  
ローゼ気味になってきた、あくタイプの貴公子ことオレ。

今日も元気にサイトウの野郎をぶちのめすと言いたいところだ  
が、ちょっと今回はやめておこう。

何故なら…：

「ゴツホアゴブはあ…く、ゾオ…アダメ痛え…風邪びいた…！」

ここは、中世の城壁を活かした、歴史ある街、ナックルシティ。そ  
この、ジムチャレンジャーホテル204号室。  
オレは今、絶賛風邪をひいて寝込んでいる。

「風邪をひいた？ サイトウの野郎が？」

「はい、今朝から体調が、優れないようでして…」

赤くなつた鼻をさすりさすり、マジかと声を上げる。

ここは、枯れ草の匂いが風と共にやつてくる、いつもお馴染みラテ  
ラルタウン。そのジム出入り口。

今日こそはサイトウをコテンパンにしてやる、そう意気揚々とジム  
に入ろうとしたオレは、待機していたジムトレーナーに待つたの声を  
かけられた。

いやもつと早く声かけるよ。思いつきり顔面ドアにぶつけちまつ

たじやねえか。確かに開いてると思つて、大した確認もせずに入ろうとしたオレにも非があるけどさ。

今朝見たドラマの様に、カツコよく入ろうとした手前、クツソイテエしクツソ恥ずかしいんだが？

「よおサイトウ！ 今日こそおばえ！」 ってなったからな。喋りながらプルプル肩震えてんの分かつてんぞジムトレーナーさんよお？ 「そんな睨まないで下さいブハツ：す、すいません伝言を預かつていいます。えーと…直ぐに、クフツ、治しておるので、今日出来なかつたジムチャレンジは、明日の八時にやりましょう、だそうです。どうしますか？」

今吹き出したよな？ 絶対吹き出したよな？ テメエの鼻も赤くしてやろうか。

「チツ、まあいい。んな事はどうでもよお…サイトウのヤツに伝えといて下さい！ 自己管理も出来ねえバカは一週間家に籠つて寝てろつて！」

つたくサイトウのヤツめ… 一日で風邪が治る訳ねえだろ。こんじょうあるのは認めるが、半端な状態で来られても困るんだよ。感染し、病み上がりが一番怖えからな。

それに、不完全な状態で勝つても嬉しかねえ。万全なコンディションドぶちのめすからこそ意味がある。

お、今のオレ凄いあくタイپぽかつた。もうちょっとポーズを決めておけば良かつたな。こう、帽子をクイツと、こう、クイツとやつたら更にサマに…

「分かりました。貴方の風邪が心配なのでしつかり休んでください。一週間後の八時で大丈夫です、マイハニーと送つておきますね」

「言つてねえよンな事一言も!? 耳腐つてんのかテメエ!？」

思わず帽子を地面に叩きつけちまつた。もの凄い爆弾発言を送信しようとしたジムトレーナーに掴みかかる。不思議そうに此方を見てくるジムトレーナー。

…？ ジやねえんだよこつちが…？ だわ！ どんな風に解釈したらそんなふざけた文章になるんだ？

なんだよマイハニーラーって。ぜつてえワザとだろ。オレとアイツはそ、その…ふ、夫f、そ、そんな関係じやねえ！

「心配なんかしてねえよ！寧ろ普段から自分強いですオーラ出してる癖に、ザマアとすら思つてる！」

「またまたあうそんな顔しておいて説得力ないですよ？サイトウさんの超絶ファンですもんね？アクサキさんは」

「どんな顔だよ、な訳ねえだろオレはアンチだ！超弩級のツ！毎日毎日そういうサイトに書き込んでるから！めちゃくちやワルだから！」

「毎回そういうサイトに書き込んで荒すんですよね知つてます」

「チゲエし！別に分かつてねえ三下共に本当の事言つてるだけなんだよなあ！？だんつ、じてつ！オレはファンじやねえし心配もしてねえ！！もういいでしょ、オレア帰りますよ！アザツした！」

「あ、待つてくださいよ。どうせこの後お見舞い行こうとか考えてるんでしょ？はい、コレ。サイトウさんの住んでるマンションの住所と部屋番号です。アクサキさんなら大丈夫でしょう、なんなら彼女にとつての特効薬だし。あ、でもハメ外し過ぎないで下さいよ、もしやるならせめて付けてあげて下さいね」

「何を言つてるかよく分からぬが、オレが、アイツの、お見舞いに行かねえよんなもん！それするぐらいだつたら帰つて寝るわ！」

クソ、からかいやがつて…!?

ニヤニヤしながらツンデレですねえとかほざきやがるジムトレーナーに背中を向け、この後どうするか考える。

オレはてつきり今日一日はジムチャレンジの為に過ごすつもりだつたから、完璧に予定が狂つた。

特訓は朝つぱらからやつたし、勿論バイトも入れてない。誰かと会う約束なんざそれこそサイトウのヤツだけだし、他の奴らを当たろうにもマリイとウールー使いは8番目のジムに挑戦中、オニオンは仕事中だ。反対側のジムが賑わっている。

ルリナパインもモデルで忙しいつて言つてたし、ヤローの兄貴も同じだろうな。カブさんはきつと炭鉱走つてるだろうし…あ、ニット帽…はないな、うん。アイツ何考えてるか分からねえし、

通訳いないと会話続かねえ。

そもそも誘い文句がない。飯行こうにも、時間的にちよいと早い。まだソルロツクが東側の空を飛んでいる。

要するに、めちゃくちや暇だ。

どうしよう、何をすれば良いのか分からぬ。フリーの日つて何すれば良いんだ。一人で旅してた時は毎日移動やら特訓やら旅費稼ぎやらで、割と忙しい日々を送つてたから、のんびり何かをする事はあれど、暇なんて事はなかつた。

ガラルに来てからは、各地をまわるのも徒步ではなくアーマーガアタクシ一、寝床も飯も風呂もあり、所謂インフラが整つた場所に留まり続けているから、野宿をする必要が無くなつたつてのもある。

つまり比較的に他地方を周つてた時より苦労が少ない。基本的に何もする事がないなんて日はなかつたしな。休んでたのは飯と風呂と、寝る前に本読むぐらいか。

ポケモンバトル以外の趣味なんて持ち合わせてないし、ショッピングをするようなタマジやねえ。買いたいもんなんてない。そもそも昨日買い物したばつかだ。

こんな時間から寝るのはな…なんか勿体ねえ氣がする。後々後悔するヤツだ。今からでも入れるバイト探すか？

しかし、そう思うとオレってサイトウとばつかいんな。

思い返せば、ほぼ毎日のようにアイツとは顔を合わせてゐる。ジムチャレンジはそうだし、チャレンジがない日もカフェやケーキ屋、ショッピングにワイルドエリアと、色んな所に連れ出されてるし。オレの財布が軽くなる理由の大体は、アイツが絡んでいる。

毎回毎回渋々ついて行つてたが、今考えれば、アイツはわざわざオレの所に来て暇を潰してくれたつて訳だ。

めちゃくちや良いヤツじやねえかアイツ。なんかシャクだから感謝はしねえけど。

だが、そのサイトウがいない今、自分で暇を潰さなければならぬ。それが非常に悩ましいというか、難しい話なんだが…チクショウ、コレも全部整い過ぎて いるガラルが悪い。

流石世界で一番最初に工業が発展した地方だ。その癖サイトウの野郎、普段丈夫が服来て歩いてるようなヤツなのに、風邪なんてひきやがつて。治つたらアホみたいにいじり倒してやる。

取り敢えず、その辺でもぶらついてみるかあ

そう決めたオレは、やつぱりあげますよコレ、ツンデレさんと言つてくるジムトレーナーの額をデコピンし、丘を降りる階段に向かつてダラダラと歩みを進めた。

後ろからジムトレーナーがしつこく何かを喋つてくるが、振り返らず、適当に手を振つて返事する。

片方のジムリーダーが不在にも関わらず、町は相変わらずの賑わいを見せていた。

強い日差しが照りつけ、乾いた風が砂埃を煽る中、ガヤガヤと音の絶えないメインストリート。

ネンドールとユキメノコを連れたエリートトレーナーが堂々と歩き、おやつさんの呼び込み声に、マラカッチの奏でる舞踊、ガキ共がドータクンの周りを駆け、カフェを覗き込めばマダム達が紅茶を片手に談笑している。

いつも通りの日常。いつも通りの、すっかり馴染みのある町。

このジリジリとしたオレンジの中で響き渡る喧騒、人々の見せる活気が、オレは中々どうして、嫌いじやなかつた。

けど、何故だか今日は…物足りない気がする。

心の中に浮上する、よくわからないモヤモヤがオレの首を傾げる。わだかまり、気になり始めたらより一層と。普段より重い気がする胃の底の感覚に、眉は下がる一方だ。

このまわり付いてくるモノを振り落とそうと、エリートトレーナーに勝負を仕掛ける。まるで八つ当たりをするガキのように。

「何か、悩み事でも？」

ふんだくつた小銭を掌で遊ばせていると、目を回したユキメノコをボールに戻すエリートトレーナーの言葉に、目を丸くする。条件反射で特にねえよそんなもん、と返してしまった。そうですが、なら良いんですがと、エリートトレーナー。明らかな困惑が身体を走る。

悩み事？ 悩み事をしているように見えたのか？ オレが？

自販機でミックスオレを買い、一本そいつに投げつけてからその場を後にする。手頃なベンチに座り、冷たい缶を額に当てながら、深呼吸。

プルタブを引っ張り、一気に流し込む。砂糖が舌を蹂躪する感覺、やつぱり甘いものは苦手だ。

…そんなにも情けない顔をしていただろうか。

頬に駆ける袈裟の傷痕を撫でる。すっかりと癖になってしまった動作、痛みがチリチリと蘇る。それともアイツの観察眼が鋭かつたのか。

そもそも、オレは今悩んでいると言えるのだろうか。考えたつてどうしようもない、どうでも良い事。深い溜息が木靈する。またよく分からぬナイーブ期が来たのだろうか、勘弁して欲しい。

「あ、あにきだ！ あにきがいる！」

「あにきー遊んでくれー！」

「おれにもジユースのませて！」

「かたぐるましてー！」

そんなオレに反するように、いつも絡んでやつてるガキ共は今日も元気いっぱいだ。座つてるオレに対して、配慮もなんもない、勢い良く駆け寄つてくる。

まるでとつしん。反動ダメージだけは負わせないよう、立ち上がり受け止める。

一人は背中をよじ登り、一人は飲みかけのミックスオレを勝手に煽る。残つた二人は腰に抱きついてグイグイと引っ張ってきた。

そこには純粹な白い光しかない。全く、ガキはガキだな。気が楽でいいや。

さて、時間もある。少し遊んでやらないことも——

「あれ？・そういうえばいつもサイトウおねえちゃんいるのに、今日はいつしょじやないんだねー？」

思考が刹那、揺らぐ。思わず滲み出る、ぎこちない笑み。

おいおい、何を動搖しているんだか、オレは。

「まあな、あの野郎は風邪だ。ジムチャレンジは延期」「まじでー！？サイトウおねえちゃんカゼひいたのー！？ちゃんとおなか温めてねなかつたのかなー？」

「そうかもな。つてな訳で、オレは今日一日暇なんだ。せつかくだから、お前らの遊びに付き合つてやつてもいいぜ？何して遊ぶか？」「やつたー！じゃ、ポケモンバトルごっこ！……でも、いいの？」「あ？何がだ？」

「サイトウおねえちゃんの、おみまい、いかなくともいいの？」

——だから、テメエは何に動搖してやがんだ、クソが。

暫くガキ共と遊んだ後は、また振り出しに逆戻り。意味もなくマインストリートをぶらぶらと歩く。

しくじつた。ガキはガキだと、悔つた。ガキも中々に痛い所を突いてきやがる。

イテエイテエ。何より氣を使われたのか、お見舞いに行くようガキ共に仕向けられたのが一番イテエ。

途中から露骨に別れられたぜ。「サイトウおねえちゃんに宜しくね」つて。馬鹿が、ガキが大人相手に色々変な氣起こしやがって。单

純な善意が混じつてるのが尚たちが悪い。

「あ、サイトウさんのとこの…今日は一緒にやないのか」

「あら、サイトウちゃん風邪なの？ならほら、コレ持つてつてあげなさい」

「おーいチャレンジャー！サイトウの男なんだろう？え、違う？どつちにしろ世話ぐらいしてやれよ、ほら、運んでつてやるから！」

「いつけえマルマイン～だいばくはつツ!!（物理）」

道具屋の若旦那、洋菓子屋のばあさん、会ったこともねえリーグスタッフ、顔見知り、顔見知らぬ関係なく、道行く人々が声を掛けてくる。

一人変なのが混じつていたが、どいつもこいつもサイトウサイトウサイトウサイトウ…段々とうんざりしてきた。モヤモヤが募つていく。

なんだ？オレはサイトウとセットで数えられてるのか？オレがサイトウといないとそんなに変か？オレだつてアイツといない事もある。

別にアイツとはこ、その、恋仲ツ、つて訳じやねえんだ。何処でどうしようとオレの勝手だろう。

お見舞いのやつもそうだ。お見舞い、お見舞いて、なんでそこまでオレを行かせたがる？オレがいく必要なんて皆無だ。あくまでアイツとオレはジムリーダーと、その挑戦者。

そこら辺を履き違える能無し共が多くて参つちまう。そんなに心配ならテメエが行けばいいじゃねえか。

あーイライラすんぜえ!!

「だからつてウチで冷やかしすんのはチゲエだろ。買わないんだつたら、ほら、行つた行つた！」

「買わないなんて一言も言つてねえだろ。今は選んでんだ。あーどれもうまそ уд 憶んじまうなー」

「いつもそんな事言つて、マラカツチと戯れるだけ戯れたら帰つちまうじやねえか。マラカツチもいつの間にかお前に懐いちゃつてるし：暇つぶしにウチを使うな、営業の妨げでサイトウさんに言いつける

ぞ。さつさとお見舞いでもなんでも行つてこい」「

チツ、ケチくせえ店だな。

骨董品屋の横にある青果店、マラカツチと手遊びしながら、目の前に並べられた色とりどりの果物やきのみを眺める。ジヨウトやホウエンで見たことあるやつや、こつちにきて初めて知ったものまで。

コレはなんだと聞けば、このおつちやん聞いてもねえウンチク話してくれつから、暇つぶしになると思つたんだが…

「てかおつちやんもある野郎の事言うのかよ…」

「あ？どうしたんだよ、お前さんらしくない暗い顔しちやつて…なんか悩んでる事があるなら聞くぞ？」

おつちやんの所為だろうが：悩み相談なんて、そんな女々しい事出来る訳…

…まあ、ちょっとくらい…暇つぶしの一環で、少しだけ、な…？  
「実は…」

ポツリポツリと、胸の内に渦巻いていた感情を発露させていく。

朝からなんだかモヤモヤする事。

何故か物事全てをブルーな気持ちで考えてしまう事。

皆んながサイトウサイトウ煩くて、なんでオレにばっかり言つてくるのか分からぬ事。

腹の中に溜まつた物を全部、全部。

それらを聞いて、成る程なあ…と顎をさするおつちやん。若いついでいいなと咳きながら、生暖かい笑みを携えて、こつちを真っ直ぐ見抜いてくる。

「で、結局お前さんは嫌なのか？」

「何がだよ」

「何がつて、サイトウさんのお見舞いに行くのが」

「…そこが、分からねえから苦労してんだろうが…」  
帽子を深く被りながら、脱力する。項垂れるつて言つた方が正しいかも知れない。

サイトウの容態が、気にならないといえば嘘になる。

健康的な肉体を持つてる人と言われて、オレの中で真っ先に思い浮かぶのはサイトウだ。風邪をひいたって聞いた時、確かに動搖したし、あのサイトウが…ともなった。

早く治つて欲しいとも思つて。他意はない。あくまでジムチャレンジが滞るからだ。暇だし。

ただ、それでオレが看病に行く、と言うのが、何故か引つかかってしまう。素直になれない。行くという選択肢を押せない。自分でもなんでこんなに感情がブレるのか分からぬし、そんな自分が相当面倒くさいと言うのも分かっている。

あーもうこの際だ。心配して。さ。

どうせアイツの事だ。心労が祟つたんだろう。若くしてジムリーダーを務める身だ。リーグからの仕事、負けない為の修行、勝つ為の特訓、そんな事1ミリも理解出来てない三下共の誹謗中傷、クズ連中の罵詈雑言、逃げ出す訳にはいかない、ジムリーダーとしての責任。ストレス溜まりまくりの生活に決まっている。

鍛えてるから大丈夫だと。こんな事気にする様ではまだまだ甘い、修行が足らないと。

アイツはいつもそう言つてくるが、ロトフォンを見て僅かながらも顔を覗めているアイツをオレは知つて。迷惑メールを受けてくる事も、毎日イタ電が掛かってくる事も、ある時は、街中で直接言われた事も。

そいつは路地裏に連れ込んでノしたが。

どいつもこいつも、サイトウが完璧超人だと勘違いしてやがる。一枚仮面を剥がせば、アイツは唯の女だ。失敗する事もあるつてのに。出来る事なら変わつてやりたいぐらいだぜ。

出来る事、なら…ジムリーダー、に…か：

ハハツ、随分大きく出たもんだ。

嘲笑する。自分自身に対し、その発想に対し。

ダメだダメだ、思考がズレちまた。いつまで引き摺つてんだオレは。らしくない。オレらしくない。

ネガティブな考えに持つてかかる所だつたぜ。まだまだ、先はわからぬえつて話なのにヨオ。

「詰まる所、皆がオレに行けつて押し付ける様にお見舞いを勧める態度が、気にくわねえんだろうなあ…そもそも、親がいんだろ親が。オレなんかが行くよりよっぽど良いわ」

「…あー…その事なんだが…多分、サイトウさんの親御さんは、看病しないんじやないかな…」

「アア? なんでだよ、子供が風邪引いたら普通看病すんだろ」

「その普通に当て嵌まらないのが、親御さんつてのも、お前さん、知つてる筈だろ?」

「…そうだつた」

アイツの両親、クソ程厳しかったんだつけ。

## 英才教育

オレみたいな人種がらしたら、反吐の出るような話だ。やりたい事をやらせて貰えず、毎日叱咤、修行の日々。表情筋が衰えるつて、相当な辛さだろう。

そういう、アイツ前に風邪引いた事話してたな。確か、何から何まで自分でやつたつて。

風邪ひいた状態でタフすぎんだろ、やっぱお前色んな意味で凄い奴だなどそん時は引いてたけど、もしかしてそういう事か? だとしたらクソなんだが。

いやでも、流石にな…まさか…流石に…風邪ひいた娘ほっぽつてく程バカじやねえだろ…

流石に…うん、オレが行く必要なんて…唯のジムリーダーと挑戦者

だし…うん…

……

ヤベエ、なんかもう面倒くさくなつてきた。

「おっちゃん、モモンとオレン、後とくせんリンクを適当に見繕つてくれ」

「お？なんだ、遂に行く気になつたのか？」

「さあな。唯、こんなウジウジ考えてんのはオレのキャラじやねえつて思つただけだ」

こちとら既に頭がショート寸前なんだよ、もうどうにでもなりやがれ。

「ハツハツハツ！それが良い、若いうちなんて行き当たりばつたりで、なんも考えなくて良いんだよ。ホラツ、毎度あり。ちょっとだけオマケしといたからな。サイトウさんに、宜しく頼むよ」

「だから行くとはいってねえだろ…。ありがとなおっちゃん、また今度。サイトウになんか買わせにくるわ。とびつきり高いの用意しつけよ」

「そりや楽しみだ。マラカツチの果実でも仕入れてくるかな。じゃ、気を付けろよ」

良い香りが漂う、確かな重量を持ちなが露店を後にする。強く照り返す日差し、雲一つ、ポツリと浮かんでいる青い空。その雲も、東の空へと流れ去る。

色々話して吹き切れたのか、はたまた思考がオーバーヒートしていくことが二段階下がつたせいか、なんだか少し気が楽になつた気がしやがる。

やっぱ、会話とは偉大だ。病は氣から、ハツキリわかんだね。

さ、そろそろ昼時だし、買うもん買ってさつさと行きますかね。

待つてろよ、テメエの弱つてる姿を写真撮つて、後日アホみたいに

揶揄つてやる。その為にも、早く元気になつて貰わなきやなんねえからな。つたく、面倒の掛かるヤツだぜ。

そんな、自分で中で素直とは言いがたい正当な理由を立てて、丘の上にあるジムへと走り出した。

取り敢えず、着いた途端に

「やつぱり来ましたねアクサキさん。ホラ、コレ、目的のものです。いやあく待機しといて正解でした。貴方の事ですから、きっと街中で物資揃えて嫌々の体で行くんだろうなつて思つてたんですよお〜全くもお〜マジツンデレつすね！ツンデレのアクサキさん、約してツンザキさん！コレはアクサキさんファン一同大歓キイイテテテテテエ？いふあいでふあくそあきそん、いふあいでふつ!?ふあなを摘ふあなたいふえくだふあい!？」

つて言つてきたジムトレーナー、テメエは許さん。赤つ鼻にしてやる。

そのあとオレは看病を完璧にこなした。

アイツは中々良いところに住んでやがつたから、エントランスのよくわからねえセキュリティにドギマギしつつ、不審者扱いされながらもなんとか無事にヤツの部屋まで辿り着いた。

意氣揚々とドアを蹴破つて、案の定人の気配のない室内に顔を顰めつつ、さあ、どんな間抜け面晒してやがるかなと見てみれば、思つてた以上にヤバそうでビビつたりしたけど。

鈍臭えゴーリキー共どかしておかゆも作つてやつたし。

買つてきたきのみや果物すりおろして、ハウエン旅してた時作つた苦い漢方薬も飲ませてやつたし。

寝汗でぐしゃぐしになつた服の着替えも手伝つてやつた。流石

に下着交換や背中拭いたりするのはニューラにやつて貰つたが。

暑いといえばニューラのこおりのつぶてで氷嚢を、寒いといえばダーテングのねっぷうを。

溜まつてた家事もやつてやつたし、サイトウが風邪そつちのけでやろうとしてたジムの事務（なんちつて）なんかもやつてやつた。

それでも、悪いです、すいません、とか言つて休もうとしねえから、わざわざこのオレが膝貸して、無理矢理寝かせて、頭も撫でて、手も握つて、子守唄も歌つてやつて。

ようやく寝息が聞こえてきたから、アイツのロトフオンに何かあつたら直ぐ連絡する様に念押してから、ドヤ顔で帰つてきたんだ。

全く、風邪を引くなんてバカな奴だあなんて口走りながら、やれやれと肩を竦めながら、帰つてきたんだ。

「まざかそのまま、ゴホッ、はあ、はあ、感染つちまうとは…下手こいた…！」

そして現在に至る。

「ガハッ、ゴホッ…ア、ア…喉がいでえ…熱下がつてる気がしねえぞ…チクショ…！」

『——』

室内に響く刺々しい咳、ニューラが何やつてんだお前は、という顔で氷嚢を投げつけてくる。

熱が奪われていく感覺に息をつくのも束の間、直ぐ様襲つてくる倦怠感と頭痛が煩わしい。吐き気を催す。目が回る。  
ぬかつた。最高に油断した。

ジヨウトを旅してた時も、ホウエンを旅してた時も、看病する機会なんて沢山あつたが、感染つた事なんてなかつた。今回も大丈夫だろうとタ力を括つちまつた。

あんだけ風邪ひいた事バカにしたのに。

あんだけオレは丈夫だから感染する訳がないと豪話したのに。

余裕ぶつこいてマスクもしなくて、その結果がこれだ。無様。ホントに何やつてんだオレ。穴があつたら入りたい。

「今日はジムチャレンジねえよな…確かに、一週間後で良いつてジムト

レーナーに言つた氣が…ぞうだ今日バイト、行かなきや…薬はサイトウの野郎に使つたので最後だから、先ずは薬局に：いや、ワイルドエリアで採つたねつこはまだ残つてゐるから…先に食料…クツヅ、頭が回らん…！」

しかし不味い、不味い事になつたぞコレは。

風邪を引いちまつたのはまだ良い。頭痛や吐き気はツレエが、薬飲んどきや治る。サイトウに使つた漢方薬はエゲツない程苦いけど、我慢すればいい話だ。

バイトもなんとかなる。今日の仕事は炭鉱での作業だ。そんなに人と接触する仕事ではないし、チリ屑が気管に入らないようマスクを着用するから感染の危険性も低いだろう。

時間も半日だし、体力的にも大丈夫だと思いたい。

問題は…

『メッセージを受信した口ト！メッセージを受信した口ト！』

「チツ、やつぱきやがつたか…！」

騒がしい事この上ない、口トフォンのアラームが部屋に響き渡り、寝ているオレの目の前にすつ飛んでくる。

這う這うの体でロック画面を外し、受信箱を見れば見慣れたアイコンと整つた文章が。

そう、オレがなんでここまで焦つてゐるのか、その理由は

『こんにちわ、貴方のサイトウです。少し宜しいでしようか？』

オレがアソツを看病したのが三日前で

『この前はどうもお世話になりました。お礼も兼ねて、ご飯でもござ一緒にどうでしようか？』

あの野郎が完全に復活してやがる事だ。

「なんでこんなに日を跨いで感染るんだよおかしいだろ…！それよりも、ホントに不味いぞこの状況は…サイトウの野郎に、こんな痴態を見られる訳にはいかねえ…！絶対にだ…！」

あんだけ風邪ひいた事煽つといて、煽つた張本人感染つたらとか恥ずかしい以外の何でもない。羞恥心で死んでしまいそうだ。アソツが今のオレを見てどう思うか…それを考えただけで熱が上がつてしま

う。

クソ、あの野郎ジムリーダーだろ…！フットワーク軽すぎやしねえか、仕事しやがれオレの事はどうでもいいから…！

普段あんなに暇が潰せて丁度良い、良い奴だと謳っている癖に、掌返して悪態をつく。それに天罰を与えるが如く、咳がこみ上げ、鼻水が洪水状態、症状が悪化していく。

辛い。人を小馬鹿にしちゃいけねえって神様が怒つてやがるのか。そろそろ薬飲んで胃に何か入れとかなきやおつ死んじまう。

取り敢えず、返信しとかなきや…

『お礼なんて、んな事気にすんな。仕事しとけ仕事』

『私が気にします。ジムリーダーの業務はちゃんと予定を組んでこなしていますので大丈夫です。勿論、休憩時間を利用するつもりですよ。ジョウト料理屋なんてどうですか？テンドン、でしたつけ？好きで

すよね』

『朝からオメエよ。本当に大丈夫だから。ほら、今日バイトだし』

『朝つて、もうお昼前ですよ？まだ寝てたのですか、珍しいですね。いつもならバイトがあつても昼食ぐらいは一緒に取ってくれるのに、今日はいやに断つてくるし、何かあつたのですか？』

『なんもねえ。とにかく、オレはいかねえ』

その言葉を最後にロトフォンを放り投げる。もういいのかと再度目の前に浮かんでくるそれにシツシツと手を払い、顔を深く布団へ。もう限界だ。今ので余計頭がクラクラしてきやがった。ニューラに頼んで氷嚢を作り直して貰う。あんまり頭を使いたくないつてのに、あの野郎食い下がつてきやがつて。無駄に鋭いからヒヤヒヤしちまう。

少し寝てから、飯買つてバイト行こう。もう、休まなければ、そろそろ本格的に風邪がヤバくなってきた。

身体の危険信号に身を任せ、重くなってきた目蓋を重力に任せると、ニユーラにお使いと、バイトの時間に起こして貰う様に頼み、濁る意識をまどろみの森へと投げ出そうと——

『電話口ト！電話口ト！』

コイツへし折つてやろうか

「テメエ…ちつとは空氣読めヤア…！せめてもう少し声小さくしろ、頭に響いて敵わん…！」

『そんなの知らん口ト！·さつさと電話に出ろ口ト！』

『この野郎、生意気言いやがつて。今度充電する時は質の悪い電池でやつてやる。

目の前で騒がしく揺れるロトフォンをひつたくり、電話先も見ずに通話ボタンを押す。もしもしと、無駄に綺麗な声が耳朶を打ち、少し落ち着いてしまった己を一括。怨みマシマシの、いかにも迷惑ですという意を含め、返答する。

「少し、しつこいんじやねえか、サイトウさんヨオ…？」

『貴方が一方的に会話を切るからです。一体どうしたのですか？アクサキさんらしくない。本当に、何があつたのですか？』

『さつきもメール、で言つただろ…なんもねえよ…！バイトがあるから行かないだけだ』

『そんな筈はありません。アクサキさんが私の誘いを断るなどありえない』

「普通に断るときは断つてるわボケエ…その自信はどつからくんだ…！もういいか、話は終わりだ。電話代だつて馬鹿にならねえんだから、また今度、な？」

『もしかして…先約があるのですか？』

『話聞いてたか？あるよ。バイトだつつてんだろ』

『屁理屈言わないで下さい。口塞ぎますよ？思いつきり舌絡ませて』

『どうらへんが屁理屈なのか分からんしテメエは一体何言つてやがんだ。オレをおちよくりたいだけなら電話切るぞ？てかもう切つていよいよな？これ以上長話してたらバイト遅れちまう』

今日のサイトウは一段と面倒くせえ。少し早いが、バイトつて事でさつさと電話きつてホテル出ちまおう。

『先程からバイトバイトバイト…貴方が今からシザリガーと受けるバイトは第二鉱山での鉱石発掘及び運搬作業、昇給あり日給10800円ですよね？一時半業務開始、五時に終了と聞いております

が、これは何かの間違いでしようか？まだ業務の時間まで一時間以上ありますよ？なんで嘘をつくんですか？ねえ、なんで？嘘を付く必要、ありましたか？バレるんですよ。分かるんですよ。私は貴方の事ならなんでも知っているんですよ。そんなにも舌を引き抜かれる程激しくシたいという事でしようか？そもそも誰ですか？私とアクサキさんの時間を邪魔する不届き者は。マセガキ 性別は？名前は？使用タイプは？まさかとは思いますが妹さんなんて事はありませんよね？許しませんよそんな事。今すぐに断つて私の元へ——』

「さいなら」

雲行きが怪しくなってきた通話をブチ切り、非通知にして今度こそバツグヘと放り投げる。これ以上奴の長話に付き合う義理はない。作業着に着替え、荷物を持つて玄関に向かう。

クソ、思つてた以上にキチイ……だが、バイトといえ仕事は仕事、しつかりやらなくては…

ふらつく身体に鞭を打ち、眉を曲げてこつちを見てくるニューラに行つてきます、取手を捻つて力一杯押す。

「なんで切るんですか？」（くろいまなぎし）

全力で引いた。片腕で止められ、力の拮抗は呆氣なく崩れたが。ドア越しに絡みついた力に投げ出される形でサイトウの胸へと飛び込むが、冷暗な瞳に喰る邪気、瞳孔が縮こまる。恐る恐る顔を上げれば、絡み合う視線に、影の掛かつた冷たい笑みがオレを出迎えた。引きつった笑顔で返す。場面だけ見れば、見つめて笑い合う男女という甘酸っぱい青春の1ページ。笑うしかない。

いくらなんでも、部屋の前ガン待ちしながら電話はダメだろうがあ、サイトウさんヨオ…？

そんな心の慟哭虚しく、奥のベッドへと担がれていく。心なしか鼻息が荒いサイトウの横顔を最後に、シーツへと投げ出され小動物のように小刻みに震えるオレは、今日という日が早く終わることを心から願つた。

取り敢えずサイトウ、そのアゴを掴んで上向かせるのやめろ。うざつてえし、感染るから。なんの意味があんだよこれ。おい、なんで舌舐めめずりした。上に股がるな。重いから、おい、感染るぞおい、おいツ、ツクシヨ腕動かせん離せ！相変わらずどんな力してやがんだテメエおいおい近い近いやめろおい、おいーーー！？

冷たい暗黒にポツリと一人、立ちすくむ。

辺りを見回しても、闇、闇、闇。ヘドロのように真っ暗なソレは膝下まであり、歩こうにもまとわりついて動きを阻害する。肺が凍つてつよくうちに痛い。

『風邪ごときで寝込むなんて、情けない』

そうやつて、まとわり付く闇に四苦八苦していると、背中から声を掛けられる。振り向けば、父さんだ。

父さんは私を灰色の瞳で一瞥すると、呆れ、ため息を吐きながら、修行が足りないと私を叱責した。身体に重圧が加わり、ヘドロが腰まで上がつてくる。

いや、この場合私が埋まつていつているのか。

『ジムリーダーとしての責務も果たせないなんて、情けない。一体私は何処で育て方を間違えたのかしら』

次に現れたのは母さんだ。ジムリーダーとしての仕事をこなせない私に嘆き、ヒステリック、失望の眼差しを向けながらその場で泣き

崩れてしまった。

更に重圧が加わり、胸までヘドロに浸かつた。

昏い、ねつとりとした熱が身体を焦がす。随分と既視感のある言葉、光景。それもその筈、これは今朝仕事に行く両親に投げかけられた言葉だ。奥歯を噛み締める。

寒い。虚しい。寂しい。悔しい。怖い。苦しい。不快感が込み上げる。このヘドロに浸っている限り、常に負の感情が間欠泉のように吹き上がり、どめを知らない。

もがけばもがくほど身体はヘドロに囚われていく。

そんな私を他所に、二人はドロドロと融解し始めて、辺りのヘドロを取り込み合体する。そして表面をウネウネと動かしながら、再び人の形をとり。

『——サイトウ?』

そして私の将来の夫である——アクサキさんが現れた。

アクサキさんは半分以上低くなつた私を見つめながら、困惑した様な、酷く悲壮な表情を浮かべる。

まるで薄々気づいていた物語の結末に、改めてショックを受ける様な、そんな表情を。

『やつぱり、やつぱりお前もなのか……お前も、オレを置いていく』

何が、何の事だ、何でそんな表情をする。置いていくとはどう言う事だ。

必死にアクサキさんの元へ行こうとするが、どれほど前に進んでも差は縮まらない。寧ろ、徐々に離れていく。身体も、段々とヘドロに飲み込まれていく。

『お前もどうせ、追いつけない程先に行つてしま——ほら、もう届かない』

胸までだつたヘドロは首まで、首までだつたヘドロは頸まで。ゆつくりと、されど確実に身体は沈んでいき、アクサキさんは私から離れていく。

：いやこれは——私が彼の向いている方向に進んでいる？  
背中に紐をつけられて、引っ張られる感覚だ。

アクサキさん、アクサキさんツー！こつちに来て、私を引っ張り上げて下さいツ、お願ひしますツ！

叫ぼうにも、声が出ない。喉から捻り出そうにも、喉仏を丸ごと取られたかのように、空気を震わす事が出来ない。

『ーーーあばよ、サイトウ』

そう言つて帽子を深く被り、その場で蹲つてしまふアクサキさん。ズブズブと周りのヘドロが波打ち、彼を包み込んでいく。

一気に引き剥がされるスピードが上がる。抗えない。何度も彼の名前を叫ぶ。

が、届かない。どんどんと、彼との距離が開いていき、遂に私の身体全てがヘドロに飲み込まれてーーー

「ーーーアクサキさんツー!?」

「うおビックリした。なんだサイトウ、オレの名前急に叫んで」

「ーーーツ」

目に飛び込んだのは、見慣れた部屋に、虚空へと伸ばす自分の腕、真っ白なシーツにベッド。

そして、横に置いてある丸椅子に座りながら、書類片手にキヨトンとした目で此方を見てくるーーーアクサキさんが。

ゆ、め…夢、か…？

「おい？大丈夫かサイトーーーグエツツ!?」

「ーーーつ！」

思わず身体を起こして、アクサキさんを力の限りに抱きしめてしまう。そこに存在している事を確かめる様に、もう二度と何処かに行かない様に、離さない様に、強く、強く。男らしくも、優しい匂いが私を包む。

突然の圧力にガマゲロゲが潰された様な声を出したアクサキさんは、すぐ様私を引き剥がそうと肩に手を置いてーーーそのまま背中を撫でてくれた。心に渦巻いた不純物が、浄化されていく。

何処までも鋭く、とても柔らかい、暖かな、光。

「何でこんなに震えてやがんだテメエは…ひつペ剥がそうにも剥がせねえ。どうした、怖い夢でも見ちまつたのか？」

「は、い…貴方が、暗い彼方に消えてしまふ、そんな夢を…見て…良かつ、た…夢で、ホントに良かつた…！」

「ちよ、おま、え、泣いツ…つたく、調子狂うぜ…ほら、よしよし、もう大丈夫だぞー」

慈母の様に優しい手が私の背中を撫でる度に、ポツリポツリと嗚咽が漏れた。

それから暫く彼に抱きついて、どれほどの時間がたつただろうか。ピンポイントに湿つてしまつた彼の服をみて、顔を赤くしながらも今の状況を整理する。

今アクサキさんが私の部屋に居て、私の隣に座つている理由。それは、風邪を引いた私を彼が看病してくれていたからだ。

不甲斐ないながらも心労が祟つたのか、かなりの高熱を出してしまった寝込んでいた矢先、インターホンが鳴り、代彼がドアを蹴破る勢いで部屋に入ってきた時は驚いた。

「おうおうサイトウ、随分と苦しそうだな！大丈夫か！テメエの間抜け面拵みに来てやつたぞ感謝しやがれオラア！」

そんな事を言いながら彼は完璧に看病をしてくれた。

東洋で有名らしい病人食であるおかゆも彼が一から作ってくれた。食べ、そぶつきらぼうに、けど、火傷しない様にフーフーしながら私に食べさせてくれた時は、久しく感じていらない母の味を想起させた。

流石に疼いた。病人として立場は弁えたが。

薬も彼が用意してくれた。市販の薬を買いに行こうとした私を引き止めて、ちからのねつこやら、ふつかつそうやらで作つた彼特性の漢方薬を、ホウエンを旅したときに覚えたんだ、オレは風邪ひいた事ないけどな、と自慢げに見せてきた。

材料に使われているものは、全て舌が痺れるほど苦いものばっかりだつたが、彼はわざわざ買っててくれたきのみとくせんリンゴを擦り下ろし、それに混ぜて私に飲ませてくれた。

挙げ句の果てに、彼は溜まっていた家事もやつてくれた。洗濯、皿洗い、掃除。女子力つてのが足りてねんじやねえか？あ、女つてのも怪しかつたな失敬失敬！と一々私を煽りながらも、丁寧にそれらをこなしてくれた。

おかげの時もそうちつたが、彼は家事全般が上手かつた。これは将来専業主夫になつてもらうのもアリかも知れない。疲れて帰つてくる私に新婚三択をしてくるアクサキさん……全然アリ。

寧ろウエルカムだ。心配なのは、彼は長男だから婿に抵抗があるかも知れない。

その他彼はニユーラのこおりのつぶで定期的に氷嚢を変えてくれたり、寒いと言つた私の手を握つてくれたり。

着替えなんかも手伝つてくれた。身体を拭いたりしてくれたのはニユーラだったが。

私は別に構わないと言つて少し大胆に彼の前ではだけて見せたが、嫁入り前の女がそんな軽率な事言うじやねえとデコピンされた。彼の中では、嫁入り前の女性の部屋に入る事はセーフなのだろうか。ベッドに横たわりながら、チラリと彼を盗み見する。

無数の裂創に隠れた、凜々しくもあどけなさを残している顔。眞面目に机に向かっている姿も相まって、普段より三割増でカツコよく見える。好きだ。こつそり隠し撮る。

彼は今も、私のジムの書類仕事を手伝つてくれている。本当に、彼には頭が上がらない。先程出来上がつたものを流し見たが、私のサンなどが必要な所以外、全て綺麗に内容を纏めていた。

是非とも私の所で仕事をしてほしいくらいだ。永久就職を推奨するレベルで。

「アクサキさんは、この様な仕事の経験があるのですか？」

「んああ、少しだけだけどな、同期のサポートつて名目で、同じような仕事に就いたことならあるぜ。ホントはもつと違う事やりたかったんだけどな、残念な事に、オレはこう言う仕事が性に合つてるらしい」

私の問いかけに、アクサキさんは何故か困り顔で苦笑する。

残念、か……して、残念と言う言葉が出てくるのだろう。どうし

てそんな悲しそうに笑うのだろう。

先程の夢の内容が蘇る。心がザワザワして、沈黙に、何か喋らなければと焦ってしまう。

「それなら、私の所で事務をやつて下さいよ。そしたら、私とずっと一緒にいれますよ？色褪せない日々が来る事を約束します」

そんな焦りからきた言霊は、随分と告白じみた内容になつてしまつた。今更といえば今更だが、ドキドキもする。

だが、鈍感な彼の事だ、なる訳ねえだろ、そう一蹴するに違いない。

「…そうだな…案外それが、一番良いのかも知れないな」

しかし、彼の返答はそんな私の予想を、良いか悪いか裏切る事となつた。やつぱり彼の顔に浮かぶのは、悲しそうな、困り笑顔だ。  
「さ、もう寝ろ。テメエは病人、風邪つてのは寝なきや治らん。寝れねつてんなら、ほら、膝枕。子守唄も歌つてやるから、な？」

私の余計な採り入れを回避する様に、彼が寝るよう指示してくる。有無を言わせないようにベッドに乗り込んで膝枕をしてくるなんて、しかも子守唄付き。

もう少し話していたい。会話を楽しみたい。そう抗おうにも彼の膝枕はとても心地が良く、時折ゆっくりと手で髪を梳き、頬を撫でてくるのが気持ち良い。

ジョウトの、それもかなりの鈍りがある言葉で歌われる子守唄は、耳を優しく包み込む。

「アクサキ、さん…お願ひ、です…もう、何処にも行か、ないで…私から、離れ、ないで、下さい…」

必死の抵抗もあつという間に崩され、まどろみの森へと身を投げ出す寸前、そうアクサキさんに、お願いする。私の初めて見せるかも知れない弱音、再びキヨトンとしたアクサキさんは、少し間を置いて、吐き出すかの様に。

「…はあ…分かつた分かつた。どちらにせよ、ジムチャレンジが終わるまではここを離れる気なんてねえしな。約束するよ」

「約束、ですよ…破つた、ら、私直々に、舌を抜いて、あげ、ます…ケーキも、奢つてもらい、ましようか…私、行きたい、ところが…」

「おいおい、もう破る前提かよ信用ねえな。ほら、これで良いか。こうしてりや少なくとも、お前から離れる事は出来ねえ」

布団からはみ出て冷えてしまった、私の手を握ってくれて。

今度こそ、私は完全に意識を手放した。

「何処にも行かないで、か…ハツ、こっちの台詞だよ…こうでもしねえと…手でも掴んでねえと…」

——離れていつちまうのは、いつもお前らだろうが

静かな部屋に響き渡る、寂しい声を拾う者は、誰もいない。

## なげつける

オレはあくタイプが大好きだ。

何故あくタイプが好きなのかと問われれば、軽く半日は語ってしまう程、オレはあくタイプを愛している。

あくタイプと聞けば、人によつて顔を顰める人もいるだろう。

が、少し待つて欲しい。『あくタイプ』という五文字だけで、あくタイプの全てを判断するのは、あくタイプ使いとして許せないものがある。

そんな、今日も今日とてジムチャレンジを済ませ、シザリガーと共にバイトに来たオレ。

「誕生日イ〜？」

「そう、誕生日。サイトウくんのね」

振り上げたピッケルを岩壁に叩きつけながら、間抜け声を辺りに晒す。

ここは、焦げた岩の匂い、肺に直接殴りかかってくる熱氣にリズミカルな打撃音が響き渡る、ガラル産業の基盤が一つ、第二炭鉱。

オレは今、につくき宿敵であるサイトウの誕生日を祝つてくれないかと、絶賛カブさんに声をかけられている所である。

「第一回！チキチキ、サイトウの欲しい物なーんだ！誕プレ選手権！」

「ちょっと待ちんしゃい」

晴天、という言葉がぴつたりな程に青い空へと声を張り上げる。地元では馴染みのあるこの導入は、どうやらガラルでは伝わらないようだ。

集まつた四人の内三人は首を傾け、一人は待つたを掛けってきた。

ツクショオ、ノリの悪い奴らだぜ。イツシユだつたら絶対に乗つてくれるのに。

「イカれたメンバーを紹介するぜ！　“だぞだぞJ·r.”！なんでも褒めてくれるチャンピオンの弟！」

「流石だぞ！」

「いやなにが？　ちよつと待ちんしゃいつて」

「次に“ゴースト仮面”！ミステリアスなじやりんこジムリーダー！」

「が、頑張ります…」

「ねえ、やけんしや話聞いとー？」

「最後に“ニット帽”！全く喋らん！意思疎通不可！以上！」

「マリイン番はなかとかよッ!!」

「ブゲラツ!？」

めげずにノリを続けたオレの頬を、マリイの腰の入った右ストレートが穿つ。パンとという小気味良い音ともにきりもみ回転。地面へダイブ。めっちゃイテエ！？

「な、なにすんだマリイテメエ！ガキが出しちゃいけないレベルのパンチ飛んできやがったぞ!?」

「しゃあしか馬鹿！アクサキがデートつて言うたけん來たとに訳わからん事言い始めて、挙げ句ん果てマリイン事無視したけんやろ！」

「デデデデデデデートなんて言つてねえよ一言も!?買い物付き合つてくれつてちゃんと伝えただろうが！」

「アクサキにしやつちが電話かけられて『暇あるか？付き合つて欲しい』なんて言われたら否が応でもそげなもんだつちや思うてしまうやろうが！しかも、よりによつてなんでアイツんことで…！しえつかくおめかしして來たとに！」

「フンッ！と言つてそっぽを向いてしまうマリイ。なにをそんなに気に食わないのか、やっぱ女つてえのは良く分からん。

「…」

「イテテテ…ああサンクス、ニット帽。洗つて返すぜ」

「…」

腫れた頬をさすりさすり、土を払いながら立ち上がると、見かねたニット帽がハンカチを渡してくる。気の利くやつだなと感謝しながら顔を拭き、後日洗つて返すとポツケへと。

「……」

「……ニット帽？」

突っ込もうとしたら手を掴まれた。

「えっと……その手はなんだ？」

「……」

「え、いや、だから洗つて……」

「……」

「あの、おい、ちょっと、おい通訳<sup>マリイイイ</sup>!?」

ずっと無言で微笑んでくるですけど!?怖いんですけど!?なに、これどうすれば良いんだ!?

「…もしかして、ユウリン通訳係っていうことだけで、マリイン事呼ん

だん…?」

「いや、それだけって訳でもないけどよお…やっぱコミュニケーションって円滑に進めなきゃダメじゃねえか、な?」

「…はああああ…!!」

すつごい大きなため息を吐き、マリイがにらみつけてくる。怖い。ぼうぎよ一段階ダウン。

てかガキ二人にビビリ散らかしてるとか情けないなオレ。今更だけどよ。

「貸して」

「はい」

「ほら、ユウリ。後で使わしえてね」

「……！」

オレからひつたくるようにハンカチを取り、ユウリに渡す。

受け取ったユウリはニッコリ満面の笑み。分からん。自分で洗うからいいって事か?律儀な奴だぜ。

「まあいいか。そろそろ本題に入るぜ。今日の午後…そうだな、6時くらいいか?それぐらいにサイトウの誕生日会をやるそうだ。で、誕生

日といえばプレゼント。日頃の感謝を込めて、今日はそのプレゼントを皆に買つてもらおうと思つてな、集まつて貰つた。何か質問ある奴いるか?」

「はい」

「なんだマリイ」

「マリイはオニオンのジムに行つたけんアイツにお世話なんかなつたらん」

「これを機会に仲良くなれ。他にはないな。じゃ、行くぞ。なんかあつたらオレにいえ。逸れるなよ。今日は暑いからな。水分補給はしつかりしとけ。ないなら買つてやるから遠慮すんな。ほら、アメやるよ」

「まるで保護者だぞ!」

「お、お父さん…?」

「誰がお父さんだ」

保護者つてのはあながち間違つてはねえが。こんなかで最年長はオレだからな。なんかあつたら責任どんのはオレだ。問題が起きねえようにしつかりと引率しなければ。

屯つてたシユートシティの広場から移動し、ガラルの中で一、二を争う大型デパートへと辿り着く。

ここはよくサイトウの野郎に強制連行される所だ。服屋に装飾品売り場、食事処もある。こなラプレゼントっぽいもん何かしらあんだろ。

取り敢えず、昼飯兼ねてカフエで一服するか。

「——てな訳で、先ずは作戦会議だ。誰か、アイツが欲しがつてものとが知つてる奴いるか?もしくはこれいいんじやないかつてヤツ」

音を立てないようにコーヒーを傾けつつ、四人にそう持ちかける。プレゼントを買うにしても、どんなジャンルを買うかによつて変わつてくるからな。候補絞つていかなきや間に合わん。

うーんと首を捻り考える四人：いや三人。おいマリイ、興味なさげにあくびすんなよ。一緒に考えてくれや。ほら、このサンドドイツチあげるから。

「サイトウさんの欲しいもの…欲しいもの…なんでしょうか…」

彼女、結構物欲が乏しいですから…

そう言つてストローでオレンジジュースを器用に飲みながら、苦笑いするゴースト仮面。

物ではなく者なら喉から手が出るほど欲しがつてゐるんですけどと続ける。なんのこつちや。

「全然思いつかないんだぞ！」

「……」

「…強いていうならケーキやドーナツなどのスイーツじやないかって、ユウリがいつとーぱい」

次いで三人もこれと言つた意見が浮かばず、疑問符が辺りに漂うばかり。唯一ユウリがいい線ついてるが…

「甘いものかあ…それもいいが、料理とかはルリナパイセンにヤローの兄貴が作るからな。オレも手伝うし、食べ物以外が良いと思う」

「そうなんですか…それじゃあ買つても被つちゃいますね…」

「ちゅうか薄々気づいとつたばつてん、やつぱりアクサキつて料理しきるんやなあ」

「ん、まあな。忘れられがちだが、オレは三地方を周りきつた旅人、自炊ぐらい出来なきや話になんねえよ。味も保証するぜ?この前サイトウの野郎に一食分作つてやつたら、『毎日私に貴方の手料理を食べさせて下さい』って言われたからな」

ふふつ、あん時のアイツは傑作だつたぜ。

宿敵<sup>オレ</sup>が作つた料理(ヨワシの味噌煮定食)にもかかわらず、美味しそうに頬張りやがつてさ。

食い終わつて、悔しさからかプルプル震えた後、跪いて手を取つてきやがんの。女の癖に男に家事勝負で負ける屈辱を味合わせる事が出来て、オレア大満足。

また今度、魚フライ定食でも作つてやるか。

「えーいいなあ!俺もジョウトの料理たべたいんだぞ!」

「ぼ、僕も興味…あります…」

「台所貸してくれりやあ作つてやる。なんなら今日すぐに味わえる

ぜ。あまりの美味さに、お前ら、度肝抜かすなよ？…って話が逸れたな。これ以上いても進まなそудだし、時間もねえし。そろそろ無難に小物売り場辺りでも行つてみつか」

関係ない話題で時間を浪費して、集合時間に間に合わなくなつたらしようもない。手元に置いてあるレシートをとり、先に出るよう伝えてレジに向かう。

「…………」

「ユウリもそう思う？ 本当、アクサキには困つたけんだけやん… アイツばつかよか思いしゃしぇとつたまるかつて話ばいね… アクサキが鈍うて助かつたばつてん、こすかよな… うん、うん… そしたら、マリイによか考えがあつてしま…」

ふと、財布をいじつてる時にさつきから静かだつたマリイとニット帽の小声（ニット帽は喋つてないが）が聞こえてきたが、アイツらなんの話してんだろうか。

少し気になつたが、ガキとはいえ女の会話を聞き出すのも野暮つてもんだ。大したことじやないだろう。大したことじやないと思う事にする。別に二人の目やらオーラが怖かつたからとか、そんなんじやない。断じてない。

「…………」

「ふふふ…」

どうしよう、すつげえ嫌な予感がする。

そんな、ねつとりとした歳不相応な二人の笑顔を振り切るように、急ぎ足で小物売り場に向かつた。

小綺麗な置物に、ちょっとした化粧用品や美容品、よくテレビで紹介されている便利な道具など色々な商品が立ち並んでいる、ヨロズショッピング『かるわざ』

店番をしているサワムラーとアギルダーの横を通り抜け、だぞだぞJ r. とゴースト仮面は道具売り場、マリイとニット帽は化粧品売り場へと、それぞれ店を出ない事を条件にプレゼントを探す。

オレは別に買う必要はないので、店主を冷やかしながらサワムラー達と戯れていた。

「全く、だぞだぞJ r. 達もマリイ達も、子供してやがんなあ。アイツら、真つ先に自分の興味ある場所へと向かいやがつて。可愛げのある奴らだぜ。そう思わないか？」

「へいニイチヤン、変な所で感傷に浸つてんじやないよ。冷やかしか？」

「オレはな。大丈夫だよそんなに睨むなつて、連れどもがちゃんと買うからよ。多分な。あ、プレゼント用の包装紙扱つてるかこの店？」  
「多分て…あるよ、無料でな。千円以上お買い上げ頂いたお客様にはメッセージカードとかもつけさせて頂いてるぜ。なんだ？ 先公の誕生日かなんかか？」

「オレは学生じやねえよ。そんなに幼く見えるか？」

「あの子らとタメか一、二個上ぐらいに見える」

「目え節穴かよ、全然年上だわ」

こつちにきてからやたらガキ扱いされる。ルリナ。パイセンやヤローの兄貴には、歳の離れた弟みたいに接せられるし…確かにガラルやイツシユの人達はみんな大人びて見えるけど。

サイトウの野郎も最初年上かと思つたからな。

「老けてんなあつていつたら殴られたつけ」

「なんの話だ？ てかニイチヤンもなんか買えよ。ちょうどアザとかに効く軟膏を仕入れた所だぜ？ サワムラーもアギルダーもまだ仕事残つてんだから、あんまし邪魔してやんな」

「断る」

「断んな。営業妨害だ」

しつしつと手を払つて見せた店主は、そのままアギルダーとサワムラーに品物の確認に行くよう指示する。てきぱきと働く彼らの姿を見て、よく育てられていると感じた。

戯れてて分かつたが、店主、結構な腕前してやがんぜ。アザなんて、服で隠れて見えない筈なんだが。

「え、そろそろ様子見てくつかな…」

このまま店主と駄弁りながらポケモンを眺めて皆を待つのも良いが、誘つたやつがなんもしねえってのも失礼だろう。先ずはだぞだぞJ r・達がいる道具売り場へと向かう。

幾つかのレーンを過ぎて着いた売り場には他にもトレーナーがちらほらと見えたが、二人の格好は目立つので直ぐに分かつた。

近づいて見てみれば、どうやら買う道具をあらかじめ絞つたみたいで、どちらにしようか二人で話し合つてるようだ。来て正解だつたな。

「よおお前ら、どんな感じだ？ 何にするか決まつたか？」

「あ、アクサキ！ いい所に来たんだぞ！」

「サイトウさん、かくとうタイプの使い手なので、近接戦闘に役立つのにしようかつて、ホップさんと話して…アクサキさんはちからのハチマキか、きあいのタスキ、どちらが良いと思ひますか…？」

声を掛ければ、オレに気付いた一人が難しい表情を一転、ワンパチの如く駆け寄つてくる。かわいい。弟どもを彷彿させやがる。元氣にしてるかな、アイツら…帰つたら手紙送ろう。

「中々イカしたチョイスじゃねえか二人とも。確かにこの二択は迷いどころだ」

「だろだろ!? 自分でもビビつときちゃつたんだぞ！ でも…」

「でも…？」

「高いんですね…一つとも…」

俯く一人から物を受け取つて、値札を巻くつてみる。

おお…タスキ12000のちかハチ18000かあ…当たり前だが、結構するなあ…！

特にタスキは一回限りの使い捨てだから、財布出し済る気持ちも分かるぜ。

ま、そういう時の為に今日オレが来てんだけだな。  
「一人とも、今日は何円ぐらい持つてきた？」

「俺は…60000円だぞ」

「僕4500円…です」

ふむふむ…ガキの割には結構持つてんな二人とも。流石、上位トレーナーにジムリーダー。バトルでそこそこ金はあるんだな。

「んじゃ、オレが10000円出すからタスキにして、二人は1000円ずつ払ってくれよ。そしたらお前らの気持ちも丁度よく財布から出されるだろ」

「え…いいのか?」

「そしたら随分と、アクサキさんの負担になってしまいますが…」

オレが出した提案に、申し訳なさそうな顔をしてこちらを見てくるだぞだぞJr.とゴースト仮面。

次には自分がもつと出すとか言いそうな雰囲気を漂わせてきたので、それを遮るように二人の頭を搔き回す。

おいおい、あまり大人のオレ様を舐めて貰っちゃあ困るぜ。

「馬鹿野郎、プレゼントといえ、ガキにこんな大金払わせる奴がいるかよ。ガキはガキらしく、1000円ぐらい握り締めときやいいのさ」「俺らもそこそこ持つてるし、気にしなくても…」

「お前らが気にしなくても、オレが気にするし、なによりサイトウの野郎がいつもやん気にするぜ? プрезентつてのはな、高けりや良いつてもんじやねえの。要是気持ちよ気持ち。やつすい物買つたつて、それに気持ちが籠つてれば立派なプレゼントだ。そもそも、あの野郎は誰が一番出したお金が少ないと、気にするタマじやねえだろ」  
オレも、飾きやつたらしい料理や高級な置物を貰うより、ガキどもがせつせと集めてくれたきのみの方が好きだし、一生懸命作つてくれた置物の方が嬉しいしな。

そういうつて二人の頭を撫で続けていたら、何やらキラキラとした目線を二人から送られる。

どうした? オレの今の名言に感動しちまつたか?

フツ、どうやら今日もオレアクールにあくタイプらしく、純粹無垢なガキどもを此方側の世界へと引きこんぢまつたぜ…なんて罪深い男なんだオレは…!

「アクサキが珍しく、珍しくツ、とても良い事言つてるんだぞ……！」

「おいテメエ珍しくつてどういう事だ。普段からオレは良い事しか言わねえよほつぺちぎり倒したろか」

「アクサキさん、いつもと違つて純粹にカツコいいです……！」

「お前もかよゴースト仮面：一言余計なんだお前らあ……！」

いつもどんな風にオレのこと見てやがんだコイツら。そこんところちよいと問いただしたい所だが、まあ良い。時間も時間だし、マリイ達の方に行くか。

「じゃ、お前ら。10000渡しとくから先買つといてくれ。ラッピングしてくれるらしいから、それもしつかり頼んどくよう。オレは一回マリイ達の方見てくるわ」

「分かつたぞ！」

「では、入り口のベンチで待つてます」

札を握りしめてレジへと走るだぞだぞJr. と、律儀にお辞儀して後を追いかけるゴースト仮面を見送り、レーンを移動する。

幾つかのレーンを過ぎるたびに客層が変わつていき、化粧品特有の甘つたるい匂い。周りの視線が痛い中、一つのレーンを覗き込めば、顎に手を当て、思案顔のニット帽が。

あれ、アソツ一人か？ マリイのやつは何処行きやがった？

「…………」

「よおニット帽、どんな感じだ？ 相方はどうした？」

「…………」

六感が優れているのか、すぐ様こちらに気付いたニット帽がパタパタと駆け寄つてくる。丁度良い位置にきた頭を帽子越しに搔き回しながら、マリイの行方を聞いたんだが：

うん、相変わらず何て言つてるか分からん。

「他の所に行つたのか？」

「…………」

「ああー違う？ なら菓子売り場だ」

「…………」

「これも違うか。じゃ、便所だなアソツデエ!?」

「…………！」

思いつきり爪先にかかと落としされた。

「な、何すんだニット帽…まあいい、マリイのやつ、変な所には行つてないんだよな？」

「……」

「そつか、なら安心だ」

「……」

「……」

「……」

「……」

あかべこかつてくらいに首を縦に振るニット帽。取り敢えず、ちよつとした不安は消えた。そして会話も消えた。静寂が訪れる。

「…あー、その、ニット帽？プレゼントはどれにしたんだ？」

静けさと氣不味さに耐えきれなくなつた口から、捻り出すように話題を提示。側から見たら事案案件のこの光景を、少しでも和らげようと試みる。

「……」

「お、おお、それにしたのか。確かにこれ、いい匂いだな、あはは……」

「……」

「はは……は……」

「……」

「……」

やばい！めっちゃ気不味い！会話がツヅカネエ！？

どうしよう。今までに無いパターンだ。これがマリイやサイトウの野郎だつたら、終着点何処？っていうほど馬鹿みたいにトークが続くのに。

今のだつて、保湿クリームらしき物を指差ししただけだぜ？

なんでこいつ一言も喋んねえんだろう。首振るか、表情変えるか、指差しかの三択しかないじやん今んところ。

ニコニコ微笑んでこつち見てくれるのはありがテエが、オレが欲しいのは笑顔じやねえ、声なんだよ。

ああああマリイイ通訳早く、早く戻つてきてくれえ

「……」

「……あ？…どうしたニット帽。手エ突き出してきて」

そんな事を心の中で叫んでいると、俯いていた視線の先に白い掌が映し出される。顔を上げれば、物欲しそうな顔でオレに腕を突き出してくるニット帽。

意図が分からない。なんだつてんだ？

「……、……」

「……？そこの試供品クリームがどうしたよ？」

「……ツ、……」

「……あ、……あ？…なんだ、手につけたのか？良かつたじゃねえか、タダでケア出来たな」

「……！……！」

「ええなんだよ怒るなよ、なんだつてんだ…？」

送られてくるジエスチャーを辿々しく読み取ると、どうやらニット帽は試供品のクリームを使つたらしく。

しかしいまひとつで何かが伝わらないようで、膨れつ面を向けてくる。それがなんだかホシガリスに似てて、ついついほつペを両手で挟み込んでしまつた。

フニヤツとした顔になるニット帽。磁器のように綺麗で、柔らかい肌はいつまでも触つていたくなる。可愛いな。ロトフォンに撮つてもらおうかな。

「……！……！」

「あつはつはー！すまねえすまねえ、ワザとじやねんだ。本当だぜ？」

「……ツ！」

「わふつ！」

ポカポカ殴つてくるニット帽の頭を笑いながら押さえていたら、しひれを切らした彼女の不意を突いた一撃が鼻に優しく直撃する。

同時に鼻腔を殴りつけるフローラルの香り。試供品クリームか。とてもいい匂いだが…ああそういう事。

「匂いを嗅げつてか」

「……！」

ブンブンと首を振つてゐる。正解かよ。随分と長い戦いだつたぜ

：

「……！」

「左手は違うの付けてんのな。はいはい、どれどれ…」

こつちもこつちもと強請るように左手を突き出してくるニット帽の手を柔らかく掴む。

そのまま彼女の背に合わせて少し屈み、顔へと近づけて…うん、甘い香りがする。

「いいんじやないか？オレアさつきのやつの方が好きだけど、どつちもニット帽にやぴつたりだ」

「……！」

「おお、そんなに喜ばんでも…あくまで嗅覚の鈍い野郎の意見だぜ？こういうのはマリイとかに聞いた方がーーー」

「呼んだ？」

「——ちょうどな」

あまりにもニット帽が嬉しそうにしているので、謎の申し訳なさが首筋を垂れてくる。

こうなつてくると保険を掛けたくなるのが極東人。自分なんかより、○○に聞いた方が良い、という決まり文句を吐こうと。

した所で、トンツ、という衝撃と共にやつてくるガキ特有の柔い温もり、背中にマリイが飛び乗つてくる。

めつちやびつくりした。いつの間に後ろにいたんだ…？気配全く感じなかつたんだが。ガキも中々侮れねえぜ。

「で、なんの話ばしとつたと？」

「ああ、ちよつとニット帽のことだな。試供品のクリームを塗つたらしいんだが、お前はどうちが良いと思う？」

「アクサキはどうちが好いとーと？」

「またオレかよ…オレア右手についてるやつが好きだな」

「ふーん…ま、マリイも右ん方が好いとーな。こつちん方が匂いが自然でしつこうなかし。よう分かつてんばいアクサキ、流石やなあ。マ

リイもついでに買うところ

なんか褒められた。悪りい気はしねえが、ホントかよ。からかつてるだけじやねえのか？

「因みにお前は何処行つてたんだ？お陰でこつちやあ弾まないトークでキヤツチボールしないといけなかつたんだが」

「ユウリがもうちよつとみたいつていうけん、先にレジ行つとつたんや。もうみんな待つとーばい。早う行こう」

「マジかよオレたちが最後か。そりやすまなかつた」

「なんだ、マリイ先に買つてたのかよ。ちょうど入れ替わつた感じか？ニット帽にはもう少し早く伝えて欲しかつたが、まあしゃーなし。待たせるのも悪いし、さつさと行くか。

「……」

「うん、バツチリ撮れたばい。もうそげん風にしか見えんぐらいに。御伽噺んワンシーン、お姫様ん手ばとる王子様やつた。うん、ちゃんと送るね。どうしえ今晚使うやろ？何度も保存と保護掛けときんしやい。いやとなつたら、これで…ふふふ…近か未来、使う事になりそうやけど。うん、うん、こげんラインギリギリん事してしまうんも、全部アクサキが悪かつちゃもんね。ふふつ、アソツには、覚悟してもらわな。子供やけんつてねぶつとーと、足元掬わるーつて事ば」

「…………なんだろう。凄い取り返しのつかない失敗をした気分だ。悪寒が…！」

「ふう…今日も疲れました…」

強い西日が制服を照らし、朱色に染めていく。ダラダラと汗がワイシャツに染み込む感触を不快に思いながらも帰路につき、ついついそんな弱音が漏れた。

いけないいけない、こんなことで根を上げるなんて、修行が足りて  
いない証拠だ。

私はジムリーダーを務めさせて貰っているが、一応学生の身分だ。  
単位制の学校であり、私は全て単位を修得済みなので、普段は行か  
なくとも良いのだが、今日は学校の創立記念日。

我が家校きつての才女として、何か一言話してくれないかと校長先生  
に頼まれてしまつては、断るに断れない。

今日は一日オフだつたので、アクサキさんとスイーツバイキングで  
も行きたかった。  
残念でならない。

それに：

「今日、私の誕生日ですし…」

別に、本格的に祝われることは思っていない。もうそんな年齢じやな  
いと、私が一番分かっている。

まあそもそも、本格的に祝われた記憶も、ケーキのローソクを消し  
た記憶も、私には微塵もないのだが。

でも…でも、まさか誰もおめでとうと声を掛けてこないとは。

学校に行つても、ジムリーダーはどんな感じだ、誰々とは会うのか、  
など職務に関しての話題しか話されない。

下駄箱を開けてみればいくつか紙を入れてあり、机の中にも同様  
だつたのだが、内容は大体察する事ができた。

案の定確認してみれば、熱く甘い言葉で綴られたものから鋭利で冷  
たいものまで。今日は後者のほうが多かつた。

ロトムフォンを確認しても、事務的な連絡か迷惑メールの一択しか  
ない。母も父も、一週間前に話した事だけが記録されている。

「……入つてる訳、ないですよね…」

スクロールして、上方にやつてくる項目を眺める。一番使用回数  
が多いチャット欄、アクサキさんの連絡先だ。

そこにも新しい情報は特になく、少し期待していた自分の浅ましさ  
と情けなさに気分が沈む。くる訳がないと分かつていて筈なのに。  
だつて、彼は私の誕生日なんて知らないのだから。

「ケーキでも、買つていきますか？」

ふと目についた売店のショートケーキを包んでもらう。自分で自分の分の誕生日ケーキを買うなんて、途方もない虚無感が足を掴んでくる。

が何もないよりは精神衛生的に良い。日頃の修行のご褒美という事にして、付き纏う負の感情を振り払う。

今日はこの後、確認しなければいけない書類がある。

それにチャレンジヤー情報の整理に、コート整備と…とにかく、ジムリーダーとしての業務、しつかりと気を引き締めなければ。

「失礼します。只今戻りました。今日の業務はどのくらい進んでいますでしょうか」

そんな事を考えていれば、あつという間にジムの前だ。いつものサイトウの仮面を貼り付けよう。疲れている身体に鞭を打ち、背筋を伸ばして中へと足を進め。

『ジムリーダーサイトウ、お誕生日おめでとう!』

「――あ、へ?」

思わず、間が抜けた声が漏れた。

視界に映るのは、クラツカ―と思わしきテープと紙吹雪、そして笑顔で私を迎えてくれる前半ジムリーダー組と、いつも共に働いているジムトレーナーにスタッフ達。

紙と音のカーテンが晴れた先には、誕生日おめでとうと書かれている横断幕に、折り紙やリースで彩られた待合室が広がる。

元々備えられていた机の上には飲み物と料理が所狭しと並んでおり、真ん中にはワンホールのチョコレートケーキが。追加でパイプ型の机が組み立てられているほどの豪華さだ。

小さい頃、密かに夢見ていた光景が、そこにはあった。

「あの、これは…一体…?」

「決まってるじゃない、貴方の誕生日会よ。サプライズでね」

「ほら、以前サイトウくん、誕生日会を経験した事がないと言っていただろう？君は今年でジムリーダー就任3周年だからね、何処かで祝おうとは思っていたんだ。ちょうど良かつたよ」

「さあさあ、僕んとこの野菜と、ルリナさんとこの幸でたんまりと料理を作つたからなあ。主役さま、いっぱいお食べえ」

「ぼ、僕も、その、手伝いました…！飾り付けとか…」

脳が処理出来ずに固まる私に、ルリナさんが、カブさんが、ヤローさんが、オニオンさんが。

それぞれ思い思いのことを話して、私を労ってくれる。

「俺達もいるんだぞ！」

「……！」

「ふん…」

「貴方達は…あの時のチャレンジャー…に、妹さん…」

「なに、きちゃや悪か訛？別にアクサキに言われてきただけやけん。アクサキン料理食べたかけん残つとーだけ。勘違いしえんで」

「いえ、別にそんなことは…その…貴方が私の誕生日などに来るなんて、予想外でして…あ、ありがとうございます…」

「…勘違いしえんでつて言いよーんに、アンタんことなんてなんとも思うどらんけん！そげん急にしおらしゅうなられたっちゃ、違和感しかなかけん！フンッ！」

更には、かつて戦つたチャレンジャーの二人に恋敵まで、わざわざ。言い様も表せない感情が胸を満たしていく。目頭が熱い。気を緩めれば決壊しそうだ。目を擦り、意地でも止める。

先ずは、お礼を言わなくては。煌びやかに飾られたこの空間を、所狭しと置かれた料理の数々を、私の為に作つてくれた皆さんに。情けない姿を見せる訳にはいかない。

「皆さん、今日はーーーあむ！」

それらの感謝を伝えようと背筋を正して、口を開ーーーいたところに、何かを投げ入れられる。

一口大のそれはしょっぱい味付で、カリカリと、尚且つ噛めば噛

むほど肉汁が溢れ出してきて…これは、から揚げ、というやつでしょ  
うか…？

「凄く美味しいです…が、ルリナさん。話そうとしてる人の口に突つ  
込まないで下さいよ…」

「貴方が堅つ苦しい事言おうとしたからよ。あと、アクサキから伝言。  
『後は適当に確認してハンコ押すだけだ。飯は熱いうちに食えぶつ飛  
ばすぞ』だつて。アイツつてば誕生日会で主役が来る前に帰つたりと  
か、馬鹿みたいに空氣読めない癖に、変な所で気が回るんだから。こ  
の料理だつて、アイツが作つたのよ？中々憎めない男よね」

「いやあまさかアクサキさんがジムの書類仕事できるとは思いません  
でしたよ。てつきり今日は八時九時辺りまで残業かなと思つてまし  
たが、すっかりと終わつてしましました。思い出しただけで笑えます  
よ。『アイツのことだから空氣読まず仕事しようとするに決まつて  
る。貸してください、オレも手伝います』なんて。まじアクサキさん  
ツンザキさんだわあ」

「アクサキさんが、そんな事を…」

素直じやない彼らしい言葉。素直じやない彼らしい行動。

素直じやない。けど、とても優しい、彼らしい全て。

嬉しい。嬉しい。彼が、私の誕生日を祝つてくれた、喜びが、それ  
だけが胸を渦巻く。

ただ、欲を言わせて貰うなら…今この場で、彼と会いたかつた。

「なに残念そうな顔してるんですかりーダー、そういうのはもう  
ちよつと隠してくださいよ！さ、早いとこ始めちゃいましょう！私、  
お昼からなんも食べてないんです！彼の言う通り、熱いうちに堪能し  
ちまいましょうよ！はい、コップ持つて！」

「…はい…ありがとうございます…！」

だが、これ以上を望むのはワガママに他ならない。足るを知れ、サ  
イトウ。今はこの幸せを享受しよう。

オレンジユースが並々と注がれたグラスを持つ。日線を上げれば、  
微笑みながら私を待つ皆さん姿。その光景に今度こそ姿勢を正し、  
辿々しく喉を震わせる。

「か、乾杯……」

『乾杯〜!!』

文字通り、夢のような時間が始まった。

美味しい料理、心を揺られる喧騒、温かな光り輝く空間。

今まで修行や職務に半生以上を費やした私にとつて、ちよつぴり刺激の強い時間を過ごした。

ジユースを飲むほど、ケーキを食べる程…この空気に包まれば包まれるほど、母や父の顔、修行やジムリーダーの責務が脳裏に過ったが、それでも…

それでも、楽しかつた。人生で、経験した何よりも。

失礼ながら、ジムリーダーに就任した時よりも、歓喜が私を包み込んだ。押さえ込んでいた、幼い私が両手を振り上げている。なにせ、こんなにも素晴らしい宴に加え、プレゼントまで用意してくれていたんだから。

「ラテラルタウンは日差しが強いでしょお。道着姿のサイトウさんも素敵じやが、やつぱり女の子だもん。きっとこれが似合うと思うんだなあ」

「女は髪が命よ！私も潮風に晒されるから、ケアはしつかりしてるの。ここは空気が乾燥してるし、貴方はそういうの気にしないから、ほら。いい匂いでしょ、これでアクサキを墜しちゃいなさい！」

「二人に比べて華のない品になつてしまふけど、僕からはこれを。このメーカーのタオルとリストバンドは肌触りがよくて、質が良いんだ。この町は暑いからね、沢山汗をかくだろう？サイトウくんも、気に入つてくれると嬉しいな」

「ぼ、僕からは…これを…その、ホップさんと、一緒に買つたんです。最終的に選んだ、のはアクサキさんだし、殆ど払つて、くれたのもアクサキさん…なんんですけど…や、役立ててくれると嬉しいです」「ちからのハチマキと迷つたけど、アクサキがこっちがいいっていつたんだぞ！サイトウさんは被弾覚悟のバトルスタイルが多いからつて！アクサキつてば、流石だぞ！よくサイトウさんの事を見ているんだな！」

「…………！」

『私からは保湿クリームを、ここら辺は乾燥していますから。あと負けまぜん』つて言うと一ぱい。良かつたじやん  
アクサキがよか匂い買つて言うとつたやつよりしつかりしとーよそれ。  
おめでとうあーデート楽しかつたなう次はどこしゃい連れて行つ  
てくるーんやろアクサキつたら』

ヤローさんからは麦わら帽子を。

ルリナさんからは美容シャンプーを。

カブさんからはハハコモリ印のスポーツタオルとリストバンド。  
オニオンさんとホップさんはきあいのタスキ。

ユウリさんと妹さんは保湿クリームを。

それぞれの有難いお話と共に（妹さんはちようはつを打つてきただが  
デートとか聞いてない）それらを胸に抱く。

私は十分すぎる代物の数々、満ち足りているとは、正にこの事だ。  
これで満足しない人がいたら、それはただの強欲。忌避すべきもの。  
忌避すべき：ものなのに。

まだ、物足りないと思つてゐる自分がいる。

「ふう…少々、熱くなりすぎました…」

重くなつた身体に昂つた気持ちを引き摺りながら、家へと続く夜道  
を歩く。先程お開きになつた宴会に後ろ髪を引かれ、多幸感に酔つて  
いる感覚がむず痒くも心地よい。

それと同時に、夜風が私の心底を掬い上げる。

あんなにも素晴らしい時間を提供して貰つたのに、なにがまだ物足  
りないのだろうか。ボンヤリと光る街灯を潜り、自問自答。愚問だ。  
答えなんて、とつくに分かっている。

アクサキさんに会いたかつた。

たつたそれだけ。たつたそれだけのワガママが、あの素晴らしい時  
間にしこりを残してしまう。

それがどれだけ未熟で、浅ましく、馬鹿げた事か、理解はしてゐる。  
してゐるが、だからといつてこの溢れ出でくる欲の対処方を私が知つ  
てゐる訳がない。

膨らませ続けた風船はやがて割れ、二度と戻す事が出来ない。

私は欲の味を知つてしまつた。今まで押さえつけられてきた反動が、うまくガス抜きが出来なかつたツケが、ここで回ってきた。はやる気持ちを抑えられない。

彼の胸に飛び込みたい。

彼の頬を触りたい。

彼の温もりを、全てを感じーーー私のモノにしたい。

今からでも会いに行つてしまおうか。

そして、そのまま欲望の獣に身を任せてしまおうか。

そんな考えが浮かんできた自分が情けない。パシリと自分の両頬を叩く。鋭く伝わつてくる痺れが私の思考を晴らしてくれる。

落ち着くんだ、サイトウ。足るを知ろう。アクサキさんに教えて貰つた言葉だ。実に良い語録だと、感心したじやないか。

満足を知れば、心が豊かになる。豊かになれば、心に余裕が生まれ、心身を鍛え上げる力となる。

なに、明日からはジムチャレンジがあるんだ。その時に、彼の事を堪能すれば良い。

そう結論付け、絡まつた胸の内にクリアスモツグをぶつけたところで、マンションへと辿り着く。考え方をしていたから、あつという間についてしまつた。

番号を押し、管理人さんにロツクを解除してもらう。そのまま見慣れた通路を通つて、自分の部屋へとーーー

「あ、ちよつと待つておくれジムリーダーさん。渡すものがあるんだ」「…？ 私に、ですか？」

向かおうとした所で、管理人さんに声を掛けられる。管理人さんはゴソゴソとフロントの棚を漁つて目当てのもの、小洒落た紙袋を取り出すと、カウンターに置いた。

…まさか管理人さんまで私にプレゼントを用意してくれたのだろうか。そんな訳ないか。

「あつたあつた、はいこれ。さつき黒い帽子を被つた傷だらけ男の子が来てね、ジムリーダーさんが帰つてきたら渡して欲しいって頼まれ

たんだ。確か…アク、アク…なんだつけかな…」

「黒い帽子に傷だらけ…あ、アクサキさん…？」

「あーそうそうアクサキだアクサキ！その子がこれを。立場上中身は少し見させて貰つたけど、危険物は確認されなかつたからね、安心して。じや、後はごゆっくり」

そう言つて肩を回しながら控室へと入つていく管理人さん。紙袋を持つ私だけが取り残される。

アクサキさんが…プレゼントを…？

彼からのプレゼントは料理だと皆が言つていたのだが…どういう事だろうか。中身が気になるが、取り敢えず部屋に戻る。

部屋に入つてすぐ、リビングの机へと紙袋を置く。中には包装された箱が入つている。あまり大きくはない。重くもなかつたから、食べ物や小物類でもないだろう。

考えてても仕方がない。さつそく開けようと、箱を取り出し包装の切れ目に手をかけて

カチリ、と。

聴き慣れた開閉音が部屋に響いた。

「―――」

箱の蓋が吹き飛ぶと共に、青白い光が辺りを照らす。

やがてそれは形を取り始め―――1匹のポケモンが現れる。

『―――?―――!』

「―――あ」

思わず、声にならない声が漏れた。

だつて、現れたポケモンは、白いハチマキを巻いたような額に、ふと眉がチャームポイントの拳法子熊。

―――ダクマだつたのだから。

『最近鎧の孤島で確認されたかくとうタイプのポケモンでして、型によつて進化が変わる珍しいポケモンなんですよ』

『ほーん…興味のねえ話だが、なんだ、欲しいのか?』

『それは勿論。私もジムリーダー以前に一トレーナーの端くれ。かくとうタイプの事は気になりますし——なによりいちげきの型はあくタイプになりますから』

『……あつそ……だからって、別に興味なんてワカネエが、ちょっと詳しく聞いてやつても良いぜ?』

先日は話した、彼とのたわいもない会話が思い返される。

日常の一コマに組み込まれた、大して重要でもない与太話だった。常人なら気にも留めず、すぐに忘れられる様な話だったのに。

「覚えてて……くれたんだ……！」

容易ではなかつただろう。わざわざ鎧の孤島まで行つて、苦手なかくとうタイプの事を調べて。

彼が先に帰つた理由を聞いてみれば、「眠いし疲れた」と言つていたそうだ。カブさんが誕生日会を計画していたのが一週間前、つまりマスターード師匠の試練をたつた七日の内に、クリアした事となる。

きっと無理をしたに違ひない。私の為に。寝る時間まで削つて。

身体中を駆け巡る激情に耐え切れず、膝をついた私にダクマが駆け寄つてくる。ニコニコと笑いながら差し出されたその手には、カジツチユ型のメッセージカード。

『大切にしなかつたらぶつ飛ばす。いちげきの型にしなくともぶつ飛ばす』

そう、男の人の字で、ぶつきらぼうに。

「ああ……あの人は……」

あの人は、本当に：一体私をどこまで酔わせてくれるのか。

こんなにも未熟者な私を、どうしてここまで優しくしてくれのか。

ああ、誰かこの感情を抑える術を——いや、教えてくれなくていい。この感情だけは、いつまでも溢れ出しておきたい。

「アクサキさん——大好きですッ!!」

だつて、この体を焦がす甘い熱を覚ましたくはないのだから。

こぼれ落ち、水気を含んだ想いを、目の前のダクマを力いっぱい抱きしめて、高らかに叫んだ。

「…ふう…落ち着きました…ありがとうございます、ダクマ。さて、箱を片付けますか。ダクマのボールも、彼らしい、ダークボールにしたんですね。それにこれは…髪飾りですか。そういえば、最近今のが古くなつてしまつたと彼に話したんでしたつけ…ふふつ、アクサキさんつたら、明日からはどうしてくれましようか…ん?」

なんでしょうか、底に、まだ何か…――

【極薄！シルクカンパニー製0.001ミリ〇〇ドーム！】

「――シイツ」  
――走つた。

「まつたく…あの人は本当に時間を守らない。一体なにをしているのやら」

ぺたりぺたりと質感の良い音を響かせながら、仄暗い廊下を歩いていく。向かう先はチャレンジャーの控え室。予定時間になつても出てこないアクサキさんの様子を確認するためだ。

足の裏から伝わってくる冷気に、ジムトレーナーにお願いすれば良かつたですと僅かながら後悔。

しかし折角の密室で二人きりになれるチャンス。ただでさえ彼に擦り寄つてくる泥棒猫が多くなってきた昨今、機会を無駄にしたくなかつた。

灯りが漏れ出す扉が見えてくる。微かながら人とポケモンの気配も感じられた。

一応、病かなにかで倒れていないか心配だったが、これなら杞憂に終わりそうだ。彼の優秀なポケモンなら、彼の異常に気付かない訳があるまい。

きっと彼のことだ。作戦を練るのに熱中しすぎて時間を忘れたのだろう。

私のことを考えながら頭を捻っている彼を想像すると、中々にくるものがある。可愛い人だ。今日も存分に愛し合うとしよう。

「アクサキさん、何をしているのですか。開始予定時間はとつぐに過ぎてますよ。早く準備をしてくだ…アクサキさん？」

緩みそうになる表情を元に戻し、勢いよく扉を開ける。

果たしてアクサキさんはそこにいた。傍らにはブラッキーが座つていて、特に変わったことはない。

バトル前の、作戦を持ちのポケモンと話し合うトレーナーの姿。

しかし、何やら紙：いや、写真のようなものをジッと見つめていた。此方に気づいた様子はない。それほどにそれへと意識が入り込んでいた。

そつと近づいて、後ろからそれを覗き込む。はしたないが好奇心が

抑えられなかつた。

それは、相当昔に撮られた写真であつた。

古ぼけたフィルムに写つていたのは、三人組の幼いトレーナーと、その相棒らしきポケモン達。

真ん中で笑つているのは恐らくアクサキさんだろう。頬の傷はないが、それとなく今のアクサキさんの面影を感じられた。彼の足元で座つているブラツキーも少し若く見える。

彼の両隣にいる二人は、アクサキさんの…同期…だろうか？

一人は少年で、もう一人は少女。

男の子は落ち着いた表情で、女の子は元気溌剌な笑顔で写つている。ポッポやミルタンクを従えた彼らは幸せそうな顔をしていた。

「可愛い顔してるだろ。タンバでシジマさんに勝つた時の記念写真だ」

「…氣付いていたのですか」

「ブラツキーが教えてくれた。それまではわからなかつたけど、よ」

不意にアクサキさんが言葉を発した。此方に一瞥もくれず、淡々としたそれらを写真と共に投げてくる。

慌てて受け止めた写真はやはり色褪せていた。雨粒が落ちたような跡が付いていて、シワが目立つ。

片時も離さなかつた、そんな年季が感じられた。なんとなくそれが氣に食わない。

「随分とこの写真に思い入れがあるようですね。少なくとも、私とのバトルの時間を忘れるぐらいには、価値のあるものなのでしょうか」「意地悪な質問すんなよ、悪かつたつて」

そう言つて彼はブラツキーをボールに戻す。よつこらせと腰に手を当てながら立ち上がり、そして漸く此方を見た。普段と変わらない。

不敵な笑みを浮かべ、その頬には鋭い裂創が走っている、いつものアクサキさん。

「今日こそはテメエに勝つぜ、筋肉ダルマ。オレの考えてきたスペシャルな作戦で、ボツコボコのボコにしてやらあ」

そう言つて、親指を下に向けて首を搔つ切るジエスチャーをする。

そんな彼の顔を見て、何故か動悸がした。

なにか、決定的なものを見逃している気がする。

ここで動かなければ、もう届かなくなる。そんな気が。

自分でも処理が出来ないような不安に襲われた。

「——ああ？」

だから、アクサキさんの手を取つてしまつた。

理由はない。ただ、グラウンドに向かおうとしたアクサキさんの手首をワシボンの如く、逃さないように、縋るように、掴んでしまう。

怪訝そうな顔で振り返るアクサキさん。俯いている私を心配そうに覗き込んでくるその姿に、喉が詰まる。言葉が出ない。思考に渦が生まれる。握る手に力が入る。

何を言えば良いのだろうか。何をすれば良いのだろうか。そもそも何かをする必要はないのではないか。

ただの私の考えすぎで、実際アクサキさんにはなんにもないんじやないか。

分からぬ。分からぬ。悔しい程に分からぬ、が。

部屋に入った時に一瞬だけ見えた、頬の傷をなぞる動作。

何かを噛み締めるかのように、ゆっくりとなぞつていくあの動作が。

アクサキさんにとってどんな意味を持つのか。

いくら修行一邊倒の無能な私でも、それぐらいは分かつていた。

「——なあ、サイトウ」

顔を上げる。眼前に、優しい目をしたアクサキさんが広がる。

彼は真っ直ぐと私を見つめながら、穏やかに声をかけた。

「テメエはさ、ポケモンバトルは好きか?」

唐突な質問。場違いにも程があるそれに、意味を図りかねる。

「それは、どういう」

「答えてくれ」

だが、アクサキさんの目は本気だった。いつもみたいにふざけて揶揄からかつっている訳ではない。

黒いのに、純白な瞳で私を射抜いてくる。引き込まれそうだった。「それは勿論、大好きですが。私の存在価値の一つですし、私をより高みへと連れて行ってくれる。そして何より…。ポケモン達と一緒になれる気がしますから」

腰にかけたボールが揺れた。それを見たアクサキさんは目を細める。

そしてそのまま、出口へと歩いていく。

「オレもだ、サイトウ。オレもポケモンバトルが大好きだよ」

扉の取手を握る前に、振り返る。不敵な笑みを浮かべながら、犬歯を光らせて。それがとても蠱惑的に映った。

「それだけでいい。それだけでいいさ。今は、ただただ戦おう。遅れた分際で何を言つてやがると思うかもしけれねえがな」

オレ達は、ポケモントレーナーなんだから。

「目と目以外で語る必要はねえ。テメエみたいな生意気な小娘に心配される程、このアクサキ様は弱くはねえのさ」

そう言つて、今度こそ部屋を出て行つてしまつた。

発破を掛けられたのだろうか。確かにジムリーダーとして、バトル前に雑念に囚われてしまうことは良くないことだ。気を引き締める。引き締めようとするが…やはりダメだ。脳裏からあの姿が離れない。

い。

アクサキさんは強い人だ。バトルも心も強い。

他人やポケモンを思いやれる。落ち込むことはあれど、決して根底にある弱さを人に見せない。人間が出来ている人だ。

だが、それでも心配だった。寧ろ、それが心配だった。

廊下に出る。遠くにアクサキさんが歩いている。その背中を見て、

思つてしまふ。

——どうして、そんなに寂しそうなのか

苦しくて、悔しい。が、私には、何も出来なかつた。

「また負けた…」

一体、いつになつたら勝てるのだろうか。

時刻は八つ時を優に回り、黄昏が世界を覆う、そんな中。  
寒風に背中を押されながら、とぼとぼと暗いオレンジの道を歩く影  
法師がひとつ。アーマーガアの鳴き声が空に響き渡る。

皆んな大好き、あくタイプ使いことオレ。アクサキだ。

今日も今日とて、あくタイプの貴公子たるオレ様はサイトウの野郎  
に勝負を挑み、フルボッコにされちまつた。今はその帰りである。  
「今日も負け。昨日も負け。一昨日なんて、半分もサイトウのポケモ  
ンを倒せなかつた。どうなつてんだチクショウ…」

先のバトルを思い出す。

こうそくいどうを捕らえられ、ほのおのパンチで吹き飛ばされる  
ニユーラ。

リーフブレードとからてチョップの激しい打ち合いの末、壁に叩き  
つけられるダー teng。

ビルドアップをつんだ攻撃に、サイコカツター諸共ねじ伏せられた  
コマタナ。

手数にいなされ、狂わされて、単調になつたクラブハンマーにカウ  
ンターを合わせられたシザリガー。

サイコキネシスで三体も擊破してくれたが、蓄積ダメージに耐えき

れず、インファイトに沈んだブラッキー。

決して成長を実感しない訳じやない。出会った当初に比べれば、変化技への理解も深まつたし、的確な技の指示も出来るようになつて來た。

確かに負け続けてはいるが、無価値な敗北ではない。昨日のオレより弱くなっていることだけはないと、あの野郎からも折り紙付きだ。

奴にそんなフォローをされるのは気に食わないが。

澄まし顔で、オレのポケモンを薙ぎ倒すサイトウが脳裏に過ぎる。「そう思うと、サイトウの野郎もしつかりジムリーダーやつてんだけなあ……」

なんて、街灯に居座るランプラーを眺めながら感傷にふけつてみたり。

昨日のオレより弱くなっていることだけはない。

それはアソツがオレに掛けてくれた言葉。ジムリーダーとして、チャレンジャーに贈る、激励の花束。

チャレンジャーの壁となるように。糧となるように。ルリナパイセンが言つていたこと通りに、ジムリーダーの職務を全うしている。でももし、それらを投げ打つて、純粹な感想を述べるとしたならば。きつとその後にこう続くのだろう。

だが、強くなっている訳でもない。

頭打ち。キヤパシティオーバー。

詰まるところ、オレのやつていることは現状維持。

なんとも優しい野郎だ。そこはかとなく実力の限界を伝えてくれるなんて、身に滲み過ぎて心が痛くなつて来やがるぜ。

何度も目かもわからないため息が零れ落ちる。

もう、奴を倒さずに何ヶ月経つただろうか。オレもすっかりこの街の顔馴染みだ。

今も、ガキどもがバイバイと手を振り、おっちゃんが辛氣臭い顔すんなとオレンのみを投げつけて来やがる。

最早、目を瞑つても、この乾いた橙の景気を思い浮かべる事が出来る程には。

少し、長くここに居座り過ぎちまつた。

「何がいけねえんだろうな…いやまあタイプ相性が悪いってのは百も承知なんだが…」

オレンのみをかじりながら、はあ…と、ため息が零れ落ちる。思考を元に戻す。

そうだ、そんなことは百も承知なんだ。あくタイプがかくとうタイプに不利な事ぐらい。何年トレーナーやつてると思っていやがる。問題は、そんな事がわかり切った上で負け続けているという事だ。オレたちみたいな、一つのタイプないし類似タイプしか使わないつつトレーナーは、タイプ相性不利を言い訳にする事はできない。そりやそうだ。一つしか使わないのなら、自ずと一貫した弱点というものが現れるのは道理である。

タイプ複合型パーティ―が強いと言われる理由は、一重に弱点一貫性を排除できるという点に他ならない。

しかし、では何故今までタイプエキスパートは衰退せず、本格的な複合型パーティ―はあまり盛り上がりを見せないのか。

単純な話、それが一番効率的で、比較的誰にでも手を付けられる難易度だからだ。

やる前からわかり切つた、一貫した弱点があるのなら、対策を重ねて徹底的に対処すればいい話である。

あくタイプしか使わないのなら、かくどう、むし、フェアリーに気をつけて、対策を立て特訓すれば良い。

言うは易く行うは難し。そんな一筋縄でいくものでもないが、少なくとも複合型パーティ―よりかはマシだ。

あれは弱点をカバーし合える反面、対策すべき弱点そのものが増える。まず育成が大変だし、金もかかっちゃう。

あんなものを上手く扱えるのは上位トレーナーのほんの一握り程度。それこそチャンピオンそこらの実力者だけ。

タイプエキスパートが弱くない事はジムリーダーや四天王、それこ

そサイトウ自身が証明している。

長々と話してしまつたが、詰まるところ、何が言いたいかというと

⋮

「オレが弱いだけなんだよな…とほほ…」

それに尽くる。ただそれだけの話だ。

オレが弱い。ポケモンは悪くない。ポケモンの力を十二分に發揮させる事が出来ないオレが悪い。

オレには、決定的な何かが足りない。

「挙句の果てには、『もう一度、ヨロイ島で特訓をしましよう。貴方はあともう少しで貴方を超えられます』とか言われてチケット渡されし：なんでこれペアチケットなんだよ。あの野郎も行く気か？ そういやダクマの進化がどうたらこうたら言つてたな…」

暗くなってきた空に貰つたチケットをかざす。紛う事なき、ヨロイ島行きのチケット。

期限は明日から一週間ほど。つまり今日中に荷物を準備しなければならない。

急すぎる。もしこれが初めてのヨロイ島だつたら突っぱねてた。まあ、もう用意出来るんだが。

ニット帽やマリイも誘つてやろうか。

ゴースト仮面やルリナ・パイセン達のお土産はどうしようか。

兄弟子や姉弟子、師匠の皆は元気だろうか。

サイトウの野郎はきっと修行で手一杯になるだろう。何か差し入れるものも準備してやるか。

「…なんて」

ホイホイ言われるままに行こうとするオレは、相当毒されてしまつ

てるんだろうな。このガラル地方に。

軽くなつた足取りを見て、思わず嘲笑えみが溢れる。

何ヶ月経つただろうか。勝てない勝てないと、それをいい事に建前を掲げて、理由を作つて。

居心地の良さを覚えたここに滞在する様になつてから、一体何ヶ月経つただろうか。

いつからだ。早く次の街に行つてやると、さつさと奢つた分返せと言わなくなつたのは。

条件付きのバトルを快諾し、楽しむようになつたのは、いつからだ。見切りが付いたなら、感情が重石となる前に、友情も義理も何もかも捨てて、次の場所へと行く。

そうやつて、ジョウトもカントーもホウエンも、制止の声を振り払つて飛び出してきた筈なのに。

「…そろそろ、潮時…か…」

くさ。みず。ほの。お。

一向に埋まらないバッヂリング。いくつも重なつた古ケース。鈍く光りを放つ。

どちらにしろ、もう長くはない。この時間は、やがて終わりを告げる。

忘れられがちだが、オレは旅人だ。旅人が、別れを惜しむ事はあれど、悲しむ事はない。

だから、だからせめて、せめて、今だけは。

ポケットから、もう何年も使い古されているポケギアと、二枚のチケットを取り出す。

「ハハッ…情けねえ…」

諦める、という言葉が大嫌いだつた。

自分にはもう無理だという奴に反吐が出た。

お前には出来やしないという奴に虫唾が走つた。

どんなに命中率が低い技だつて、撃ち続ければいつか当たるのに。

走り出すことさえしない人生に何を見出せるのか。

なんとまあ、要領の悪い人生だつた。

思えば、笑つてしまふような考え方を掲げた青いガキの頃のオレ。母さんみたいにいじつぱりで気持ちの良い子だなど、呆れ顔の親父にく頭を撫でられた事を思い出す。

光に這い寄らない闇など、価値はない。

勝とう。どんな無様を晒そうとも。諦めない。

出来ない事なんて、何もないんだ。この世は可能性に満ち溢れてい  
る。

そんな信念を胸に刻んで、この道を走り続けた。

走り続けたんだ。

幾日も幾日も。

走つて・走つて・走つて、走つて、走つて、走つて、走つ  
て走つて走つて走つて走つて走つて走つて走つて走つ  
て走つて走つて走つて走つて走つて走つて走つて走つ  
て走つて走つて走つて走つて走つて走つて走つて走つ  
てやがて靴が擦り切れ、爪が割れ、足の皮が破れて。

歩くことも叶わず、身体を支える事も出来ず、膝から崩れ落ちてしまつた時。

気付いてしまつた。

オレというものの運命に。オレというものの結<sup>エンディング</sup>末に。

最初は抗つた。そんなものに呑まれてなるものかと、みつともなく足搔いた。見て見ぬふりを続けたよ。

振り向けば確実に、現実は嘲笑わらつて此方を見ているのに、前だけを見ていた。耳を塞いだ。

気付けば己には無数の傷痕が刻まれている。

今更止まり方なんて知らない。引き返すなんて選択肢取れない。だから、いつかゴールに辿り着けると信じて。

でも…でも。

やつぱり。いくら歩いた所で、景色が一つも変わらないんだ。周りの奴らが頂きへと続く道を進んで行く、その背中を。ただ眺めてことしか出来ないんだ。

心の底から沸沸と湧き出てくる、くろいヘドロ。

それが徐々に身体を蝕み始めた時、ああああ氣付いたよ。気付いてしまったよ。

気づいちまつたからこそ。

『——全身ツ全靈!! もう、全て壊しましょうツ!!』

滾る熱気。唸る闘志。痺れる空気。

そんな様々エネルギーが飛び交う、泥臭く愛らしいこの戦場で。悠々と、力強く咲き誇る菜豆の花に。

——魅せられちまつたオレがいた。

認めよう。これ以上長く居れば、テメエに絆されちまう自分がいることに。

光に這い寄るのは闇の道理。あく眩しくて、目を瞑つちました。こんなオレにも、通すべき筋つてもんがある。

さあさあ、英雄様。正義のヒーロー様。

戦おう。闘おう。骨の髄まで。全てが壊れるまで。

オレが対価として懸けるのは<sub>カード</sub><sub>バッヂ</sub>矜持と命

ダラダラと伸びる展開は好みじゃない。何話までも引き伸ばしにされるシナリオなんてクソ食らえだ。

ヤルなら一瞬。ランターンに翳された夜道の如く、潔く。

その覚悟が、他でもねえ。テメエのお陰で決まつたんだ。

「ちょうど良いのか悪いのか…まつたく、無駄金叩いちまつたぜ。オレも明日が楽しみで楽しみで仕方がねえよ、バーク…はあ…キャンセル代いくらかな…」

沸々と煮えたぎるこの想いのせいだろうか。

零れ落ちたため息は白くたゆたい、虚空へと霧散した。

オレはあくタイプが大好きだ。

何故あくタイプが好きなのかと問われれば、軽く半日は語つてしまふ程、オレはあくタイプを愛している。

あくタイプと聞けば、人によつて顔を顰める人もいるだろう。

が、少し待つて欲しい。『あくタイプ』という五文字だけで、あくタイプの全てを判断するのは、あくタイプ使いとして許せないものがある。

そんな、最近サイトウに旅の話をしてやつたら何故か不機嫌になられたあくタイプの代名詞ことオレ。

「おかしいな？ 聞いとつた話と全然ちやうんだけど  
「きつちりと説明して貰いましょうか？」

「アクサキ…お前つて奴は…」

「あの…その…」

何故こうなつた。

睨み合う三人の言葉に、ある種の悪寒が背筋を掛ける。武道場の空氣は冷えに冷え、心なしか、潮の香りが強くなつた気がした。喉が渴く。

ここは、ガラル地方の東に位置する、自然豊かな修行の孤島、ヨロイ島。

修行の為にこの島に訪れたオレは今、今世紀最大のピンチを迎えているところである。

誰か助けて。

「……」

「……」

「……」

沈黙が辛い。目線が痛い。

何故こんなことになつたのか。どうしてこんなに空気が重くなるのか。

状況を整理する。

ジムチャレンジから帰り、すぐ様チケット返金の手続きをした次の日。

ヨロイ島へと出発したオレたちは、現地で兄弟子姉弟子の洗礼を受けつつも、なんの問題もなく道場へと辿り着いた。

そこでオレたちを迎えてくれたのは師匠に女将さん、門下生達。

そして、サイトウに誘われる前から元々ココで会う予定だった一ーー同期の二人。

本当に、久しぶりの再会である。

最後にちゃんと会えた日はいつだろう。あまり情けない所を見せないようにしようと気張るも、元気そうな二人を見ると、やはり胸にこみ上げてくるものがある。はやる気持ちを抑えるのが難しい。

そうして、笑顔で駆け寄ってきた二人を素直に受け止めようと腕を

広げた。

そこまではよかつた。

二人が、サイトウが、それぞれを認識するまでは良かつた。  
オレにタックルかます勢いで抱きついてきた同期の一人と、サイトウの目がバツチリとあつた。

空気が凍つた音がした。

そして冒頭へと戻る。出会った途端バチバチだつた。

確かに同期の二人にも、サイトウが来ることを知らせなかつたし、サイトウにも知らせなかつた。

いや、だつて…せつかくだしお互いを紹介するのに丁度良いと思つたんだもん。

地方は違えど、同じジムリーダー。仲良く出来ると思つたんだもん…こんな喧嘩腰になるとは思わないじやん。

因みに伝えなかつた理由はサプライズにしようと思つたから。

ホウレンソウつて大事なんだよ…と引きついた顔で言つてきた兄弟子と姉弟子を思い出す。

なんで急に野菜の話してきたんだろ…言われなくともガキじやあらめえし、栄養は摂つてるわ。

遠くに座つてこちらを見てる二人を見る。せめて助けてとアイコンタクト。師匠は爆笑中であてにならない。

あ、目を逸らされた。

「…まあええか、このままじや埒が明かへんしね。一旦、お互の自己紹介といこうやんけ。ウチはアカネ。一応ジヨウトでノーマルタイプのジムリーダーを務めさせて貰うてる。アクサキとは旅で何度も夜を共にした仲や。アクサキはね、結構寝相が悪いんや。ときどんぼなしに抱きついてくるんやで。それがわりかし強うてね、グツと抱きしめてくんねん。もう二つの意味で眠られへんくなつてまうでね。本人もプリンみたいに柔らこうて気持ちええつて言うとつたし。

それに比べてあんたは…フツ、あんまりアクサキを満足させられそうにあらへんね。顔埋めたら鼻が折れるとちやう? まな板ちゃん?」

冷や汗垂らして黙つているオレを見兼ねてか、同期の一人——アカネがサイトウにそう切り出す。満面の笑顔で、サイトウに手を差し出した。

いやテメなに暴露してやがんだ恥ずかしいから内緒にしろつったのに。よりもよつてなんでサイトウの野郎に言つちまうかな。まあそもそも抱き付き癖のあるオレが悪いんだけどよ。抱き心地はスゲエ良かつた。ミルクの匂いがした。なんでか知らんけど。

サイトウ？ 寝相を攻撃だと勘違いされて殺されそうだから一緒に寝たくねえな。

ピキリ、と音がした。

何の音だと辺りを見回すも、そんな音が出るものは見当たらない。サイトウの野郎が何故か小刻みに震えてるだけだ。寒いのだろうか？ 年中裸足の癖に珍しい。

「同じくひこうタイプジムリーダー、ハヤト。アクサキ一番の相棒でありライバルだ。それだけは譲れない。が、その、なんだ。貴方も苦労してるな。一応、ジョウトの一部ジムリーダーで話し合つた協定にそつて、アクサキは俺らで占有する事となつていて。俺もそれに協力しなければならない。貴方には同情するが……無理は言わない。諦めてくれ」

さらにもう一人の同期——ハヤトも後に続き、クールな微笑を携えながら手を差し出す。

協定？ 何を言つてんだコイツは。コイツはコイツで思考回路がよく分からん時があるからな。

前も空を眺めながら「風になりたい……」とか言つて笑い泣きしてたし。大抵そういう時つてオレが悪いらしいんだけど。なんでや。

またピキリ、と音がする。

再度辺りを見回す。サイトウが珍しく笑みを浮かべている以外、やはり何もない。疲れているのだろうか。

「……これは、これは、ご丁寧にどうもありがとうございます。私もジムリーダーをやつております、サイトウと申します。アクサキンには共に道を歩んでいくパートナーとして、とても良くして貰つていまし

て。最近では…そうですね。2日に1回は掃除に洗濯、食事等の手伝いをしてくれます。これでは押しかけなんとやら、ですね。たつた半年でここまで関係を築くことが出来ました。

今日は来るべき時の予行演習も兼ねていて…おっと、失礼。惚気を聞かされても楽しくありませんよね。配慮が足らず、申し訳ありませんでした」

最後に、差し出された二人の手をしっかりと握つて、ハツキリとサイトウが自己紹介をする。改めて聞くと、オレ、パシリみてえだな。でもなあ、コイツ生活力ゼロのだらしねえ女だからなあ。オレが世話してやんないといけないっていう謎の使命感が出てくんだけよなあ、そんな事してる余裕ないのに。

作った料理は美味しそうに食ってくれるから別に良いんだけどさ。「中々やるやんけ。退屈はしなさそうやな」

「こちらのセリフです。あなた方の傲慢、全て壊してあげましょう」「ぬかせ。吠え面かかせたるわ」

「ああ…胃が痛い…」

相変わらずオレを置いてけぼりにしている気がするが、まあ良い。何はどうもあれ、自己紹介もすんだんだ。さつきまで地獄みたいな空氣だつたが、これで少しは仲良くなつてくれるだろう。

実際、出会つた当初よりかは穏やかな空気が流れている気が…「取り敢えず、マスター<sup>ド</sup>さんにしつかりと稽古をつけて貰わないとな。これ以上いがみ合うと、企画したアクサキが悲しむ」

「む… そうやな、それだけは避けな。命拾いしたね、まな板ちゃん」  
「…まあいいでしょう。アクサキさんとの楽しい修行旅行を、無駄にしたくはありません。あなた方。くれぐれも邪魔をしないように」

…仲良くなるよね?

「頼むぜ兄弟子姉弟子。この道場にいる限り、あんたらの方が上なんだから仲良くするよう言つてくれよ」

「嫌に決まつて いるでしよう、貴方の自業自得ですこの人たらしが」  
「完全に勝てっこない奴ら連れてきやがつてエ…せつかく上玉見つけたと思つたのに、これじゃ無理だなア。サラバうちの春…いや、こつ

そりコイツの食事に盛ればワンちゃん…？」  
だからオレが何したっていうんだよ、チクシヨウ。

「なあ」

不意に、アカネさんに声をかけられた。

ダイキノコを探す手を止め、振り返る。こちらを見ずに、生い茂る草をかき分ける横顔。ついでに揺れる豊満な臀部と胸部が見えた。舌打ちを抑え、返事をする。

「なんでしょうか？無駄口を叩く暇があつたら探してください」

「アクサキ」

「はい？」

「アクサキのこと、どれくらい知ってるんや？」

最初は、心底呆れてしまつた。こんなくだらないことに作業を止めさせるなど。あまりにもマウントの取り方が安直だと思ったからだ。この牝牛もアクサキさんに惚れている。どうせ付き合いの長さを武器に私を牽制しようとでも思つたのだろう。

そんなもの、いくらでも覆る。

量より質なのだ。

栄養が全てその駄肉に行つてるのか？  
すこしはよこせ。

そう言つて、私はアクサキさんとの相思相愛エピソードを語つた。  
30分ほどたつただろうか。主だつた出来事を喋り切つて、どうだと言わんばかりに改めてアカネさんを見た。

アカネさんは、真っ直ぐとこちらを見ていた。

桜色の瞳が私を貫く。

「あなたはアクサキのこと、全然わかつてへん」

予想通りの言葉だつた。

ただ、その重みが違うような気がした。  
喉が詰まる。

「なにが…」

言いたい。  
遮られる。

「全然わかつてへん。上部だけしか見てへん。アイツの本質を見ようとせえへん。強いやつやと勘違いしてる」

「アクサキさんは強い方です。強くて、そして優しい。勘違いなどではない」

「そうやな、優しいで。アイツは優しい。そうそうおらへんよ、あんなええやつ」

アカネさんが天を仰ぐ。昔のことを思い出すかのように、遠い空を眺める。

「でもな、強うはあらへんねん」

そう言つて、立ち上がった。ズンズンと私に近づいて、見下ろす。交錯する。

「そやさかい、アンタには絶対に渡されへん。アクサキにとつてアンタは毒や。一度摑つたらえずき出されへん、甘ーい甘ーい猛毒や。アンタとおつたらアイツの心身ボロボロになつてまう。それも本人すら氣いつかへんうちに」

訳が分からず、訳の分からぬ言葉で罵られる。

——いや、訳の分からぬなどと嘯うそぶくことはよそう。  
とぼける時間はもうおしまいだ。

だつてそれは、紛うことなき事実なのだから。

見ないよう、気づかないように先延ばしにしたものが、今となつてやつてきたのだ。

「ジムチャレンジは諦めてもらう」

特大の利子をつけて。

かりそめの幸せが瓦解する。

「アクサキはさ」

「もう、バトルはやらないのか？」

それは、よく晴れた昼下がりのこと。

ポツポがさえずり、バタフリ―が優雅に飛び交い、キレイhanaたちが踊り出す。

――そんなよくあるジョウトの日常、その一幕。ハヤトとアクサキは、キキョウシティの近くの森の、ひときわ大きな木の上で寝そべっていた。

「…今さつき人のことボコボコにしておいて、なんか言つてらア」「おいおい、拗ねるなよアクサキ。真面目に答えてくれ」

「答えるも何も、質問の意味がわかんねー。眠いから邪魔すんな」「そんなに引き摺るなよ、悪かつたつて」

「…ふんつ」

アクサキはまともに取り合わず、帽子を深く被り直した。

そもそもそのはず。彼らはつい先程まで6対6、フルパーティでの対戦を楽しんだばかりだつた。

結果はアクサキの完敗。

ヘルガ―で攻め、ブラッキーで受ける戦法こそよかつたものの、それだけでハヤトのパーティを突破できるほどの破壊力はない。ヘルガ―と並ぶほどのアタッカーと、それらを支えるサポート役が足りなかつた。

実家から来てもらつたオクタン、イワーク、パルシェン、フオレットスも決して弱いポケモンではないが、彼らは普段は畠仕事に従事している。いきなりバトルで活躍しろと言われても、土台無理な話。

アクサキがハヤトのポケモンを一体倒す頃には、パーティの半分が機能停止していた。

そんな惨劇のクールダウンとして、ハヤトが連れてきたのが街を一望できるこの大きな木の上なのである。アクサキが悪態づくのも無

理はなかつた。まだまだ肉体的にも精神的にも大人と言えない彼は、負けて機嫌が悪いのだ。

「そういう意味じゃないんだがな…」

「はあ？ ジヤ、どういう意味だよ」

「そのままの意味だよ」

「なんだそれ」

そよかぜが吹く。木々を優しく揺らし、木漏れ日がチラチラと柔らかく2人を包む。どこからかサクラの花びらが飛んできて、アクサキの鼻に降り立つた。

とても気持ちの良い日だ。雲一つない晴天。友の門出を祝うにはこの上ない、絶好の日。

挨拶巡りに行つた。思い出を語つた。負けてしまつたがバトルもした。あとは最終手続きをしに行つているアカネと合流して、打ち上げやつて、2人を送り出すだけ。

「しかし、懐かしいな。みんなでジョウト中を巡つたのも、もう3年前か」

「もうそんなにたつたのか」

「早いよな」

「ああ」

「楽しかつたよなあ」

「ああ」

「みんなで色々やつてさ、初めの一歩を踏み出したと思つたら、もう終わつてやんの」

「ああ」

「ガキどももすっかり大きくなつちまつてさあ。特にチョウノとタツタ！ 背だけじゃなくてバトルも一丁前に成長してやがるし、ありや将来が楽しみだな。反抗期に片足突つ込んでたのはちょっと寂しかつたが…」

「ああ」

「それにいつのまにか数も増えてたしなあ。このまま行つたらタイプの数だけ弟妹ができちまつたりして。んなわけないか！ ガハハハハ

！」

「ああ」

「ハハハ…ハ…」

「…」

「…」

それなのに、弾まない会話。空回りする笑い声。これまでの仲がウソかのように気まずい空気が流れ、やがてアクサキは口を紡ぐ。そしてため息を吐いた。

ため息を吐いて、チラリとハヤトに目をやる。

ハヤトは遠くを眺めていた。どこか懐かしい香りが漂つてくる故郷よりも、もつと先を。蒼く澄み渡る空を。じつと、じつと。

（これから人の上にたつてえのに、なんて面だ）

アクサキは心の中で独り言ごちる

ハヤトとアカネは1年間の旅を通して8つのバッヂを集め、ポケモンの知識を蓄え、バトルの腕を磨いた。

大小関わらず大会では好成績を収め、ジョウト地方のポケモンリーグとも称されるシロガネ大会では決勝リーグまで進出。

ハヤトが優勝、アカネが準優勝と、若輩ながらも快挙を成し遂げる。2人の決勝戦は大変な盛り上がりを見せ、視聴率が3割を超えるほどに白熱したものだった。

そんな2人の血が滲むような努力が実り、リーグ委員会（ジョウト支部）からそれぞれひこう、ノーマルタイプのジムリーダーに任命され、今に至るのである。

しかし、本来ならば夢が叶った幸福感に染まっているはずの横顔は、耐え難い苦痛を受けているかのように歪んでみえた。

勘弁してくれと、アクサキはまたため息を吐いた。

「不安かよ」

「ああ…ああ？ 何が？」

「何がって、そりやジムリーダーのことだよ。来週からだもんな」

「いや、ああー…まあそうだな」

「気にするこたあねえよ、胸張つていけって。長年の夢が叶つたん

じゃねえか。お前のオヤジさんも喜んでるよ」

「…そうだな」

「そうだよ。『空の男になれ』って約束、立派に果たしてんだろ」

「だといいんだが…」

「大体な、お前はくよくよ考えすぎなんだよ。米も炊けねえ半人前のくせに」

「…米は関係なくないか」

「大丈夫だつてお前の実力なら。一番近くで見てきたオレが言うんだから間違いねえって。なんならオレも手伝うからさ。バトルは無理かもしけねえけど、書類整理とか結構得意だぜ、オレ」

「…」

「ま、そもそもオレみてえな野郎がジムトレーナーになれるか怪しいけどな、人相悪いし！そん時は裏口入社させてくれよ！ガハハハハ！」

「…」

「おーい、笑う所だぜー今の一。おいおーい」

あの手この手でハヤトを元気付けようとするアクサキの努力虚しく、ハヤトは俯いたままそよ風に吹かれている。万策尽きたアクサキも、気疲れでゲンナリしていた。

どれほどの時間が経つただろうか。

バトルで流れ出た汗はすっかりと冷えた。暖かくなつてきたとはいえたまだ若干の冷たさを残している風が更に体温を奪つていく。このままでは風邪をひきそうだ。そろそろ降りるべきだろう。

アクサキは帰宅の準備を始めた。

鼻歌混じりに、軽い足取りで。まるで、何もなかつたかのように。だから、決壊した。

「アクサキはさ」

ハヤトがポツリと、呟いた。

ともすれば風にのつて消えてしまいそうな声で。

しかし、ぼうふう雨のような荒ざを持ち合せながら。

「もう、バトルはやらないのか…？」

瞳を揺らしながら、言った。

「あーもう。だからそれどういう意味——」

「三年」

「あ？」

「三年だ」

「旅を終えてから  
夢を誓つてから」

「お前がセブンバッヂになつてから」

「もう三年経つた」

「なあアクサキ」

「イブキさんには、いつ挑むんだ？」

「——あ」

周囲の温度が、一段階下がる。

踏み込んだ内容、アクサキの地雷を的確に踏み抜いて詰めてくるハヤトに、アクサキは困惑し立ち尽くす。

膝を抱えたまま、ハヤトは動かない。それなのに、壁際までジリジリと追い込まれていると錯覚するほどの圧力がアクサキを襲つていた。

「慎重に進めるべきである事だと、俺もアカネもわかってるんだ。あんなこともあつたし、無理は禁物だという事もわかってる」

「お前にはお前のペースつてものがあるし、横から口を出すべきじゃない」

「そんなことはわかってる」

「でも」

「もう、そろそろ本気出してもいいんじやないかな」

そう言つて顔を上げたハヤトをみて、アクサキは絶句した。

能面のようく感情が見えない顔、惚れ惚れするように綺麗な空色の瞳には暗雲が立ちこみ、グラグラと揺れている。

マズイ。

本能が警鐘を鳴らす。

「何、言つてんだテメエ…オレは十分本氣で」

「嘘をつくな」

「お前があの程度なわけがない。いくら即席のパーティだからとはいえ、たつた2匹で勝てるはずがないんだ」

「キレを、勢いを」

「なにより勝利に対する執念を、昔まえに比べてほとんど感じなかつた」

「そもそも、なんで今だに即席のパーティなんだ。昔のお前なら、すぐに草むらへと繰り出していたはずだ」

「なあ、どうしたんだよアクサキ。どうしたんだ」

「俺と鎧よのぎを削ついていたお前は、どこにいつてしまつたんだ」

「あの時の気持ちはもうなくなつたのか」

「諦めないつて言葉は嘘だつたのか」

「答えてくれよ、アクサキ」

「なあ」

「アクサキ」

「どうしたら、ポケモンバトルをしてくれるんだ？」

反応できたのは、ほぼ奇跡のようなものだった。  
あるいは経験が活きたのか。

反射的に駆り出されたネストボールが、ハヤトの背後から飛び出してきたオニドリルと衝突する。

回転するクチバシに当たつたボールは砕けちり、中から飛び出してきたイワークがその巨体とぼうぎよ力をもつてアクサキを守る。

重さと衝撃に耐えきれなくなつた枝は音を立てて折れ、重力の赴くままに落下する。アクサキはイワークに咥えられ、ハヤトはエアームドに捕まりながらゆつくりと下降。

両者の体勢が整つたのは、いつのまにか出てきていたネイティオのみらいよちがイワークを沈めたときだった。

受け身を取りながら、倒れ伏すイワークを新品のボールに戻し、礼を言う。

さすがは畠四天王が一角。戦闘不能になる直前までアクサキを守りながら、無事に着地させた。ステルスロツク等の牽制行為もしつかりとこなした彼は表彰ものだろう。

普段は仲間から「団体だけ」「きのみを奪とりにくるポッポのたいあたりの方が痛い」「大人しくディグダだけ連れてきてくれ」「今日もゼニガメから逃げ帰つてきたんすかwww」と散々な彼は、渾身のドヤ顔をかましながら後続へとバトンを渡した。

なお、エームドのきりばらいにより一瞬でステルスロツクは消失した。世の中は非情である。

ハヤトが場を整えている間に、アクサキはパルシェンとオクタン、フォレ特斯を出して守りを固める。

パルシェンとフォレ特斯が前に立ち、オクタンが後方で控えるるべきの布陣。ルールが存在するポケモンバトルではみせない、野生を全面に出した彼らに、ハヤトは身を引き締める。

覚悟の上だつた。彼らが殺氣を浴びせてくることは。彼らにとつてはアクサキは大切な家族。家族がひどい目に遭わされたら怒るの

は当然のこと。今も、それそれが顔を真っ青にしたアクサキに寄り添いながら、背筋が震えるような眼で睨んでくる。

よりもよつてなんでおまえがと、睨んでくる。

それでもハヤトは止まらない。止まるわけにはいかなかつた。

心の臓へと放たれたオクタンほうを避けながら、一步踏み出す。

「弱くなつていくお前なんて見たくないんだ」

「傷付くお前を助けられないなんて、嫌なんだ」

震え、滝のように汗を流しながら荒く息を吐くアクサキ。ハヤトは淡々と言葉を投げかける。

「俺はもう迷わない」

執拗に、徹底的に攻め上げる。一つ、また一つと、ポケモンだけではなく、アクサキの持つているモノまで削りおとす。傷を上書きする。

「ジムリーダーになる者として、最初の責務を果たそう」

「引退しろ、アクサキ。トレーナーカードを置いてくれ」

「お前に、バツヂは渡せない」

そうして、目の前がまづくらになつた。

「そこまでだ」

気付いたらハヤトさんに背後を取られていた。

アカネさんとの戦闘中、しつこく粘ってきたミミロップにトドメを刺し、あとは司令塔を拘束するだけだった。勝ちを確信し、対策もせずに詰め寄ったのが仇となつたのだろう。その一瞬の気の緩みで、身動きを取れなくされた。

首筋にピジョットの翼を突きつけられる。カイリキーとカポエラーは動かない。動けない。動いたらどうなるか、分からぬほど私の手持ちは愚かではないからだ。

さらにはオオスバメとドードリオがいやらしい位置に陣取つていい。唯一ボールを繰り出せる位置だ。無理して手持ちを出しても、初撃を取られ、どちらにしろ不利。完全に主導権を握られた。

「すまない、随分と頭に血が上つていたようだつたからな。少々手荒だが、止めさせてもらつた。悪く思わないでくれ」

「それはどうも。それはそうと、ピジョット、オオスバメ、ドードリオはガラルへの入国を禁じられているはずですが」

「俺はジムリーダー。信用があるからな、ちゃんと申請すれば許可が降りる。そこの…有象無象とは訳が違う」

「…それは誰に対する発言ですか？」

「俺に聞くより、自分の胸に聞いたほうが早いと思うが」

身体中の血液が沸騰するかのような感覚に陥る。が、それによりも彼の言つた事を理解してしまう自分に嫌気が刺した。

「来るのが遅いねんハヤト。どこほつつき歩いとつたんや」

「うるさいぞアカネ。勝手に突つ走つて自爆した奴に文句を言われる筋合はない。俺が止めなきや明日の朝刊の一面向つてたぞ」

「そらそれでアクサキの記憶に一生刻み込まれるさかい別にかまへんけどな。棺桶にはオクタン堂のたこ焼き入れといてや」

「断る。アクサキの悲しむ顔なんて見たくない。ほら、かけらとキズぐすり。サイトウ、キミにも」

「ありがとうございます……。流石にそこまでするつもりはありませんよ」

「嘘つかんといでや。ウチに当てる気満々やつたやろ。こんな美人に躊躇いのう攻撃してくるなんて、どこでそのきもつたま学んできただん」

「どのような状況でも対応できるよう日々精進しておりますので」

「怖いわあ最近の子。なおさらアクサキのこと任せられへん」

「その言葉、そつくりそのままお返ししますよ」

「……はあ。ピジョットたちも、もういいぞ。戻れ」

ハヤトさんが手持ちを戻す。自由になつたが、ここでもう一度バトルを仕掛けるなんて無粋な真似はしない。双方に利益がない。私も手持ちを戻し、ボールに安全ロツクをかける。

背中に張り付いていた殺氣も、冷え込んでいた空気も霧散する。ひとまず、この場で血が流れることはなくなつた。ハヤトさんもアカネさんも対話の姿勢をとつてゐる。

ひとまずここは落ち着くべきだ。

「ほら、アカネも立て。いつまでも半べそかいてると跡残るぞ」

「ええもん、それでアクサキに心配してもらうんや。いーこいーこしてもらうんや。そのまま昔みたいに膝枕やらしてくれたりしてぐふふ」

「……どうやら栄養が頭に入つてないようですね。だらしのない身体になる訳だ」

「の割には、まな板ちゃんはお尻もお胸も足りてへんようやな。カツチンコツチンで、どうやつたらそれでアクサキを受け止めてやれるん？」

…………よし。

「カイリキー、彼女のダイエツトに貢献してあげなさい」

「ミルタンク、格差社会の哀れな被害者を軽う揉んだれ」

「揉んでも意味なんてありませんでしたよ！」

「そういう意味ちやうわ！」

「だからお前らやめろつて……はあ：胃が痛い……」

こうして、集中の森は地獄と化した。

それが今朝の出来事になる。

「で？ なにか？ それでダイキノコも取らずにノコノコ帰つてきたつてえことか、テメエは？」

「…面白ありません」

「ハツ！ 元氣があつて大変よろしいことだな、ジムリーダー様よお、え？ おい」

いつもと違い、おこつているアクサキさんが、顔に雑に消毒液を塗つてくる。

あのあと、取つ組み合いのケンカにまで発展した私たちは、再度ハヤトさんに止められ（その際に2回ほどハヤトさんが宙を舞つた）、渋々ながらも道場に戻つた。ダイキノコを集めることなどすっかり忘れて。

待ち受けていたのはもうそれは思い出したくもないほどの説教、説教、説教。ミツバさんには死ぬほど絞られ、マスターD師匠には爆笑された。

そうして、アカネさんと私の間には1日の隔離命令が出され、今に至る。

アカネさんは最後までアクサキさんに治療してもらおうと縋り付いていたが、笑顔のミツバさんとハヤトさんに連れて行かれた。目が笑つていなかつた。

「つう…アクサキさん、もう少し優しく塗つてください」

「ウルセエ。やつてもらえるだけ有難いとおもいやがれ。ボロボロになつて帰つてきた時、オレがどれだけ心配したかもしらねえで」

「心配してくれたんですか」

「するに決まつてんだろ。…なに嬉しそうにしてんだテメエ」

「顔に出ていましたか」

「相変わらずの鉄仮面だがな。はあ…つたく、慌てて損したぜ」

「おたま持ちながら転ぶアクサキさんも可愛かつツツツダア!?」

「はーいお薬ふやしておきますねえ。包帯も、巻いてつ、あげますからねえつー！」

「優しく！優しくお願ひしますつー!?」

圧迫止血も真っ青なアクサキさんの愛包帯を受け止める（少し力を入れたら弾け飛んでしまった。引いてるアクサキさんの顔も可愛かつた）。

その後も手際よく治療される。治療行為ゆえに彼との距離が近い。すごく良い匂いする。そういうえば匂いを好ましく思える相手とは身体の相性バツグンとかなんとか：優しい手つきで身体を触られているとか実質前戯では？一生続かないかなこの時間。

などと思っていると、不意に肩を引かれた。考えごとをしていたこともあり、バランスを崩して後ろから倒れる。しかし、その先に待つていたのは硬い床ではなく柔らかく温かい感触。アクサキさんの太もも、いわゆる膝枕。

膝枕。

「…ハツ。よっぽど疲れてんだな、テメエ」  
いつもなら逆に押し倒してくるのによお。

突然の出来事にこんらんして固まる私をよそに、アクサキさんが言う。その綺麗な目を細めながら、優しく私の髪を搔き分け、撫でてくれる。

「な、な、アク、サキさん」

「ほれ、動くな。くすぐつてえ」

「は、はい」

「ん。いい子だ」

さらさら、ぐしごし、ふにふに、ぺたぺた。

髪を梳すき、頭を揉み、耳をつづいて、頬を撫でられる。道場から吹き込む心地よい風に眠気を誘われ、しかし寝るのは流石に迷惑だと目を開けば、「ん？」と慈愛の表情で微笑むアクサキさんで視界が埋まる。

快感と幸福で頭を包まれる。この暖かい胸の苦しみが、一生続けば良いのにと心から願う。

今この瞬間だけは、ジムリーダーとしてのサイトウでも、武闘家としてのサイトウでもない。異郷の男性に恋する1人の少女として、私がいる。ここにいる。それがむず痒くも嬉しかつた。

「気持ちいいか？」

「…はい、とても」

「そりやよかつた」

「以前から思つていましたが、整体師の経験がおありで？」

「昔、寝付けねえつて泣く弟にやつてたんだ。そしたら他の奴らが、ずるいづるいぼくもあたしもつて騒ぎやがつてさ。数こなすうちに、自然とな」

「優しいですね」

「当つたりめえだろ。地元じや仮のアクサキで名が通つてたんだ」

「…私も、貴方みたいな兄が…欲しかつたです」

「…テメエみたいな出来の良い妹なんざゴメンだね。兄貴の立つ瀬がねえだらうが」

「兄さん」

「やめろ、すげえむず痒い」

「結婚しましよう兄さん。法律なんて壊して、共に愛し合いましよう」

「しかも兄離れできてねえタイプかい。ガキたちにもよく言われたわそれ」

「その話詳しく」

「急に落ち着くな。あとその目やめろ。怖いから」

「むぐ」

頬を強く揉まれる。意外に男らしいごつごつした手。たくさんの

豆跡と細かい傷がある、努力の手。

その中に、一際目立つ大きな裂傷痕に目が止まる。

「気になるかよ」

「あ、いや…すみません」

「謝んなくていい。目立つもんな、顔のやつと合わせてさ」

そう言つて、顔の中心にある大きな傷跡をなぞる。その時、決まってこの人は寂しそうな、悲しそうな顔をする。そして、それを誤魔化

すかのようふざけて笑うのだ。

それが、堪らなく嫌だつた。どうしてそんな顔をしなければならないのか、誰がそんな顔にさせるのが、怒りすら湧く。

そしてそれ以上に、自分なんかが触れてしまつたら、もつと悲しませることになるなどはないかと。

言い訳をし、怖がり、何もできない自分に嫌気がさした。

### 『ジムチャレンジは諦めてもらう』

だからこそ、踏み込んだ。

今こそ勇気を出す時だ。

「アクサキさんは…」

「あん？」

「アクサキはどうして、そんな傷を負つたのですか？」

「そりやあオレは男の中の男だからな、傷の一つや二つくらいないとカツコつかないというか」

「真面目に答えてください」

「――いやまあ、色々あつたんだよ」

「その色々が聞きたいんですね」

「おいおいサイトウ、随分来るじゃねえの。意外と秘密話とか好きだつたりするんだなお前も」

「…私には話せないのですか」

「話すも何も、大した話しじやねえからなあ。ただ旅してる途中にミスつて大怪我しただけさ」

いつのまにか、アクサキさんの手は私から離れ、しきりにハンカチを握っている。

どうやら、このまま続けても欲しい答えは返つてきそうにない。仕方ない。癪ではあるが、切り札を切るしかないようだ。

「アクサキさん、どうしても話していただけませんか」

「しつこいぞ、サイトウ。オレはなにも――」

「アカネさんと話しました」

「——」

「彼女、いろんな話をしてくれましたよ。アクサキさんの小さい頃のことや、それこそ聞いてもないようなことすらたくさん」

「…あいつは喋るのうまいからなあ。楽しかつただろ」

「ちつとも」

「手厳しいねえ…で、なんの話をされたんだ」

「あなたのトレーナー人生を終わらせるため、ここに来たこと」

「そして、あなたを叩き潰すのに協力してくれないか、と」

「そんな素敵なお話をしてくれましたよ」

「——なるほど、な」

大きく息を吐く。アクサキさんは、ひどく落ち着いているようだった。

やつとか。

そんな声すら聞こえてきそうなほどに、反応が薄い。あるいは諦観しているようだつた。

「驚かないのですね。仮にもあなたの親友が、あなたを踏み躡ろうとしているのに」

「まあ、な。アイツ…アイツらのことだし、アイツらなりの何か考えがあるんだろ。昔から、ちょっと視野が真っ直ぐいきすぎる所があつた」

「なんでそんなに落ち着いているのですか。このままじや、貴方の大好きなポケモンバトルができなくなるのですよ」

「いや、そりやオレだつて嫌だけどよお。ジムリーダーのアイツらがいうんだから、そう悪いことにはならないと思うけどな、オレは。そんな悪い奴らじやねえことはオレが一番知つてる」

「——つ、あなたのこと、弱いって言つてたんですよ！有象無象とも！」

「そりや、アイツらからしたらそれは唯の事実」

「——ゞゞツツ事実なんかじやない!!」

「――サ、サイトウ…？」

気づけば起き上がり、アクサキさんの肩を掴んでいた。押し倒す勢いで彼の瞳を覗き込む。珍しく弱々しい色をした目に、今回ばかりは怒りが湧いた。

「アクサキさんは弱くない！ 強い人だ！ 毎日毎日努力を欠かさなくて、決して諦めなくて、優しくて、親切で、根性があつて、ちよつと粗くて不器用で、すぐ自分のことを後回しにするけど、それでもいつも周りを気にして、みんなが笑顔になるように立ち回ってくれて、こんな私にもかまつてくれて、意外に身体ががっしりしてて、髪もサラサラで、いい匂いもするし、ふにやりと笑う顔が可愛くて、それでいて真面目な時の横顔はおどぎ話の英雄のようにかつこよくて、なによりあなたはポケモンを愛している！」

「お、落ち着けサイトウ。衝撃の事実にオレ嬉しい通り越してついていくてないから」

「ジムリーダーのいうことだから間違いない？ そんなものは知りません！ 私もジムリーダーです！ 誇り高きガラルの若きジムリーダー！ 向こうがあなたを否定するなら、私があなたを肯定します！ あなたは強いトレーナーであると！」

「え、う、うん。あ、ありがとう？」

「だからアクサキさん…そんな顔しないでください。そんな悲しいこと言わないでください。普段のあなたのように、そんなの鼻で笑い飛ばしてくださいよ。いくら大切なご友人としても、やつていいことと悪いことがあります。今回は悪いことです」

「だ、だがよお」

「大丈夫。もし向こうが実力行使をしてきても、必ず私がアクサキさんを守ります。守って見せます。指一本触れさせません。あなたの前に立ち続けます。だからお願ひです：諦めないでください。まだ私との勝負、終わっていないんですから」

「……」

目を瞑つて深く考え込むアクサキさん。何秒、何分、あるいは何十分経つただろうか。しようと思えばキスができるような近さで固ま

る私たちが動き出したのは、アクサキさんの深い深いため息と優しい抱擁だった。

「わかつたわかつた。とりあえず、テメエがオレのこと凄く認めてくれていることは伝わったよ。正直嬉しい。ありがとな」

「なら…」

「ああ。正直お前の話をどこまで信じていいかもわからんねえし、そんなことになると見えねえけど、もしそうなつたらオレなりにやつてみるよ。勿論、サイトウにも頼らせてもらう」

「本当ですか。嘘じやないですよね」

「ほんとほんと。嘘じやねえから。だから一回離してくれ。オレからやつた手前言うのもなんだが、テメエの力で抱きしめ返されると背骨が折れる」

「あともうすこしだけ」

「サイトウ」

「…わかりました」

名残惜しいがアクサキさんから離れる。なにより、話の流れが良い方向に向かって安心した。安心したとともに、どつと疲れと痛みが湧いてくる。

「あーあーもー、怪我人のくせに興奮するからだよ」

「すいません。つい」

「つい、じゃねえ。テメエ風呂入り直してこい。汗かいちまつてて包帯が巻きにくい」

「お風呂入つてきたら、膝枕、またやつてくれますか」

「んなもんいくらでもしてやるから、早く行つてこい。汗冷えて風邪ひくぞ」

「すぐ戻ります」

「肩までしつかりつかれよ。オレ布団敷いとくから…てかアイツ、傷の話は聞いていかなくてよかつたのかなあ…まあいいか」

アクサキさんは優しい人だ。優しく、心の強い人。

だからこそ、私が彼を支えなければ。絶対に、彼らに彼を渡さない。決意を胸に、私は浴場まで向かつた。

「それにしても、『守る』かあ…」